

識字学級に通う中国人渡日者の  
心理的援助に関する研究  
～共同生成される語りを通して～

2018

兵庫教育大学大学院  
連合学校教育学研究科  
学校教育実践学専攻  
(兵庫教育大学)

河合 篤史

## 目 次

はじめに	4
論文の要旨	5
第1章 問題と目的	8
1.1 夜間中学に通う生徒とは	9
1.2 識字学級に通う生徒とは	11
1.3 識字学級・夜間中学に関する歴史と諸問題	13
(1) 夜間中学の歴史	13
(2) 識字学級の歴史	14
(3) 識字学級・夜間中学をめぐる諸問題	15
1.4 渡日外国人について	17
1.5 渡日外国人に対する排除の論理	22
1.6 渡日外国人のメンタルヘルスについて	24
1.7 識字学級についての先行研究の概観	26
1.8 渡日する中国人について	34
1.9 研究の目的	36
第2章 方法	37
2.1 ライフストーリー研究について	38
2.2 共同生成される語りについて	41
2.3 研究対象の識字学級	43
2.4 筆者の立場	46
2.5 研究協力者	46
2.6 倫理的配慮	46
2.7 インタビュー手続き	47
2.8 分析方法	48

第3章 結果と考察	50
3.1 結果と考察	51
3.1.1 ケース1. Aさん(50代男性)の人生と解釈 (研究1)	51
(1) Aさんの人生の概要	51
(2) Aさんの人生およびその解釈	52
(3) Aさんの人生の考察	62
3.1.2 ケース2. Bさん(30代女性)の人生と解釈 (研究2)	64
(1) Bさんの人生の概要	64
(2) Bさんの人生およびその解釈	65
(3) Bさんの人生の考察	72
3.1.3 ケース3. Cさん(20代男性)の人生と解釈 (研究3)	73
(1) Cさんの人生の概要	73
(2) Cさんの人生およびその解釈	74
(3) Cさんの人生の考察	81
3.1.4 ケース4. Dさん(40代女性)の人生と解釈 (研究4)	82
(1) Dさんの人生の概要	82
(2) Dさんの人生およびその解釈	83
(3) Dさんの人生の考察	90
第4章 中国人渡日者の心理的援助の検討～転機の語りを通して～ (研究5)	
.....	92
4.1 研究の目的	93
4.2 研究協力者	93
4.3 分析の枠組み	94
4.4 結果と考察	96
(1) 渡日を決心したこと	96
(2) 日本での生活	99
(3) 識字学級の意味(筆者との間で共同生成された物語)	103
4.5 総合考察	107

第5章 結論	110
第6章 本研究の限界と課題	112
第7章 提言	115
おわりに	117
謝辞	119
引用文献	120

## はじめに

筆者は長年、小学校教員として教育に携わってきたが、いじめ・不登校といった学校を取り巻く心の問題も複雑化してきている。また、解決すべき学習に関連する問題も山積している。

そんな中、学習意欲の低下という問題もその一つである。国際比較において、日本の学力は上位ではあるが、学習意欲となると、下位となっている現状がある。一方で、発展途上国の子どもたちを描いたドキュメンタリー番組等で彼らが「学校に行きたい」「学校で勉強がしたい」と目を輝かせながらインタビューに答えている子どもの姿を見ると、教育に携わる者として考えさせられることが多い。

本研究で取り上げるテーマの舞台は、識字学級である。識字学級に通う生徒の多くは、戦後何らかの理由で中学校を卒業できなかった人たちや日本語が理解できない渡日して間もなくの人たちである。また、生徒の多くは、生活に困窮し生きることだけに精一杯で、学校教育を受けたくても受けられなかったと考えられる。さらに、学校教育を受けていないという現実には、生活をするための仕事の選択を制限されることにつながり、悪循環のスパイラルに追い込まれながら生きている人が多い。それにも関わらず、「学校に通いたい」「学びたい」という意欲を持って識字学級の門をたたく人々がおり、そこには、多くの生徒が生き生きと学んでいる姿がある。

このような問題意識を持ちながら、識字学級に通う中国人渡日者に焦点を当て、そのライフストーリーを読み解くべく本研究を進めていくことになったのであるが、筆者と研究協力者の間でどのような「物語」が共同生成されるかを検討することは、国際社会を標榜する日本社会にとって大変意義深いものとなると確信している。

## 論文の要旨

本論文は、次の7章で構成する。

### 第1章 問題と目的

本章の目的は、本研究における問題の所在を明確にすることである。

まず、研究のフィールドである、夜間学級・識字学級に通う生徒について述べた。彼らは、戦争や経済的理由等で学校に通えなかった個人の歴史がある。さらに、最近の傾向として、「ニューカマー」と呼ばれる渡日者が多数通っており、国際化する日本社会において看過できない問題であることが示唆された。次に、夜間中学・識字学級の歴史を概観した。その中で、渡日外国人に対する排除の論理が浮き彫りとなり、彼らがマイノリティとして日本社会で生きる困難さが示唆された。さらに、渡日外国人のメンタルヘルスが悪く、その課題が今日的課題であることを論じた。そして、本研究でインタビュー調査を行った識字学級を対象とした先行研究を概観した。その結果、識字学級を対象とした研究そのものが少なく、さらに心理臨床学的な観点からの研究が、筆者らが行った研究以外に見られないことが認識され、本研究の意義を改めて確認することができた。

### 第2章 方法

本章では、本研究の方法について論じた。まず、ライフストーリー研究法を用いる意義および聞き手と語り手の間で共同生成される語りの重要性について論じた。本研究が識字学級に通う生徒である渡日者とのインタビューを通して、人生および識字学級での学びの意味づけを丁寧に探っていくことを目的としているため、ライフストーリー研究を採用した。また、共同生成される語りを通して、当事者の内実の深淵を掬い取ることが可能となり、当事者自身の人生を深く丁寧に解釈するための最良の研究手法であることを論じた。次に、筆者の立場を明確にし、研究協力者との関係性を論じた。本研究が、一方的にインタビューした内容を分析するのではなく、筆者(インタビュアー)と研究協力者(インタビュイー)との間で共同生成されたライフストーリーを分析することの重要性が示唆された。さらに、インタビューにあたっての倫理的配慮について論じた。具体的には、インタビュー調査を開始する前に、同意書を提示し、同時に口頭での説明も行い、同意を得た上でインタビューを開始した。特に、

論文作成時には、プライバシー保護の観点から、個人名はもちろん、個人特定に結びつく可能性がある特定の地域・事象等に関しても匿名性が保たれるよう細心の注意を払った。最後に、本研究における分析方法について論じた。本研究では、ライフストーリー研究の枠組みの基でシーケンス分析を行うこととした。具体的には、インタビューで交わされた会話を全て忠実に起こし、文脈の流れを読んでいくことになる。本研究のインタビュー過程がインタビュアーとインタビューイの共同作業的な構築過程であり、研究協力者の語りだけでなく、筆者の語りを含む共同作業全体を分析・考察することが重要であることから、シーケンス分析を行うことにより、識字学級に通う中国人渡日者の内面に焦点を当てることが重要であることが示唆された。

### 第3章 結果と考察

本章では、筆者と研究協力者とのインタビュー内容を分析・考察していった。また、研究協力者4名の各単一事例ごとに分析・考察することにした。単一事例として研究する意義は、複数の対象者から得た「データとしての語り」を分析することによる、抜け落ちてしまう当事者の思いについても焦点を当てることができるからである。その結果、当事者の内実の深淵を掬い取ることが可能となり、当事者自身の人生を深く丁寧に解釈することができた。考察の結果、渡日者にとって識字学級が心安らぐ場所として機能していることが明らかとなった。

### 第4章 中国人渡日者の心理的援助の検討～転機の語りを通して～(総合考察)

本章では、研究協力者各4名とのインタビューを「転機の語り」に焦点を当てて、総合的に分析・考察していった。具体的には、研究協力者との半構造化面接を通して、彼らがどのような心理的プロセスを経て日本で生きていく人生を選択するに至ったのかを明らかにすることを第一の目的とした。そして、彼らの人生の中で、識字学級をどのように意味づけるのかを検討することを通して、渡日者の心理的援助の可能性を明らかにすることを第二の目的とした。その結果、彼らの語りは、①「渡日の決心」、②「日本での生活」、③「識字学級への参加」の3つの転機に分けられた。そして、聞き手(筆者)と語り手(研究協力者)の間で共同生成された語りのプロセスは、渡日者への心理的援助につながる可能性が示唆された。

## 第5章 結論

本章では、これまで不可視であった渡日者が日本で生きていく困難さについて、本研究で導き出された結論を述べた。結論は次の3点に要約された。すなわち、①渡日者にとって識字学級が「安全基地」として機能している、②彼らの語りは、1.「渡日の決心」、2.「日本での生活」、3.「識字学級への参加」の3つの転機に分けられ、未来に繋がっていく、③渡日者の公的なサポート体制の構築が真の国際社会に繋がる、である。

## 第6章 本研究の限界と課題

本章では、本研究の限界と今後の課題について論じた。本研究では、筆者と研究協力者の関係の中で紡ぎ出される物語を検討することができた。そして、日本人が渡日者の苦労を理解し尊重する姿勢で、ライフストーリーを共同生成するプロセスが彼らの生きる意味づけや心理的援助に貢献できる可能性も示すことができた。しかし、この結果は少数の対象者から得られたものであり、本研究の結果をもって一般化することは難しい。今後は、①他の事例についても同様の分析を進めていくこと、また、②量的研究も行うこと、を通して研究の一般化に繋げていく必要もあると考えられる。さらに、心理的援助を潜在的に求めている識字学級に通う渡日者に対する、援助システムの構築に向けた研究も今後の課題であると考えられる。

## 第7章 提言

本章では、第5章の結論に基づいて、「識字学級」で学ぶ渡日者への心理的援助および学習サポート体制について提言を行った。すなわち、①公的資金の投入、②学生のボランティアスタッフの充実、③渡日者の心理的援助の充実、という3つの事項が必要とされており、そのことは真の多文化共生に繋がり、ひいては日本の学校教育の再生にも繋がると期待される。

# 第1章 問題と目的

## 第1章 問題と目的

### 1.1 夜間中学に通う生徒とは

日本の義務教育の就学率はすでに1961年に99.8%に達している(文部省調査局1962)。また、日本における識字問題では昭和39年(1964年)のユネスコの調査に対し当時の文部省は“日本では識字問題は完全に解決済みである”“現状においては、識字において、識字能力を高めるために特別な施策をとる必要はまったくない”と回答している。しかし、今もなお何らかの理由で中学校を卒業できなかった人たちが中学校夜間学級(以下夜間中学)で学んでいる現状がある。また、内山(2004)は、識字について、“識字とは、表現とコミュニケーションの力を身につけることを通して、自己表現(アイデンティティ)を確立することである”として、文字の習得そのものが目的ではないことを示唆している。

ところで、公立夜間中学は2017年現在、全国に31校(東京8, 神奈川2, 千葉1, 大阪11, 兵庫3, 京都1, 奈良3, 広島2)あり1687人が通っており、そのうち外国人の生徒が約8割を占め、中国籍(568人)の生徒が圧倒的で、ネパール籍(225人)、韓国・朝鮮籍(202人)、ベトナム籍(122人)、フィリピン籍(108人)と続き、主にアジア諸国の国が目立っている(文部科学省, 2017)。また、全国夜間中学校研究会(2004)は「夜間中学生が学齢時、義務教育を受けることができなかった原因のほとんどが戦争である」と指摘している。夜間中学校設置は、1947年の新学制(6・3制)の導入と同じ時期である。しかし、「法」に基づいて文部省が設置したものではなく、「義務教育から疎外された人々の教育を要求する声に対して、当時の教員が自主的に学ぶ場を設けたもの」(栗田, 2001)、「市民の『運動』により制度化された教育制度」(全国夜間中学校研究会, 2004)なのである。このように、夜間中学で学ぶ人たちは、歴史や国籍、社会情勢に翻弄され、日本の社会システムの狭間で生きざるを得ないマイノリティと言える。

実際に、夜間中学生の多くは、生活に困窮し生きることだけに精一杯で、学校教育を受けたくても受けられなかった。さらに、学校教育を受けていないという現実には、生活をするための仕事の選択を制限されることにつながり、悪循環のスパイラルに追い込まれながら生きてきた人が多い。また、栗田(2001)は、夜間中学生について“文字情報が社会のいたるところに氾濫している現代におい

て、『よみ・かき』の基礎学力が欠落しながら社会生活を送っていくことの難しさは容易に想像でき、日常生活の困難さとそれに伴う精神的苦痛は計り知れないものがある”と述べている。

## 1.2 識字学級に通う生徒とは

夜間中学と同様に、識字学級に通う生徒がいる。国際化が急速に進む日本において、「識字学級」に通う外国人が増えてきている。棚田(2011)によると、2010年現在、全国で198の識字学級が把握され、2745人が学習している。また、先の夜間中学とは異なり、学習者のほとんどは日本人学習者であるが、地域性により異なるが、都市部では約2割(19%)を外国籍の学習者を占め、特に大阪では外国人の学習者が3割を越えている(33.7%)実態も報告されている。さらに外国人の学習者の国籍は、中国籍(106人)、フィリピン籍(89人)、韓国・朝鮮籍(51人)、ベトナム籍(51人)と続き、夜間中学同様、中国籍を筆頭にアジア諸国の国が目立っている。

「識字学級」は、何らかの理由で学校に行けなくて文字の読み書きの不自由な人々が、成人してから文字の読み書きを学ぶ場であり、元々、部落解放運動の一環として始まった。しかし、近年その様相も変化しつつあり、新しく渡日する外国人(以下、ニューカマー)と呼ばれる外国人が増加し、識字学級が「国際化」してきた現状がある。例えば、渡日間もない日本語もほとんど分からない状態でやってきた学習者に対する学習支援者の配慮のなさが、学習者を傷つけるという事例も報告されている(新矢, 2011)。これらの課題に対して山田(2008)は、学習支援者が「対話」の能力を身につける必要性を指摘し、“識字学級はすべての人のアイデンティティを守り、その人のままで受け入れる場である必要がある”と述べている。また田中(2008)は、学習者と学習支援者を「共に学ぶ者」と位置づけ、“安全で安心な居場所であり、共感をもった傾聴による承認が行われ、そのことによって自己肯定感の醸成を大切にすることの重要性を述べている。さらに、福島(2004)は、識字学級について「よい居場所として重要な意義がある」としている。

近年増加する「ニューカマー」について、棚田(2011)は“ニューカマーの多くは、異国の地である日本社会で「非識字」の状態にならざるを得ない”とし、「外国人」というだけで非識字の状態にあると指摘している。つまり、日本経済を下支えする役割を担っているにも関わらず、日本の教育システムから切り離されたマイノリティなのである。この現状を踏まえ、彼らが識字学級に通いながら日本で生活を送っている現実に向け、彼らの生きる意味を明らかにして

いくことは、時代的にも求められると考える。さらに、マジョリティに属する日本人にとって、真の多文化共生を考える上で示唆を与えるものとなると考える。

### 1.3 夜間中学・識字学級に関する歴史と先行研究

#### (1) 夜間中学の歴史

戦後の1947年、新学制(6・3制の義務教育)がスタートした。ところが、新制度が始まったにも関わらず、貧困のため学校に行けない人は多数いた。昼間は生活のため働かざるを得なかったためである。そこで、現場の教師たちが自主的に学ぶ場を設けた。夜間中学の設置は、大阪市立生野第二中学校での「夕間学級」に始まった。当時は電力事情が悪く、まだ陽のある夕方を勉強する時間に当てていたため「夜間」ではなく「夕間」という名前がつけられたのである(大多和, 2017)。

夜間中学は「法」に基づいて文部省が設置したものでなかったため、行政との折り合いは悪かった。しかし、現場教師たちや世論の支持などもあり、年々夜間中学は増加し、1954年の夜間中学設置数のピークを迎えることとなる(学校数 87)。ところが、それ以降は一転して減少に転じていく。その理由として栗田(2001)は「経済が敗戦後の危機的水準から脱却し、戦前並みの水準へ回復したことや、就学援助制度が整ってきたことにより、不就学・長欠生徒が減ったからであるといわれている」ことを指摘している。さらに、1966年には行政管理庁が文部省に対して「少年労働者に関する行政監察結果に基づく勧告(夜間中学早期廃止勧告)」を出すに至った。この勧告の内容は、行政管理庁が文部省に対して「夜間中学は学校教育法に認められていないので、設置自治体はなるべく早くこれを廃止すること」を指導するよう勧告したものであった。

この流れに立ち向かったのが高野雅夫という人物である。高野(1993)は行政管理庁の勧告を「死刑宣告」と受け止めて、映画「夜間中学生」を自主制作し全国で夜間中学廃止反対の運動を展開した。やがて世論の支持も得られ、この運動が実を結び夜間中学減少に歯止めがかかり現在(35校)に至っている。これらの夜間中学の歴史を通して、森(2005)は「そこ(夜間中学)は戦後日本の縮図であり、現在日本の矛盾が凝縮した場所」であること指摘している。

このように、夜間中学に通う生徒同様、夜間中学そのものも日本教育の狭間に追いやられたマイノリティ文化であると言える。

## (2) 識字学級の歴史

第二次世界大戦前から義務教育制度はあったが、差別や貧困等で学校教育を十分に受けることができない人々が多数存在したことを受け、識字学級が部落解放運動の一環として始まり、1960年代に福岡県で最初に開設され全国に広がっていくこととなった(棚田,201)。

その後1990年代頃からニューカマーが増えると共に、識字学級も国際化するようになってきた(野山,2004)。また、1990年は「国際識字年」、それに続く2003年～2012年の「国連識字の10年」の影響で、この時期新たに開設された識字学級もあった(棚田,2011)。これら識字学級の国際化に対して、新矢(2011)は、“国際交流的な意味合いが濃くなる外国人の参加は控えるべきではないか、という意見が担当者間で出ていたようである”とし、“彼らの学習の場を提供することは基本的な人権を守ることにつながることであり、識字学級の設置目的の中心軸であると再確認し、受け入れを継続することになった“としている。さらに、新矢(2013)は、“日本で定住を前提とする外国人は、日本語を習得することが生きていくうえで必須にもかかわらず、学習機会が必ずしも保障されていない”とし、そのような人びとにとって識字学級が日本語を学ぶ貴重な場になっていると指摘している。また成(2003)は、“「多文化共生教育」の中心軸の一つが人権である”としている。ただし、識字学級が国際化・多様化するとともに、「学習者の人権を守る」という理念を具現化していくことの困難さも指摘されている。

### (3)識字学級・夜間中学をめぐる諸問題

これまで、戦争・差別や貧困等で十分に教育を受けられなかった人びとに対して、識字学級・夜間中学がその受け皿になっていることを述べてきたが、本節では、識字学級・夜間学級の抱える課題について論じることにする。

まず、財政面の課題がある。識字学級は元々部落解放運動の一環として始まったのだが、古川(2013)は、2002年の同和対策事業特別措置法の失効とともに、“同和対策事業は一定の成果を得た”として、識字学級を含む事業を廃止する自治体も出てきたとし、“行政が今後識字をどのような施策として位置づけるかが課題である”と指摘している。自治体による違いを示したものは以下の通り(表1.)である。

表1. 自治体による識字学級に対する財政支援	
	識字学級にかかる行政の関わり等
A市(近畿地方)	地域内にある識字学級が廃止される
B市(近畿地方)	7学級あった識字学級が2学級に減少。残っている識字学級は地元の教員や運動団体に支えられ続けられている。
C市(中国地方)	人権センターの職員が有期雇用になり、継続的、長期的な関りが求めなくなってきた。
D市(近畿地方)	市の施設で識字学級を運営。施設には市の学校教員が配置され、主に識字学級や教育事業を担当しており、施設の事業としても識字トップに位置づけられている。
E市(九州地方)	行政職員が識字学級に参加するのは研修の意味合いもあり、謝金も出されている。
F市(九州地方)	識字学級にかかる謝金や消耗品、見学等のバス借り上げ料など予算化もされている。
	(古川がまとめたものを筆者が表に改編)

また、夜間中学においても、同様の課題がある。夜間中学に通う生徒は、戦

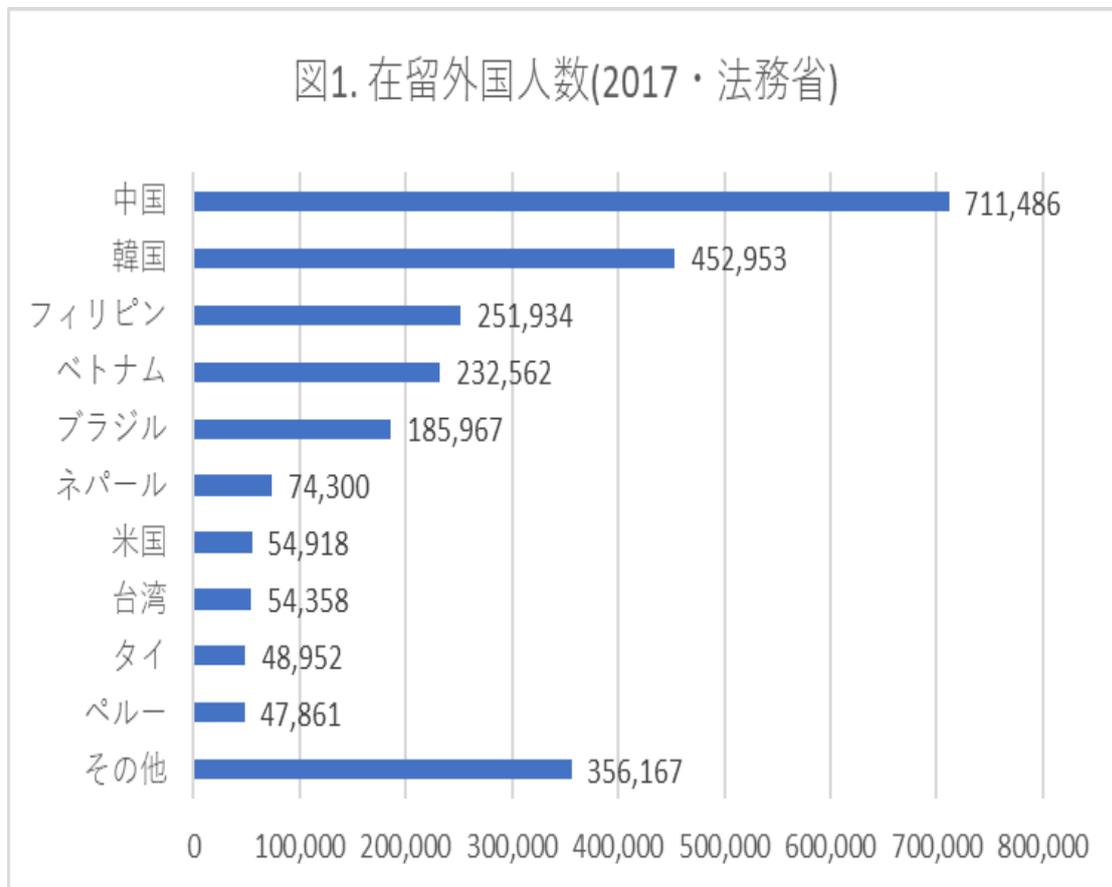
争や貧困等で義務教育を受けることができなかつた学齡を超過した生徒であるが、大多和(2017)は、政府の見解として“提供する義務教育はあくまでも「学齡児童生徒」が対象であるとしており「学齡超過者」に対して、“積極的な策を講じていない”と指摘している。実際に、全国にある夜間中学は、公立以外に自主夜間中学が存在し、公立化を目指して運動している報告もなされている(松戸市に夜間中学校をつくる市民の会，2015；埼玉に夜間中学を作る会，2016)。

次に、識字学級・夜間中学の学習者の「国際化」への対応課題がある。これまでは、戦争や貧困で教育を十分に受けられなかつた人々が学習者の中心であったが、ニューカマーの増加により、識字学級・夜間中学に通う学習者も増加してきた。特に夜間中学に通う学習者も増えてきた。この問題に関して棚田(2011)は“「新しい」学習者にどう向き合うかということ”の重要性を指摘している。さらに、新矢(2013)は、学習者が識字学級で文字が読み書きできない不自由さから解放されるだけでなく、学習を通して“日本で生きていく「自信」や「笑顔」を得ること”の重要性を述べている。

さらに、ニューカマーの子どもたち、そして、複雑化する現代社会において問題化している、いじめ・不登校や障害等により夜間中学で学ぶ学習者といった「若年化」の課題がある。このことについて、田中(2016)は、“様々な理由で学校教育を受けられなかつた学習者に必要とされるスキルは、読み書きことばの学習にとどまらず、生活面での支援まで行う場合がある”とし、相談内容を受け止めつつ、ソーシャルワーク的な活動についての支援も視野に入れていく必要性を指摘している。

#### 1.4 渡日外国人について

国際化が急速に進む日本では、来日する外国人は年々増加、平成 29 年 6 月現在における在留外国人数は 247 万 1,458 人となり、過去最高となった(法務省、2017)。以下は、それを示したグラフである(図 1.)

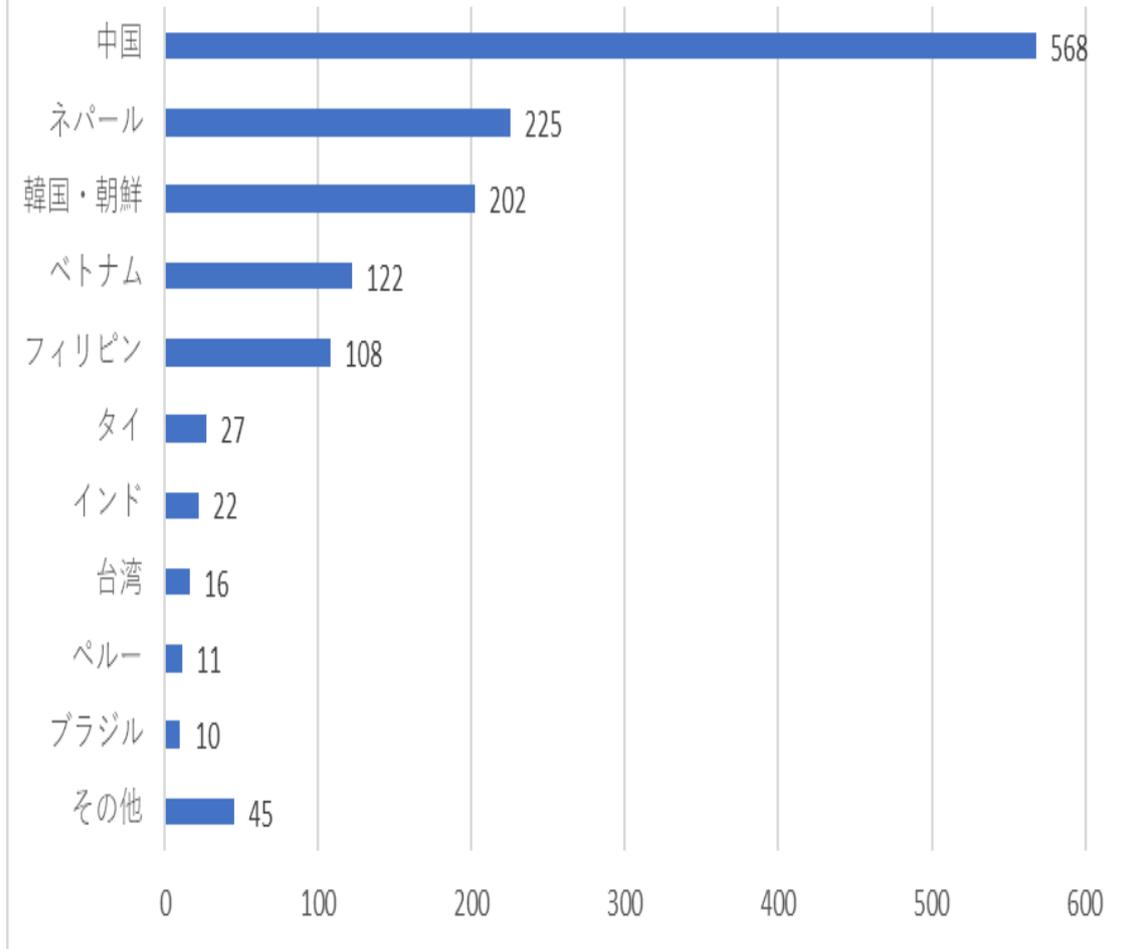


(2017:法務省のデータを筆者がグラフ化)

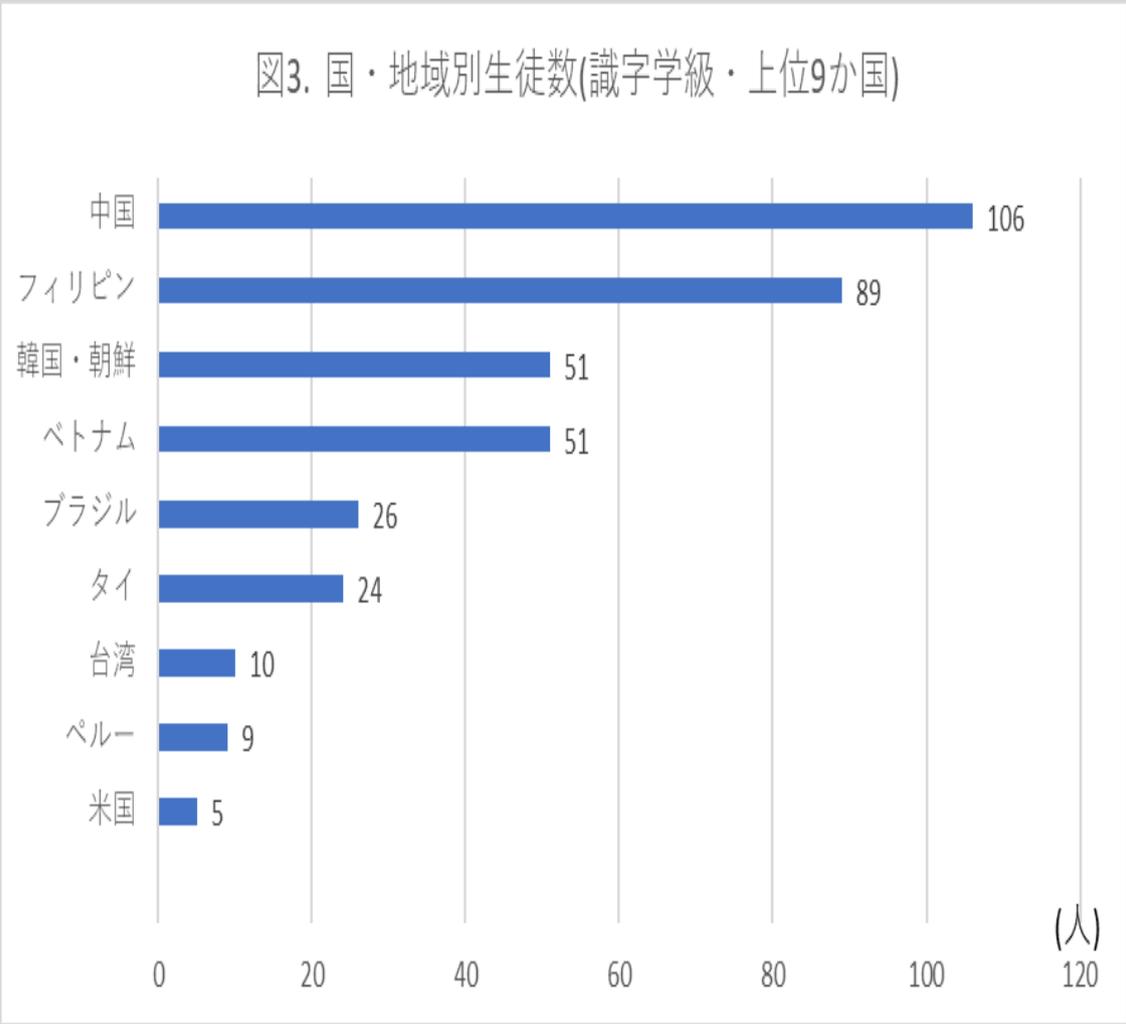
このことは、日本が外国人との共生について今後益々考えていく必要性があることを示している。しかし、多文化共生という言葉とは裏腹に、渡日者の現実は厳しく、過酷な個人史を経て生きているという現実がある。

この状況の中、渡日外国人が生徒として識字学級・夜間中学に通っていることは前章で示したが、それをグラフ化したものが以下である(図 2. 図 3)。

図2. 日本国籍を有しない者の国・地域別生徒数(夜間中学)



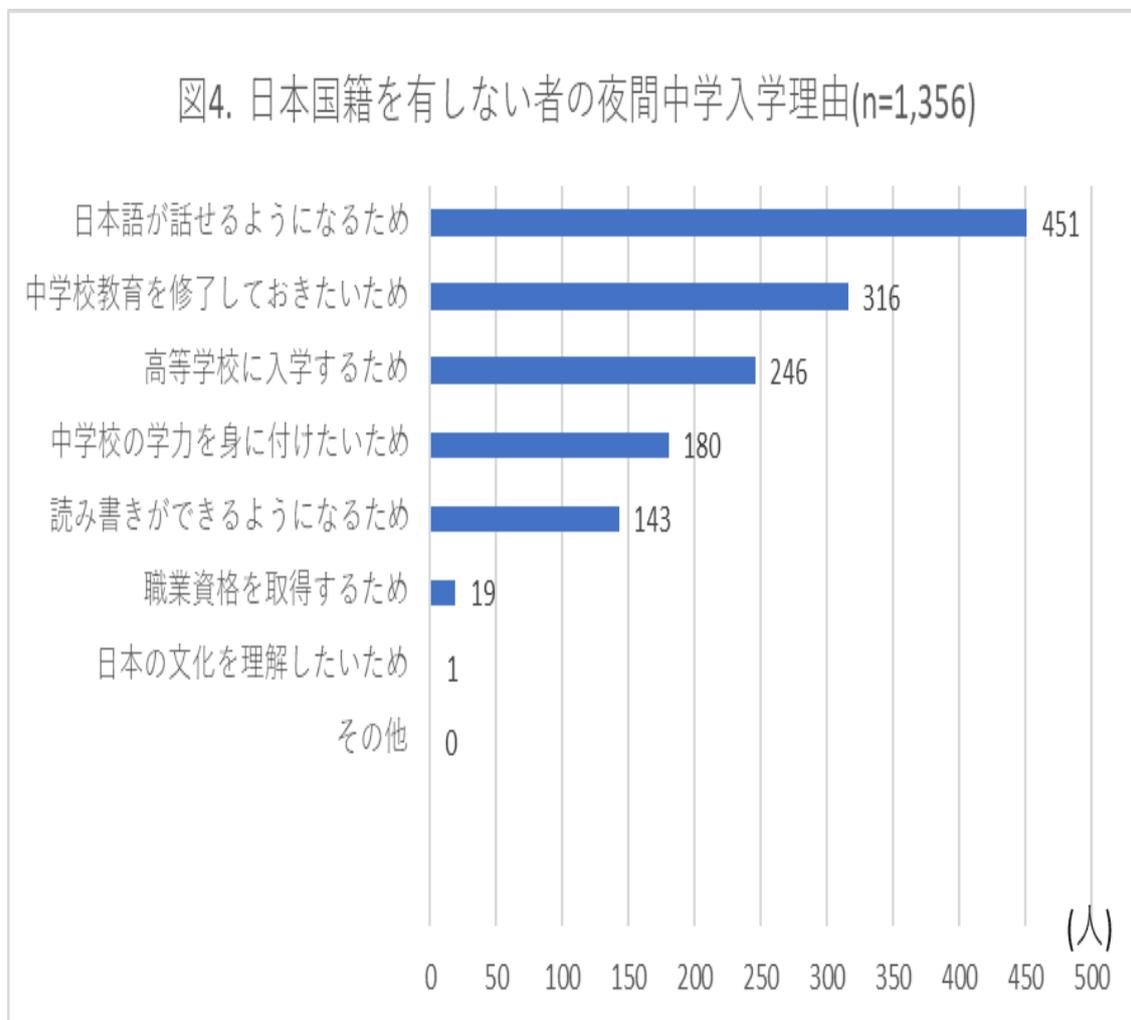
(2017:文部科学省のデータを筆者がグラフ化 n=1,356人)



(2011: 「全国識字学級実態調査」 から棚田がまとめたものを筆者がグラフ化)

これらのデータから、渡日数、識字学級・夜間中学の生徒数とも、渡日中国人の割合が最も多く、アジアの国々が目立っていることが分かる。

次に、渡日した外国人が識字学級や夜間中学に通う理由について考えてみることにする。下記(図 4.)は夜間中学に通う外国人の入学理由を示したものである(文部科学省, 2017)が、何よりも「日本語が話せるようになりたい」との願いが読み取れる。



(2017 文部科学省)

これに関連して、野山(2004)は、ニューカマーの人びとに対する日本語教育や言語学習支援の基盤となる考え方として、

- ① 外国籍住民が日本社会に適応するだけでなく、日本社会の側からも自ら変わっていくということが大切であること
- ② 外国籍住民に対する学習支援の場とは、支援者側も相手から学び対等な関係を築くことができるような相互学習の場であり、自立と自己実現につながる、生きるための学習の場であること
- ③ 言語学習の支援の過程で、学習者と支援者が共同作業を展開したりしながら...新しい日本語教育の在り方を模索することは、外国人の地域社会での自立と自己実現に繋がり、ひいては、積極的社会関与や参加の力付け(エンパワメント)や、外国人にも日本人にも住みやすいまちづくりにも繋がっていくということ

という3点の重要性を指摘している。

## 1.5 渡日外国人に対する排除の論理

(公財)人権教育開発センター(2017)は、渡日外国人の差別の実態について報告している(表 2.)。また、識字学級・夜間中学に通う学生は、日本の教育制度におけるマイノリティであり、マイノリティであるがゆえに社会から排除や差別されてきた存在であるが、このことに関して赤坂(1981)は、“人は誰でも排除や差別をする可能性があることに気づくことが必要だ”と指摘している。排除や差別は決して特別なことではなく、人が生きていく中でいつでも起こり得る普遍的な現象であること自覚する必要がある。

差別の内容	割合	人数
過去5年間の間に日本で住む家を探した人のうち、外国人であることを理由に入居を断られた人	39.3%	804人/2,044人
過去5年間の間に日本で仕事を探したり働いたりしたことがある人のうち、外国人であることを理由に入居を断られた人	25.0%	697人/2,788人
過去5年間の間に外国人であることを理由に侮辱されるなど差別的なことを言われた経験のある人	29.8%	1,269人/4,252人

(2017:人権教育開発推進センター調べをもとに筆者作成)

まずはじめに、例えばいじめに関して赤坂(1981)は、“あきらかな差異の具現者が存在するから、いじめがおこるわけではない。むしろ差異はあらかじめ存在するのではなく、その都度発見され、つくられるのである”とし、人々のこころの中に排除の論理が働いていると指摘している。また、自閉症者施設の建設をめぐる近隣住民の反対運動を論じる中で“はじめに自閉症に対する偏見が存在したわけではない。その偏見ゆえに、事件が招来されたわけではない”とし、偏見とは“異質なものに遭遇したとき、対象との差異を自己との関わりにおいて鮮明に把握しようとしてとめることなく、旧来の諸カテゴリーの鋳型に封じ込めようとするか、あるいは、関係の構築自体を断念して忌避しようとする心理的な硬さの謂にほかならない”としている。

次に、好井(2009)は“差別する人間は即座に否定すべきものというイメージだ

けが繰り返し確認されている”現代社会に警鐘を鳴らし，“人々がいかに差別的な日常を生活しているかを見つめ直していく必要がある”と述べている。そして、差別的な日常を見直すためには、自分自身の意味づけが“普通なもの”かどうか、“過剰な決めつけ”や“ゆがめられた思い込み”がないか問い直すことの重要性を説いている。

第3に、マジョリティが様々なマイノリティに示す「寛容」が抑圧の形態となり得ることに留意する必要がある。この点に関して風間(2009)は、近年の同性愛への「寛容」の風潮について、「個人の自由」という表現を取り上げ言及している。“多くの場合「個人」は具現性を欠いた抽象的な個人ではないだろうか。”とし、縁もゆかりもない「個人」だと考えるから容認できるとしている。しかし、身近な人が「同性愛」であるとき家族や友人から肯定されることは非常にまれだとし、“「個人の自由」という承認に見られる寛容の表明は、差別—被差別の関係にも通ずる非対称性を再び刻印してしまう危険性をはらんでいるのである”と指摘している。

赤坂(1981)は、上記のことを前提とした上で“自己と異質なもの=異人に向けた奇異感・異物感に包まれた眼差しと、自己の存在の位相より低い場所にある者として他者を卑賤視する眼差しとは、厳密に区別される必要がある”とし、“名付けられざるままに、わたしたちの内奥に沈められていた内なる他者に息を吹き込み、それをわたしたちはいわば未来にむけて可能性として行きなおす。それゆえ、異人との出会いは、みずからの外縁をおしひろげ、自身の生の枠組みをこえてあらたに関係世界を再編する機会であるといわねばならない”という示唆を与えている。

## 1.6 渡日外国人のメンタルヘルスについて

国際化が急変する中で、李(2012)は外国人労働者について、江(2013)は外国人留学生について、彼らのメンタルヘルスが好ましくない状況にある現実があり、彼らのメンタルヘルスを維持・向上させる必要性を指摘している。これは、益々国際化し共生を目指す日本において看過できない問題である。これらに関連して、高等学校や大学の留学生を対象とした研究は、理論的研究だけでなく、事例を基にした、質的研究もなされてきている(竹山,2008;大橋,2011)。

一方、「ニューカマー」と呼ばれる渡日者は日本経済を下支えする役割を担っているにも関わらず、日本の教育システムから切り離されたマイノリティである。そして、一條(2015)は“日本では、主に外国人留学生を対象に研究が行われている”と指摘し、“学校に属し、組織的なサポートを受けることができる前提でない”外国人の適応に焦点を当てた研究の必要性を述べている。実際、2016年度に行われた外国人住民調査報告書(人権教育開発センター, 2017)では、外国人であるが故に受けた差別について、回答者の72.7%がどこにも相談できていない実態があることを指摘している。

また、外国人労働者について李(2012)は、“メンタルヘルス上の問題は認識されているが、外国人労働者を対象とした支援および心理学的な研究はほとんどなされていない”現状を、大西(2014)は在住外国人の心理的援助について、“どのような課題があるか、またどのように課題に対応可能か具体的な議論は遅れている”と指摘している。

ところで、渡日外国人の多くはアジアの国々からであるが、山田(2010)は、“自分が困っていることを他人に言わずに自分の心の中におさめてしまうか、中国の両親に相談することが多い”とし、困っていることを日本人や第三者に知られたくないという、中国人留学生の特徴を指摘している。これらの問題点に関して、大西(2014)は、心理的援助を行う上でコミュニティの成員の参加・協働の重要性を、また特に危機介入の理論的枠組みに関して大橋(2016)は、“地域社会にいる非専門家を大切にし、非専門家的協力者の養成やコンサルテーションを通じた援助を行いながら、地域社会のネットワークを強化すること”の重要性を指摘し、コミュニティ心理学の視点を入れた援助の必要性を述べている。

さらに、原田(2003)は、夜間中学の実情を紹介し“教師周辺では日本語による

活発なコミュニケーションが行われているが、生徒から教師へ話しかける場面は、社交的な数人の生徒を除いてそれほど多くない”とし、相互コミュニケーションの必要性を述べている。

## 1.7 識字学級についての先行研究の概観

本研究は「識字学級」を対象としているが、本節では、現在までの「識字学級」を対象とした研究を概観することとする。

CiNii の論文検索(国立情報学研究所)で「識字学級」をキーワードとして論文検索を行ったところ、1968年～2017年までの全掲載論文が78編、そのうち執筆者(個人および団体)が確認できる論文が下記の70編であった(表3.)。

表3. 「識字学級」をタイトルに含む論文

	著者 (年号)	タイトル	掲載雑誌名
1	村上 博光 (1968)	字を学ぶおとなたち--ある識字学級の報告(特集・生活現実と学習内容)	月刊社会教育
2	村上 博光 (1968)	字を学ぶおとなたち--ある識字学級の報告(生活現実と学習内容(特集))	月刊社会教育
3	林 力 (1970)	福岡の識字学級(同和教育を進めるために(特集))--(同和教育実践事例)	社会教育
4	小提 久子 (1970)	教育と私たち〔福岡県の識字学級生手記〕	社会教育
5	村上 博光 (1972)	成人における解放教育論ノート：識字学級運動を例として	教育学論集
6	神野 直人 (1972)	あすなる・こだま学級のあゆみ--福岡市老岐公民館における識字学級の経過(第12回社会教育研究全国集会のために--実践報告)	月刊社会教育
7	松岡ハツエ [他] (1972)	「わたし、領収証を書けるんですよ」--福岡における識字学級のあゆみ(福岡の部落解放運動(特集))	部落解放
8	松崎 一 (1974)	部落の解放をもとめて--識字学級からの報告(特集・人権にねざす社会教育)	月刊社会教育
9	松井ツルエ	識字学級のこと・ある夏の日に・世間体(反差別戦線)	新日本文学

	(1976)	の構築と文化の闘い<特集>	
10	東義和 [他], 宮谷憲, 村上 博光, 柳久雄 (1979)	炭坑閉山と解放(識字)学級運動: 福岡県・川崎町の場 合	大阪教育大学 紀要. IV, 教 育科学
11	部落解放同盟 奈良県連合会 初瀬識字学校 (1981)	灯火(ともしび)--初瀬識字学級の歩み(各地の識字か ら)(識字運動の原点をふりかえろう<特集>)	部落解放
12	蛇草識字学級 (1983)	文集「はぐさ」(識字部門特別奨励賞)(第9回部落解放 文学賞)	部落解放
13	日野 範之 (1986)	自力の識字学級へ--第2回全国識字経験交流会開く	部落解放
14	坂根 政代 (1988)	「昔のうた」のほりおこし--識字学級の取り組みから	部落解放
15	坂根 政代 (1989)	鳥取 西円通寺支部識字学級--より人間らしく生きる (国際識字年にむけて<特集>)--(うちの識字・うちの学 級)	部落解放
16	岩井 好子 (1989)	大阪 私設識字学級「麦豆(むぎまめ)教室」--わたしが 一番きれいだったとき... (国際識字年にむけて<特集 >)--(うちの識字・うちの学級)	部落解放
17	岡本 次男 (1989)	国際識字年にむけて--識字学級入門の記--識字学級は 人間学級	部落解放
18	松藤 司 (1990)	地域教材の授業を法則化する--「識字学級」の実践から (人権教育の「法則化」は可能か<特集>)--(人権教育に どう取り組むべきか--授業展開での取り組み)	現代教育科学
19	岩井 好子 (1990)	大阪識字学級「麦豆教室」(国際識字年<特集>)--(識 字運動のなかで)	教育評論

20	大沢 敏郎 (1990)	識字・からだ全身の人間の学び--横浜・寿識字学級 (国際識字年<特集>) -- (識字運動のなかで)	教育評論
21	桑原 昭徳 (1991)	「書くこと」の教育的意義-2-識字学級生と幼児の作品の考察から	研究論叢 第3部
22	加藤 有孝 (1991)	公民館における識字学級の実践について--東京・福生(ふっさ)市公民館松林(しょうりん)分館のことばの会から (「おとなの学び」をとらえなおす<特集>)	月間社会教育
23	神奈川県川崎市ふれあい館日本語識字学級 (1992)	部落解放第5回全国識字経験交流集会特別報告--ともに学びあう場から	部落解放
24	原 千代子 (1992)	社会教育実践--生活の場で、ともに学びあう--川崎市ふれあい館識字学級の実践から (日本の社会教育 1992) -- (日本の社会教育 1992)	月刊社会教育
25	村上 博光 (1993)	ドキュメント社会教育実践史<戦後編>-20-識字学級運動	月刊社会教育
26	原 千代子 (1995)	生活の場で学びあい,生きる力を--川崎市ふれあい館識字学級の実践から (再び学力とは何か<特集>)	教育評論
27	長沢 成次 (1995)	千葉県における識字学級の現状と課題 (多文化・民族共生社会と生涯学習) -- (特論 地域調査研究の課題)	日本の社会教育
28	大谷 修一 (1995)	識字学級に学ぶ--高知県南国市の識字学級 (わたしの識字あなたの識字--今年は国際識字の10年中間年<特集>)	部落解放
29	西田 英二 (1995)	緑の草原を馬で駆けることができたなら--大阪府四条畷市の「障害」者による識字学級奮闘記 (わたしの識字あなたの識字--今年は国際識字の10年中間年<特集>)	部落解放
30	岩槻 知也 (1998)	「大阪府識字学級・日本語読み書き教室等学習者調査」の結果を読む	部落解放研究

31	<u>戎 高司</u> (1999)	風と光と水の恵みをエネルギーに ベトナム山岳地帯の識字学級にクリーンエネルギーを	<u>風力エネルギー</u>
32	西田 英二 (1999)	一行の「もやもや書き」からはじまって--鈴鹿一ノ宮の識字学級を訪ねて (特集 識字運動はいま)	部落解放
33	藤井 隆英 (1999)	「ひまわりの会」から見た日本の識字教育活動 (特集 識字運動と日本語教育の現在) -- (識字学級の現在)	解放教育
34	中野 武 (1999)	ある識字学級の 25 年 (特集 識字運動と日本語教育の現在) -- (識字学級の現在)	解放教育
35	浅香識字学級 (1999)	「わたしがつくるみんなのしき字」をめざして (特集 識字運動と日本語教育の現在) -- (識字学級の現在)	解放教育
36	<u>戎 高司</u> (2000)	風と光と水の恵みをエネルギーに--ベトナム山岳地帯の識字学級にクリーンエネルギーを	<u>風力エネルギー</u>
37	柳井 美枝 (2000)	識字学級青春学校 (特集 もうひとつの教育)	教育と医学
38	蔵本 穂積 (2000)	書くことの意味--識字学級での出会いから (特集 たしかな表現力を育てる--書くことの意味)	解放教育
39	<u>福島 和子</u> (2004)	大阪府の識字・日本語教室の現状と課題--大阪府教育委員会「識字学級等調査」から	<u>部落解放研究</u>
40	<u>杉野 恭子</u> (2005)	状況的学習論から見た「学びの共同体」の構築--識字学級と地域の小学校との交流から	<u>日本語・日本文化研究</u>
41	<u>杉野 恭子</u> (2005)	識字学級における encouragementI--「努力要求」の分析を中心に	<u>日本語・日本文化研究</u>
42	<u>加藤 有孝</u> (2006)	加藤有孝の実践記録 公民館における識字学級の実践について--東京・福生市公民館松林分館のこたばの会から (公民館 60 年の歴史的総括と展望) -- (2006 年の公民館実践--加藤有孝の人と実践)	<u>日本公民館学会年報</u>

43	木村かよ子 (2006)	会員の活動 識字学級 35 年生	リベラシオン
44	内田 純一 (2007)	識字学級におけるライフヒストリー (特集 おとなが 学ぶ難しさと楽しさ)	月刊社会教育
45	鎌田慧,野村 進,荒川洋子 (2008)	選評 識字部門 識字学級のさまざまな作品を (第 34 回部落解放文学賞)	解放教育
46	山田 泉 (2008)	在住外国人の社会参加を目指して -川崎市の「識字 学級」を考える-	生涯学習とキャ リアデザイン
47	田中 聡 (2008)	地域社会の生涯学習の基礎としての『識字』のあり方 を考える:大阪市の識字学級をめぐる動向の推移から	人権問題研究
48	菅原智恵美 (2008)	いっしょに動こう, 語りあおう(第 13 回)大阪市におけ る識字学級の現状--日之出よみかき教室から	ヒューマンライ ツ
49	松崎 一 (2010)	図書紹介 解放の花を咲かせよう--識字学級からの同 和保育所づくり--福岡県田川郡川崎町浦の谷 材木貞 子の記録 編者 松崎一	解放教育
50	松崎 一 (2010)	識字学級発祥の地「福岡県川崎町浦の谷」と材木貞子 (特集 おとなの学び・識字)	部落解放
51	関 道代 (2010)	大きな反響に励まされて--広報誌に掲載された「小平 尾さくら識字学級」 (特集 おとなの学び・識字)	部落解放
52	部落解放人権 研究所識字部 会 (2010)	2006 年度・大阪府内識字学級活動状況調査からみる 現状と課題--現実に合わせて展開する学級の姿が浮き 彫りに (特集 実態調査にみる今日の大阪の部落)	部落解放研究
53	棚田 洋平 (2011)	日本の識字学級の現状と課題--「2010 年度・全国識字 学級実態調査」の結果から (特集 全国の識字学級実態 調査結果)	部落解放研究

54	<u>新矢麻紀子</u> (2011)	識字・日本語教室における理念の継承と再構築のあり方--大阪府の先駆的な二つの事例から (特集 全国の識字学級実態調査結果)	<u>部落解放研究</u>
55	島田 愛美 (2012)	ふれあい館識字学級に通うハルモニ達から見る在日朝鮮人の"恨"感情とその行方 (国籍の境界を考える : 2011年度社会調査法演習報告書)	人文学報
56	古川 正志 (2012)	識字学級, このすばらしい場をすべての人に (特集 「しきじ」のいまとこれから)	部落解放
57	善明寺支部 識字学級 (2012)	識字部門 入選作 紙芝居「ふる里のお話しよう」 (第38回 部落解放文学賞)	部落解放
58	<u>菅原智恵美</u> 、 <u>森実</u> (2012)	部落の識字学級を「居場所」として捉え直す : 2011年度全国識字学級聞き取り調査から浮かぶ現状と「しきじ」の課題	<u>部落解放研究</u>
59	西田 静 (2013)	『13年 春』 : 物語・識字学級開設にかかわる考察と整理	リベラシオン
60	<u>棚田 洋平</u> (2013)	地域におけるリテラシー支援の場としての識字学級 : 困難を抱える若年者にとっての識字 (特集 困難を抱える若年者のリテラシーとその支援)	<u>部落解放研究</u>
61	藤沢 汎子 (2013)	識字学級による脅迫状書き写し実験 (狭山特集 石川さん逮捕当日の「上申書」と「脅迫状」)	明日を拓く
62	<u>河合 篤史</u> (2014)	識字学級に通う中国人留学生が語るライフ・ストーリーに関する考察 : ライフ・ストーリー研究を用いて	<u>環太平洋大学短期大学部紀要</u>
63	宮島 登 (2014)	生活課題に立ち向かい, 社会参加を進める実践へ : 川崎市市民館の識字学級 (特集 多文化・多民族共生 : 違いを豊かさに)	月刊社会教育
64	<u>河合 篤史</u> (2016)	中国人渡日者の「渡日経験」と「識字学級での学び」の意味 : 中国人の「喪失と再生」の語りを通して	<u>学校メンタルヘルス</u>

65	<u>服部あさこ</u> (2016)	相互学習の場としての識字学級の可能性	<u>解放社会学研究</u>
66	<u>棚田 洋平</u> (2016)	今日の大阪の識字学級のすがた：大阪府内識字学級実態調査の結果より（特集 識字・基礎教育保障の動向と課題）	<u>部落解放研究</u>
67	<u>菅原智恵美</u> (2016)	大阪市内の被差別部落における識字学級：大阪府内識字学級実態調査(2015年度)・学級訪問調査より（特集 識字・基礎教育保障の動向と課題）	<u>部落解放研究</u>
68	<u>河西千津美</u> (2017)	識字学級からはじまった保育所設立運動：福岡県田川郡川崎町の部落解放運動と同和保育所の歴史（特集 田川・川崎町立同和保育所の挑戦）	部落解放
69	<u>河合篤史</u> 、 <u>辻河昌登</u> (2017)	識字学級に通う中国人渡日者の心理的援助の検討：転機の語りを通して	<u>教育実践学論集</u>
70	<u>棚田 洋平</u> (2017)	学びの機会を保障するために(3)被差別部落における識字学級のいま	月刊社会教育

※下線を引いた論文は、紀要論文および学会誌論文

掲載雑誌名の内訳では、「部落解放」が17編と一番多く、以下「月刊社会教育(10編)」、「部落解放研究(9編)」、「解放教育(6編)」、「教育評論(3編)」、「リベラシオン(2編)」、「社会教育(2編)」、「日本語・日本文化研究(2編)」、「風力エネルギー(2編)」、「明日を拓く(1編)」、「大阪教育大学紀要(1編)」、「解放社会学研究(1編)」、「環太平洋大学短期大学部紀要(1編)」、「学校メンタルヘルス(1編)」、「教育学論集(1編)」、「教育実践学論集(1編)」、「教育と医学(1編)」、「研究論叢第3部 芸術・体育・教育・心理(1編)」、「現代教育科学(1編)」、「生涯学習とキャリアデザイン(1編)」、「人権問題研究(1編)」、「新日本文学(1編)」、「人文学報(1編)」、「日本公民館学会年報(1編)」、「日本の社会教育(1編)」、「ヒューマンライツ(1編)」であった。内容的には、部落解放の観点からの論文が大半であった。

さらに、論文を、商業誌を除く学会誌および紀要論文に絞ると、「識字学級」を対象とした論文数は、24編に絞られた。また、心理臨床学的視点に立つての

論文は、筆者ら以外見られなかった(河合:2014, 河合:2016, 河合・辻河:2017)。  
したがって、本研究は、「識字学級」についてこれまで誰も明らかにしてこなか  
った領域であり、「識字学級」をテーマとした研究に新たな視点を与えるととも  
に、当該研究の深化に多大な影響を与えるものとする。

## 1.8 渡日する中国人について

渡日する外国籍の第一位は中国であるが、本節では、中国からの渡日者の目的について概観することとする。

まず、中島(2016)は、中国人が留学先として日本を選ぶ理由として、「安心」「安全」「学費が安い」という3点の理由を挙げている。さらに、中国人がまず留学先に選ぶ国はアメリカとした上で、留学先に日本を選ぶ中国人の特徴について“アメリカに行く人は厳しい競争に巻き込まれるなど、プレッシャーが大きいことを覚悟しなければならない。ある意味で心身ともに強靱な人が向いているが、日本に来る人はそこまでではない。ガツガツしていない人、性格的にはおっとり型だといえます”と述べている。

次に、中島(2012)は、中国人にとってマイナー言語である日本語を学ぶことのハードルは高いことを指摘した上で、それでも距離的に近く、必ずしも希望の大学に入学できるとは限らないアメリカよりも日本を留学先として選択し、渡日する者がいることを述べている。さらに、千葉(2010)は、中国人が日本社会に溶け込むに当たって漢字を手がかりにして日本語の文章をある程度読みこなせることを挙げ、“日清戦争後、中国人留学生が日本を目指した理由の一つも、漢字を媒介とした学問の速習性にあった有利な条件にあった”と指摘している。

このように、日本を留学先として渡日する中国人であるが、彼らのメンタルヘルスは必ずしもよいとは言えない。江(2013)は、“中国人就学生は自分の精神状態の悪さを自覚せず、心理支援にネガティブな固有観念も持っているため、心理の専門職によるサポートを避ける傾向がある。その反面、身近にいる日本語学校の先生や先輩・友人のサポートを受けることが多い”として、“心理支援を行う場合、支援者は『日常的なサポート源』として心理支援を行うことが適切である”としている。また、山田(2010)は、中国人就学生への「困ったときに、相談する人は誰ですか?」という質問調査の結果、渡日して困ることは多くあるにも関わらず、他人に相談することがないという実態を報告している。具体的には、“自分が困っていることを他人に言わずに自分の心の中におさめてしまうか、中国の両親に相談することが多い”とし、“困っていることを日本人や第三者に知られたくないという就学生の特徴も参与観察から認められる”こ

とを指摘している。さらに、就学生だけではなく、成人女性(30歳、中国人の配偶者)の聞き取り調査において、“中国人と日本人では考え方が違うから、中国人は日本人に相談することはない”と回答した例を挙げ問題点を指摘している。とかく、渡日を受け入れる側は、渡日者のメンタルヘルスの向上を直線的に考えがちであるが、渡日する側の、日本人や心理専門職に相談しづらい状況や気持ちに考慮しながら援助していく、という視点が重要である。

このような状況であることから、特に、日本人である筆者が研究協力者にインタビューを行った本研究は、国際社会を標榜する日本社会において、多文化共生という観点からも大きな意義があるものとする。

## 1.9 研究の目的

これまで述べてきたように、国際社会と外国人との共生を目指す日本社会において、「ニューカマー」と呼ばれる渡日外国人の問題は今後ますます複雑化すると考えられる。そこで、本研究では識字学級で学ぶ渡日外国人、特に渡日中国人に焦点を当てた。彼らが識字学級に通いながら日本で生活を送っている現実に向け、彼らの生きる意味を明らかにしていくことは、時代的にも求められることであろう。そして、「学ぶ」ことの意味の本質を明らかにする一助となり、マジョリティに属し日本の教育を享受する者にとっても意義深いものとなるを考える。

以上のことを鑑み、本研究では、識字学級に通う渡日中国人が、どのような心理的プロセスを経て日本で生きていく人生を選択するに至ったのかを丁寧に聴き、彼らの人生の中で、識字学級をどのように意味づけるのかを検討し、渡日者の心理的援助の可能性を明らかにすることを目的とした。

## 第 2 章 方法

## 第2章 方法

### 2.1 ライフストーリー研究について

本研究ではライフストーリー研究法を用いることとした。ライフストーリー研究とは、「日常生活で人々がライフ(人生, 生活, 生)を生きていく過程, その経験プロセスを物語る行為と語られた物語」(ライフストーリー)についての研究であり(やまだ,2000a), 質的研究に該当する。

Crossley,M.L(2000)は, 心理学の分野において, 自己とは何かについて考えるとき, 次の4つのアプローチがあると述べている。

- ①実験社会心理学的アプローチ
- ②人間学的心理学的アプローチ
- ③精神力動的, 精神分析的アプローチ
- ④社会構成主義的アプローチ

の4つである。

ライフストーリー研究は, 社会構成主義の視点に立っている。このアプローチは 1990 年代以降広まってきた。社会構成主義について能智(2007)は, 心理学の研究分野における, 実証主義からの問い直しとしての社会構成主義について, “研究や対象をもともと「ある」ものとして実体的に捉えるのではなく, さまざまな条件の下で「なる」ものとして, さらに言えば「作られるもの」として捉えること”と述べている。つまり, 語りによって「変化しうるもの」ということであると考え。その上で能智(2007)は, 質的研究の特徴として,

- ①意味への注目
- ②帰納的であること  
(具体的事例に基づいて一般的なことを明らかにしようとする),
- ④プロセス重視
- ⑤自然主義(実験室で起こるものではなく)

という4点を挙げている。

また, 佐久川(2009)は, 対人支援における研究について, ①原因・結果の整合性を明らかにしたいのか, ②人が人生の途上で出会う特異な経験の意味を明らかにすることにより, 人間とは何かを究明したいのか, の2つの方向性があると述べている(表 4.)。本研究のテーマは②に該当する。

表4. 対人支援における研究の2方向

思考の原理	因果律 (原因・結果の整合性の検証)		
			意味解明 (生の経験の意味究明)
学問群	自然科学 (数学が基本)	社会科学・人文科学 (社会学が主)(心理学が主)	実存哲学 (現象学が基本)
検証の方法	実験、統計学などによる因果関係の検証	統計や記述による社会・心理現象の科学的分析	
研究の大枠	群やレイの特徴を明らかにするための量的研究が多い	量的研究が主流であるが近年、質的研究も増えてきた	個人の体験の意味を解釈するための質的研究が大部分
			(佐久川, 2013)

これらの考えに立った、日本における質的研究の顕著な業績としては、鯨岡(2005)の「エピソード記述」があげられ、“事象の客観的側面(あるがまま)に忠実であることと、事象を客観主義的=実証主義的に捉えることとは別の事”であるとしている。さらに、フィールド研究に関して“そこに生きる人たちがこのような思いで生きているという事実をアクチュアルに描き出したいという願いこそがエピソード記述の方法論に向かう理由なのだ”としている。

さらに、藤原(2004)は、“ある心理現象を対象化して科学的に研究する既存の心理学パラダイムとは異なり、個人の全体性に関与し関係性を生きることを通して進めていく新しい学問研究法(心理臨床パラダイムに立つ)”として事例研究法を心理臨床学の基本的な研究法として位置づけている。また、下山(2001)は、臨床心理学における事例研究の類型として、①会話記述型、②過程記述型、③ナラティブ記述型、④フィールド記述型などがあることを指摘しているが、丹野(2004)は、“日本で通常事例研究と言われるものは、②過程記述型である”とした上で、今後多様な形の事例研究を育てていくことの必要性を示唆している。本研究において用いるライフストーリー研究は、③ナラティブ記述型に当たる。

ところで、やまだ(2000a)は、“人は出来事に出会うとき、「なぜ？」と意味を問う。病い、喪失、障碍、犯罪被害などより深刻な「なぜ、自分が？」という問いに直面することもある。そのとき、人々は出来事をつなぎ、ライフ(人生、生活、生)を物語(ストーリー)として構成しようと試みる”とし、ライフストーリー

一研究とは“人々のこのような営みをそのままとらえようとする研究である”と述べている。また、桜井(2005)は、ライフストーリー研究について“ライフストーリー研究が関心をよぶ理由のひとつは、調査する側からの要請というよりも、社会の側から要請されているからである。”とし、これまでの研究テーマになかった新しい社会問題の発生や、周縁にいて注目されなかった人びとへの関心の高まりが背景にあるとしている。このことに関連して、能智(2005)は質的研究について、“単にデータが質的であることを特徴とするのではなく、むしろ従来の量的な研究において見落とされていたり軽視されていたりするものの見方やデータの扱い方の全体をさす”と述べている。本研究の研究協力者が、現代社会においてはマイノリティである識字学級に通う渡日者であり、質的研究であるライフストーリー研究法を適用する意義は大きいと考える。

一方、竹家(2008)は、“当事者の身になって経験の意味を捉え直すという視点が不可欠である”として、それを実現しうる研究手法の一つとしてライフストーリー研究があるとしているが、同時に複数の対象者から得た「データとしての語り」を分析することによる、抜け落ちてしまう当事者の思いについても言及している。また、枝川・辻河(2011)は、複数のデータを類型化することで、“ナラティブが持つ一回性、あるいは固有性を捨象することになり、その結果、個々のナラティブを完全に掬い取ることに限界がある”と指摘している。したがって、本研究を進めていくに当たっては、インタビューの心に寄り添う心理臨床学的視点が必要であり、得られたナラティブから、当事者の内実の深淵を掬い取り、当事者自身の人生を深く丁寧に解釈することに留意することとした。

## 2.2 共同生成される語りについて

本研究では、筆者(聞き手)と研究協力者(語り手)との間で共同生成される語りに注目した。

鷺田(1998)は、幸福とは何かを考えたとき“幸福について考えずにすんでいること”という例を挙げ、機能しなくなつて初めて人間に意識されることを示唆している。そして、「身体を持つ社会性の消失」という問題点を指摘している。会話が成立しているときは必ず身体を使用しており、“じぶんの表情、外見、身体の全体像といったものの理解は、他人の視線や表情を鏡としてはじめて可能になる”としている。さらに、「添い寝」を例に挙げ、“いのちが壊れそうと感じたときにひとが求めるもの”として、「間身体性」と名付けている。

また、村上(2017)は、自分を誰かに語ることを「声の響き合い」とし、①「聴いて受けとめ」ることが「私も話してもよい」、「話してもだいじょうぶだ」という安心感を与える、②他人の語りを聴いて揺さぶられることは、自分で語ることでカタルシスを得るのと同様の効果を持つ、自分を誰かに語るこの意味に言及している。

そして、鯨岡(2016)は、「関係発達」「間主観性」「両義性」「相互主体性」の概念を基に、“人が人と関わる中で、一方が相手に(あるいは双方が相手に)気持ちを向けたときに、双方のあいだに生まれる独特の雰囲気をもった場”である「接面」という概念を確立した上で、“ありとあらゆる二者関係は、相互主体的な関係として考えるべきであり、すべての対人実践は「接面」で営まれる”としている。

このように、現代社会において、普段無意識下で行われがちな会話における「共同性」に注目することを通して、本研究を進めていくことは意義深いと考える。

さて、本研究で採用するライフストーリー研究について、やまだ(2000a)は“人々が物語る時には必ず聞き手が存在する。話し手と聞き手の間で紡ぎ出される物語に意味がある”とし、“語り手と聴き手によって共同生成されるダイナミックなプロセスとして捉えられる研究である”と述べている。

このことに関連して、森岡(2008)は、“語られたことと聞くことの領域は必ずしもイコールではない”として、“物語による意味の構成は聞き手という他者の

はたらきを組み込んだものである”としている。そして、この共同作業を通して、語り手は、“生きるために必要な観察主体，ふりかえる私を育む”ことができるとし、共同生成される語りの重要性を述べている。また、やまだ(2000b)は、語り手と聞き手について、“一方的な関係ではなく、対話的關係として、共に物語生成にかかわる”として、相互行為として物語が生成されるとしている。さらに桜井(2002)は、ライフストーリーは聞き手と語り手による「共同作品」であると述べた上で、“インタビュアーの問いかけや応答がライフストーリーの産出に大きな役割を持っている”ことを示唆している。

一方、能智(2011)は、研究者である聞き手と、研究協力者である語り手の間には力の不均衡が認められるとした上で、そうした可能性を最小化する努力を行う必要性を述べている。具体的には、インタビュー調査を開始する以前からラポールの構築を心がけ、研究終了まで持続的に行い、常に語り手の表情や言葉からモニターしつづける必要があることを示唆している。また、張(2015)は、ライフストーリーが聞き手と語り手の共同作業によって構築されるという前提で、“それゆえ、コミュニケーション上のあらゆるギャップ、たとえば、世代、人種、国籍、性別等の違いによって語りが異なってくる”とし、「誰が聞くのか」が重要な要素となることを示唆している。本研究においても、これらの点に留意しながらインタビューを行っていくこととした。

## 2.3 研究対象の識字学級

2010年現在把握されている198の識字学級の学習形態について棚田(2011)は“一斉学習を行っている学級が大半(82.2%)を占めているが、1対1形式(32.5%)やグループ学習(28.4%)の学習形態をとっている学級も一定数存在する”と報告している。また、ニューカマーの生徒の割合が高い都市部では、1対1形式の学習を行っているところが多い。

本研究の対象は、近畿圏にある識字学級である。週一回開催され、学習形態は、日本語の能力に応じてグループ学習や1対1形式の個別学習を基本に行っている。本研究にあたっては、運営責任者に研究の承諾を得た上でインタビューを実施した(※)。

### ※:識字学級でのインタビュー調査に至るまでの経緯

当初筆者は、研究のフィールドとして夜間中学を対象とした調査研究を念頭に研究計画を立てていた。そして、筆者の知人(教育委員会指導主事・人権担当)の紹介により、夜間中学に勤務し人権教育に携わっているI先生が、筆者との面談を受諾してくれた。筆者は研究計画書を手渡し、インタビューの主旨を説明したが、それに対する反応は厳しいものであった。

問題として指摘された点は、①夜間中学は教育の場であり、本インタビューが生徒の何の利益になるのか、②夜間中学は生徒が学ぶところであり、研究の場ではない。それを学校(先生方)が受け入れるのはかなり厳しい、③過酷な境遇で生きてきた夜間中学生が、その経緯を研究者にたやすく話さないだろう、というものであった。

しかし、I先生は筆者に、各地で行われている識字学級に通う生徒の中には元夜間中学生(O市の夜間中学の規定では最大9年しか在学できない。勉強し続けたい卒業生の中には識字学級に来て学び続ける人がいる)がいることを示してくれた。識字学級は、ボランティアスタッフが運営をしており、文字を教えるボランティアとして参加し、信頼関係を築いた上で、研究協力を個人的に要請するのがよい、という助言を与えてくれた。

I先生の助言および紹介を受け、O市にある識字学級に見学に出向く

こととなった。識字学級の運営はボランティアスタッフでなされており、責任者の K さんより、元夜間中学生の学習グループを紹介され、見学することとなった。K さんは気さくな方ではあったが、筆者の意図を十分に把握しているようではなかった。「夜間中学について話を聞きに来られた研究者」「“夜間中学で学んでいたみなさんに夜間中学がどうだったのかを話してほしい”という主旨で来られた。」と紹介され、K さん主導で、筆者はある学習者の輪の中に入った。最初は見学に来た筆者に好意的で、今まで生きることとどれだけ苦労してきたか、そして、自分達がいかに夜間中学で学んだことが楽しかったかを饒舌に語ってくれた。その後、筆者が感謝の意とともに、個別にライフストーリーを聞かせていただきたい(インタビュー調査)旨の考えを伝えると、グループで一番饒舌だった方が「それ以上話すことはない」と鮮明に拒否反応を示した。その方に呼応する形でグループの他の 2 人も態度が険しくなっていた。

この時、I 先生が述べていた先の 3 点(①夜間中学は教育の場であり、本インタビューが生徒の何の利益になるのか、②夜間中学は生徒が学ぶところであり、研究の場ではない。それを学校(先生方)が受け入れるのはかなり厳しい、③過酷な境遇で生きてきた夜間中学生が、その経緯を研究者にたやすく話さないだろう)の意味が、筆者に実感できた。初めての出会いの場で、筆者自身の目的を的確に伝えることができなかつたとは言え、グループの方々の態度の豹変ぶりおよび拒否的態度に困惑しながら当日は帰宅することになった。

足取りが重いまま、参加した翌週の識字学級では、前週とは異なる元夜間中学生の学習グループを紹介してもらうことになり、学習に参加した。自己紹介をした後、筆者の目的を簡単に説明した上で、「一緒に勉強させていただきたい」という筆者のスタンスを丁寧に話したところ、参加者にその思いを受け入れてもらうことができ、その日穏やかに学習者と過ごすことができた。前週の失敗体験により、慎重かつ学習者を尊重することを心がけたことが功を奏したのかもしれない。山根(2009)は、在日朝鮮人女性の夜間中学生へのライフストーリーインタビューを

用いての研究について、「信頼関係のない段階での聞き取りは表面的な語りしか得られない」と述べている。

当初、筆者は、「オールドカマー」と呼ばれる、在日の方々が学んでいる、グループ学習の補助をする形で活動していた。筆者の研究目的は最初に伝えてはいたが、数か月は学習ボランティアの役割に徹していた。そして、学習者との信頼関係が徐々に成立していく中で、個々にインタビューを依頼していったが、思うように協力が得られずに時間が過ぎていった。

その後、筆者は、2年間識字学級にボランティアとして通うこととなった。週を重ねる度に、参加者との信頼関係がほんの少しずつではあるが、築いていけているような状態となった。また、識字学級を運営しているボランティアスタッフの方々にも、「研究のために調査に来た」研究者というだけでなく、学習者のサポートをするスタッフとして認められるようになったと考えられる。

半年が経過した頃、筆者のボランティアスタッフとしての活動を見守り続けていた K さんから、「中国からの渡日者と一対一で学習支援をしてみませんか」と依頼があり、研究の転機が訪れるようになった。これは、研究のインタビュー調査が思うように進まない筆者の苦悩を見守ってくれた K さんの、筆者への配慮であったと考えられた。

そして、ボランティアスタッフとして1年通うようになった頃、それまでの学習者との信頼関係をベースに、筆者のインタビューに応じる学習者に巡り合うこととなった。

## 2.4 筆者の立場

筆者は、教職に就きながら大学院博士課程で学ぶ五十代前半の男性であり、週一回開催される識字学級において、調査開始以前に学習支援者(ボランティアスタッフ)として約1年通っていた。

## 2.5 研究協力者

識字学級に通う中国人渡日者4名である。当該識字学級で筆者は、日本語の能力に応じて、学習者のグループ学習支援や個別学習支援を行っていた。各研究協力者との初回学習時、お互いに自己紹介をし、筆者の立場と研究の目的を説明していた。グループ学習および個別学習を行う中で、インタビュー調査を6名に依頼し、承諾が得られたのが個別学習支援を行った中国人渡日者4名であった。4名の研究協力者には、渡日期間が半年～20年とばらつきはあるものの、すべて母国中国の高等教育機関で学んでいること、文化的背景が共通することを鑑み、研究対象とした。インタビュー調査を開始する前に、研究への同意書を提示し、同意を得た上でインタビューを開始した

## 2.6 倫理的配慮

本研究への協力依頼状を携えて、識字学級に出向き、本研究の目的・意義、プライバシー保護についてインフォームドコンセント(説明と同意)を行った。研究倫理については、発達心理学会(2000)が出した研究者の倫理の3原則(表5.)を遵守しながら研究を進めていくこととした。

表5. 研究者倫理の3原則
・ 協力者を尊重すること
・ 守秘義務を履行すること
・ 協力者への恩恵に配慮すること
発達心理学会(2000)

また、サトウ(2007)は、①研究協力者の事情が変わった場合にはその都度説明と同意を求め、いつでも調査から撤退する権利を保障すること、②プライバシーの保護(データの目的外使用の禁止・公表の際の匿名性確保・公表前事前確認)に細心の注意を払うこと、③インタビューの影響(インタビューすることによって過去の記憶が戻って辛い思いをするような事態を避けることや、インタビュアーとインタビューイの関係がセラピー的な関係に近づくことを予防すること)に配慮する、という三点の重要性を述べている。

具体的には、インタビュー調査を開始する前に、上記留意点を明記した同意書を提示し、同時に口頭での説明も行い、同意を得た上でインタビューを開始した。特に、論文作成時においては、プライバシー保護の観点から、個人名はもちろん、個人特定に結びつく可能性がある特定の地域・事象等についても匿名性が保たれるよう細心の注意を払った。

## 2.7 インタビュー手続き

研究協力者に対して、“ライフストーリーとは過去と現在の対話であり、かつ未来と現在の対話である”とした大久保(2008)に倣い、「現在の生活」「これまでの人生」「転機となった出来事」「これからの人生」といったインタビューガイドに基づく自由面接を行った。本法を採用したのは、渡日者といっても、年齢や渡日経緯は様々であり、伝統的な仮説検証的手法を用いて仮説を検証するのではなく、いくつかの事例を分析・検討することで共通性を見出す仮説生成的研究が適していると考えたからである。また、徳田(2007)は、“特に、インタビューの発する語りに注意深く耳を傾けつつ、自らの聴き手としてのあり方も含め、両者の相互作用のダイナミクスを批判的に捉え、必要に応じて問いの仕方や相互作用のあり方を調整していく態度は、専門的会話としてのインタビューの遂行を特徴づける”として、その重要性を述べており、本研究におけるインタビューではこの点も意識した。

さらに、研究協力者の語りの自然な流れを尊重するため、面接時間には多少ばらつきが生じた(1人当たり120分～180分程度)。また、研究協力者の了解を得た上で、全ての面接をICレコーダーに録音した。

## 2.8 分析方法

ライフストーリー研究の枠組みの基でシーケンス分析を行うこととした。

質的研究の分析法には、大きく分けて、カテゴリ分析とシーケンス分析がある。カテゴリ分析は、得られたインタビューデータを小さな単位にまで分解したり要約したりしながら、カテゴリ名をつけて整理し、グループ化し全体像を構成していく分析であり、KJ法やグランデッド・セオリー法がある。これらの分析では、「データ⇒カテゴリ⇒理論」というプロセスを経る。最終的には「理論化」や「概念化」を目指す分析である。カテゴリ分析を行う場合、データの質も重要であるが、ある程度のデータがなければ適切な成果をあげることができない(川野, 2007)という特徴がある。

一方、シーケンス分析は、インタビューのデータの並び順や相互の関連など全体の形を維持したまま分析する方法である。具体的には、インタビューで交わされた会話を全て忠実におこし、文脈の流れを読んでいくことになる。特にこの分析法を行う上で大切なことはデータの質である(川野, 2007)。

2.2で述べた通り、本研究では、聞き手(研究者)と語り手(研究協力者)との間で共同生成される語りが重要であるため、分析方法についても慎重に検討した。

桜井(2005)は、“ライフストーリー研究とは、調査する一人ひとりがインタビューを通してライフストーリーの構築に参加し、それによって語り手や社会現象を理解・解釈する共同作業に従事することである”と述べている。また、やまだ(2000a)は、“語りが語りをよび、循環的に共同生成されるところに重要な意義がある”としている。そして、語りの解釈については、語りの構築に参加している人びととの関係も表象されているため、“相互行為の考察が不可欠である”と強調している。また、山田(2013)は、ライフストーリー研究が、構成主義的研究であることを述べた上で、実証主義的研究のように、語り手の語りだけを分析するのではなく、“調査者である聞き手の語り(多くは質問であるにしても)自体も相互行為の重要な一手(コマ)として分析しなければならない”としている。さらに、石川・西倉(2015)は、ライフストーリーが語り手と聞き手との対話の産物であるという認識に立てば、語りの提示の仕方として“語り手の語ったことだけでなく聞き手の質問や相槌も書き起こし、会話形式のまま提示する”必然性を述べている。

やまだ(2007b)は、ナラティブ研究(ライフストーリー研究)について、“文字通りの「一貫性」を再現することはできないが、「ズレを含む類似性」として「多重比較」することが可能であり、公共化することで「省察」することが可能である”とした上で“「省察」を重ねることで、「信頼」できるデータや解釈を生み出していける”としている。

本研究の研究協力者が限られた中国人渡日者であることや、本研究のインタビュー過程が聞き手(研究者)と語り手(研究協力者)の共同作業的な構築過程であり(桜井,2002)、研究協力者の語りだけでなく、聞き手である筆者の語りを含む共同作業全体を分析・考察することが重要であること、インタビューから理論を導き出すのではなく、当事者の内実の深淵を掬い取ること、当事者自身の人生を深く丁寧に解釈するため、シーケンス分析を行うことにより、識字学級に通う中国人渡日者の内面に焦点を当てるのが最適であると考えられる。

具体的には竹家(2008)、枝川・辻河(2011)に倣い以下の方法で分析・考察した。

- ①インタビュー全体の逐語文字化したデータを精読し、全体としての形を見失わないように注意し、全体の語りの流れを見る。物語における意味的連続性を重視しながら<物語世界><ストーリー領域>双方について構造的に見る。
- ②語られた順番、特に聴き手と語り手の共同による継起順序の流れを見る。
- ③語られた量と「語りの種類」に着目し、語り手の人生の「鍵になる言葉」を見出す。
- ④「物語世界」を中心に「筋」に基づく現実に即した年表を作成する。
- ⑤<ストーリー領域>の「評価」や「態度」等の語りにも注目し経験の意味づけを分析する。
- ⑥ライフストーリーを再構成し、解釈する。

なお、「物語世界」と「ストーリー領域」について桜井(2005)は、「語り」を「物語世界」(筋 plot で構成される語り)と「ストーリー領域」(語り手と聞き手の相互性に基づく、評価や態度を表す語り)の2つのフレームに分けられるとし、“特にインタビュアーとインタビュイーによる相互行為である<ストーリー領域>の考察がライフストーリー・インタビューでは不可欠である”と強調している。本研究ではこの考えに導かれた。

## 第 3 章 結果と考察

## 第3章 結果と考察

### 3.1 結果と考察

#### 3.1.1 ケース 1. Aさん(50代男性)の人生と解釈 (研究1)

##### (1) Aさんの人生の概要

Aさんは五十代半ばの男性である。諸事情により大学進学が遅れたが、中国の大学(英語専攻)を卒業した。当時、大学卒業者は仕事が保証されており、農業関連の役所に赴任できた。その後結婚・長男誕生とともに、英語のキャリアを生かし外資系の企業に転職することとなった。当時中国の平均賃金の数倍の収入を得ていたAさんであったが、国の住宅事情は厳しく、収入相応の住居に住むことはできず、他家族とルームシェアしなければならない状況にストレスを感じながらの暮らしであった。そのころ日系の妻が日本への帰国を希望していた。異国の地での生活に不安はあったが、外資系企業の日本支社に勤務可能な状況を鑑み、家族での渡日を決意するに至った。ところが、渡日間もない頃大規模な自然災害に見舞われ、勤務会社の日本支社が閉鎖され職を失うこととなる。中国への帰国も考えたが、家族を養うために日本で職を探さざるを得ない状況となった。そのため、英語のキャリアを生かす仕事を模索したAさんだが、日本語が話せないという状況で、キャリアを活かすことを断念し、町工場に就職し数年間勤務するが、職場に馴染めず退職せざるを得なかった。幸い、新しい工場に正社員として再就職することができ現在に至る。最初の工場に就職した頃、夜間中学で学び始め、卒業後引き続き識字学級で学ぶようになった。この間、苦楽を共にしてきた妻が病に罹り半年前に死去した。生活にも余裕ができた頃、自分自身と同じ立場の渡日者を支援するボランティアに参加するようになっていた。妻の病気の悪化と共に一時中断していたボランティア活動にも最近復帰し、現在は、識字学級での学習継続と英語のガイド資格取得に向けた勉強にも励んでいる。

## (2) Aさんの人生およびその解釈

Aさんと筆者の間で紡ぎ出されたライフストーリーのシーケンスは、「渡日に至るライフストーリー」「日本で生きていくライフストーリー」「未来へ繋がるライフストーリー」という三つのまとまりが見い出された。その語りのシーケンスを図式化したものは以下の通りである(図5)。

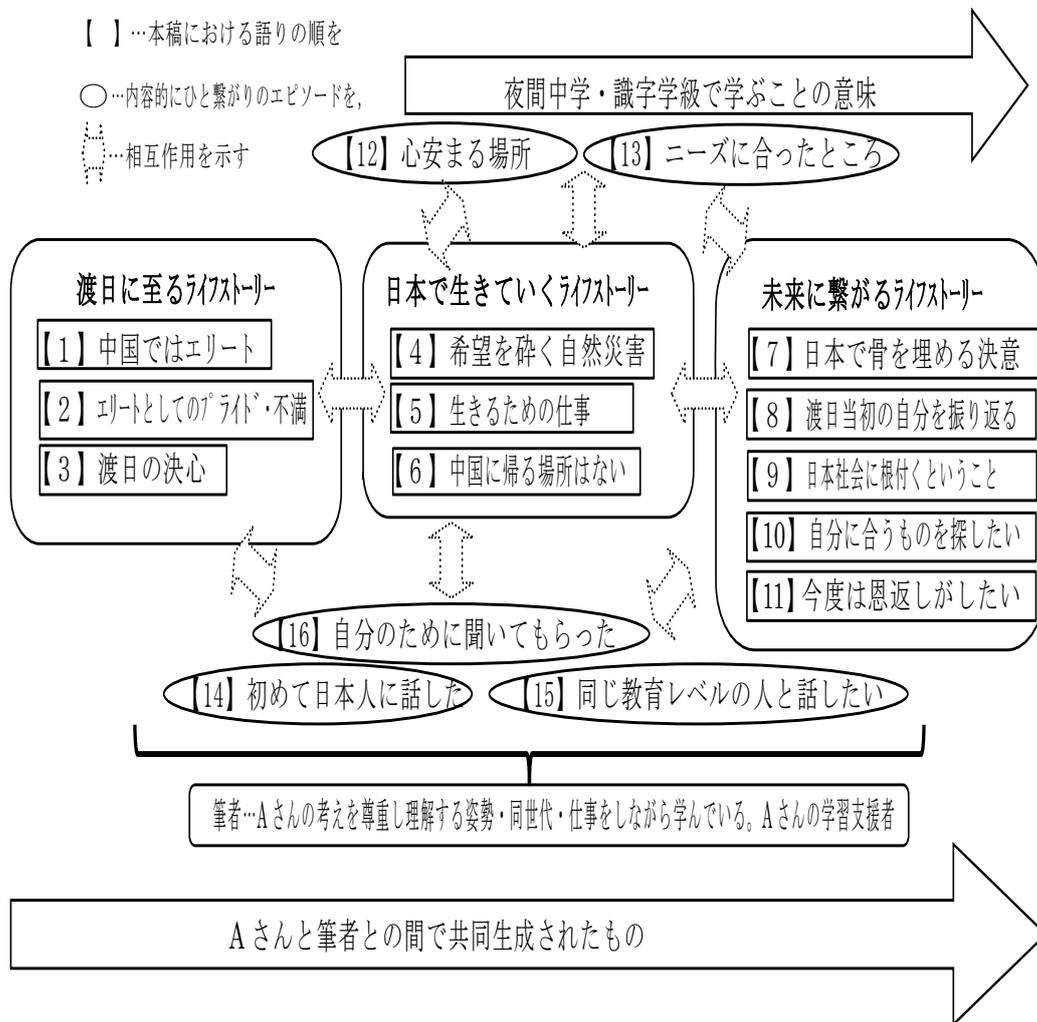


図5. Aさんのライフストーリーのシーケンス

そして、図5.のシーケンスに沿ってナラティブを提示しながら、Aさんのライフストーリーを再構成し、経験の意味づけを考察した(語りについては、鍵になる言葉を**囲み**によって、特に重要な語りを下線によって表記した。なおIはインタビュアーを示す)。

### ① 渡日に至るライフストーリー

Aさんは、中国で大学を卒業し、エリート役人としての人生を歩んでいた。しかし、日系の妻が渡日を希望することにより、これまでの人生と今後の人生についての葛藤が生じることとなった。

#### 語り 1：中国ではエリート(1回目のインタビュー)

A：自分も中国では、それなりの仕事にもついていました。...政変が終わったら、大学はもう一度開かれ、でも実質的には試験はなく、コネで入れた。自分は一年目はだめで二年目、英語の専門の大学に入れた。中国では大学に入れば卒業してからの仕事は決まっている。...(略)...中国では農業の役所で勤めていた。

I：エリートだったんですね。

A：そうです。

#### 語り 2：エリートとしてのプライドと転職・実生活の不满(1回目のインタビュー)

A：...はい。ですが、家が長屋みたいで...その頃、だんだん外国の資本が入ってきて、外資系の港関連の会社に入って五年ほど勤めた。収入は中国の人の三・四倍位はありましたが、家が...外資系でも、勝手にどんな家でもOKではなく、国が許可したところでないと住めなかった。マンションには入れたが、一つの家に二家族がいるような状態で、ケンカが絶えなかった。トイレやキッチンが共用だから、使う順番はどうこうと...、そのうち、息子が大きくなってきて、部屋に机なんかを入れたら、テレビとかを入れることもできない...それでこのまま中国にいても...と思っていた。

#### 語り 3：渡日の決心(1回目のインタビュー)

I：奥さんは日系ということで日本に来たいとは思っても、Aさんはどうだったですか。

A：家のことがやはり先行き困っていたし、それに日本に行きたいと言ったら、勤めている会社に日本支社があって、日本に来て、仕事を探さなくてもよかったんです。だから決心した。

Aさんは、中国ではエリートとして生きてきた。大学に入れば仕事も「コネ」で決まるという世界に生きており、自分自身でも「それなりの」仕事をしてい

るという自負もあった。エリートとしての自負もあり、英語の能力も認められ外資系の企業に転職することができ、高額な収入も得ることができたAさんだが、収入や社会的地位に見合った住まいが得られず、また、同居する他家庭との間で感じるストレスに、Aさんは中国で生活することに、未来への希望を持ってなくなってしまったと考えられる。

妻の事情は考慮しても、自分の祖国を離れる葛藤は大きいものがある。しかし、中国での生活に希望を見い出せないAさんは、「日本に行きたい」という妻の事情や、自分の仕事も保証されているということを追い風に、希望も抱いて渡日を「決心」したのだと推察される。見方を変えれば、Aさんの「祖国」「エリートとしての人生」の喪失体験を経て「日本で生き直す(再生)」という「喪失と再生のライフストーリー」とも言えよう。

## ② 日本で生きていくライフストーリー

### 語り 4： 渡日の希望を砕く自然災害(1 回目のインタビュー)

A： 来日後、大規模な自然災害が起こり、日本支社が閉鎖。事業復旧の目途も立たず、その頃は、まだ勤めて間もない頃だったので正社員じゃなかったこともあって、リストラになった。妻の収入だけでは暮らせないし、子どもを日本の学校にやるのは不安だった。言葉も分からないし、友だちもできないかもしれない。だから、中華学校に入れることにした。そうしたら、授業料もかかるし、仕事は何でもいいからしないと思った。妻の兄はそのころ日本に来て長年経っていたから、一緒に仕事を探してくれて、やっと町工場に決まった。その頃はまだハローワークがあるのも知らなかった。

### 語り 5： 生きるための仕事(2 回目のインタビュー)

I： 英語を活かせる仕事は探さなかったのですか？

A： やはり、英語がしゃべれても、日本語がしゃべれないから...貿易会社でも英語は必要だけど日本語がしゃべれないと仕事にならない。

A： 日本で生活するには第一が日本語で、だから家族を養うためにはどんな仕事でもいい。ゼロからでもいい。

I： 今までのキャリアは使えない。ゼロからでもと思ったんですね。

A：三年...四年近くそこに働いた。ここの社長はよかったんだけど...社長のお父さんがよく来て...仕事ができないので“おまえ帰れ”と言われた。今ならわかるけど、その時は言葉の通り思った。“帰れ”と言われたので帰った。社長は“何言うてるんや。”と言ったが、私も一度言ったのでこっちもメンツがあるから...。年寄りにけんかしてどうする。仕事もまだよくわからなかった。それで働きにくいこともあった。...(略)...だから最初の五年間はしんどい、つらかった。

#### 語り6：でも、中国には戻れない(2回目のインタビュー)

I：日本に来なければよかったとは思わなかった？

A：うん、今は日本に来てよかったと思う...けど、つらいときは中国に帰りた  
いとも思った。でも、実際に中国に帰ったら、帰る場所はない。元の会社  
に戻れる訳ではない。給料が高いから、私がやめた後、何百人という大  
げさだけど何十人はすぐに応募する。同じ会社であっても歳もいって  
ら、同じ条件では入れない。

I：一度は考えた？

A：考えた。元の会社の人にも相談して...妻も、“どうしてもと言うなら、帰  
ってもいい”と言った。でも、帰ってもまたワンルームになるのもいやだっ  
たし...でも、子どもが今度は高校受験になった。日本式の受験勉強してい  
たから、中国に帰ったら、子どもが大変だった。まだ妻は、仕事はまだあ  
る状況だった。でも自分は、元に戻れる状況じゃなかった。

Aさんは、一大決心の渡日後、大規模な自然災害に見舞われ、仕事を失うことになった。中国でのエリートとしての生活を捨ててまでの渡日を決心させたのは、渡日後もそのまま勤務できることであったことを考慮すると、Aさんの心の中には激震が走ったに違いない。当時、息子の学校生活に対して大きな不安を抱えているが、「言葉が分からない」「友だちもできないかもしれない」という思いは、Aさん自身の思いでもあったであろう。また、「ハローワークの存在」も知らなかったという語りには、Aさんの無念さが読みとれる。

リストラに遭ったAさんは、英語が堪能だったこともあり再就職をする際、キャリアを活かせる仕事を探した。しかし、英語はできても日本語ができないために、そのキャリアを活かす仕事に就くことは不可能であった。自分の今ま

で培ってきたものを全く活かすことができない傷つきを抱えながら、家族を養うために「どんな仕事でもよい」と決心するに至った A さんの葛藤は大きかったであろう。この語りにおいても「ゼロから」「メンツ」という言葉には、自分はエリートだという「メンツ」を捨て、「ゼロから」仕事を探すという第二の「喪失と再生のライフストーリー」が読みとれる。

A さんは、やっと仕事が見つかったが、ここでも言葉が分からないため、コミュニケーションが取れず苦しみ、数年で退職することになった。A さんにとっての渡日当初の五年は、「しんどく、つらい」ものとなった。

渡日後のつらさのため、A さんは中国への帰国も考えた。しかし、現実には甘くないことに気づくことになる。「私がやめた後、何百人という大げさだけど何十人はすぐに応募する。同じ会社であっても、歳もいってるから同じ条件では入れない」という言葉には、自分が置かれている状況を冷静に把握しようとする考えと、自分が選択した道への後悔の念で揺れ動く A さんの心情が読みとれる。「帰る場所がない」「元には戻れない」状況で、妻の「どうしてもと言うなら、帰ってもいい」という言葉は、苦悩する A さんには救いとなったと考えられる。結局 A さんは息子の進学のことも考え、日本に留まる選択をすることになった。

### ③ 未来へ繋がるライフストーリー

#### 語り 7：日本で骨を埋める決意をする(2 回目のインタビュー)

A：次は正社員になることだった。妻の病気の治療もあった。その時は貿易関連とかは断念した。...(略)...小さいけれど正社員になれるところにした。十何年になるけど、まだうまく作れないこともあるけどなんとかやってくることができた。

#### 語り 8：渡日当初の自分を振り返る(2 回目のインタビュー)

A：工場の中はうるさい。だから余計わかりにくい。それに忙しいから一回きりしか言ってくれない。何が何かさっぱりわからなかった。学校の先生みたいにゆっくりと言ってくれない。製品作るのは時間勝負の仕事で...もたもたしてるとすぐ怒られる。

今思い返したら、経営者の立場から見たら、悪い社員だった。

I: 仕事も遅いし、他の社員ともうまく話せないということですか。

A: うん、うん...

#### 語り 9: 日本社会に根付くということ(2回目のインタビュー)

A: 今でも、工場長にはよく怒られる。“おまえくらいはどこでもいてるわ”  
と言われる。代わりは探せばすぐ来るわって...と言われる(笑)。

今は、前とはちがって言葉通りではとらなくていい。だから、実際にミス  
したときはちゃんと聞く。前は聞けなかった。聞いても分からなかった。  
自分の判断でやった。でも今は聞くのはすぐできる。それの方がうまくい  
く。前は言葉もわからないから聞いて答えてもらっても分からない。“おま  
えは何回言うてもわからんのやなあ”とまた怒られる。それがいやだった。

I: よくそこまで変わりましたね。

A: それは、日本の文化とかも分かるようになってきたから。今は聞いてでき  
る方がいい。工場長になんでも聞く。

#### 語り 10: 自分に合うものを探したい(3回目のインタビュー)

A: 日本に来てよかったと今は思う。経済的にも日本の方が有利だと思う。環  
境も中国に比べたらとても空気もきれいです。中国にいたら今よりいい生  
活をしていたという保証はない...(略)。

A: 私は...一番いいことはないと思う。自分に合うものをさがしていくこと  
がいい。これからもそうしていきたい。

#### 語り 11: 今度は恩返しをしたい(3回目のインタビュー)

A: 今は、地域でボランティアをしている。だんだん生活も安定してきた。だ  
から、仕事以外のことにも余裕が出てきた。

I: 自分自身日本語を勉強しながら、ボランティアもしているなんてすごいで  
すね。

A: その頃夜間中学も卒業して、余裕も出てきたので、それで通訳のガイドの  
資格もとった。中国語は取れた。あと英語のガイドは難しい。日本語を英  
語にというのは何とかできる。でも逆(英語を日本語にするのは)は難しい。  
今年は試験受けられなかった。この間、妻の病気もあったし、また、来年

に向けてやっていきたい。

I: ああ、奥さんの病気・死というつらいことがあったけれど、目標を持って頑張ろうとしているんですね。

A: 仕事の後、TVばかり見てもおもしろくない。何かしないと...私自身、日本に来た時、地域の人にお世話になった。その人が教えてくれた。その時子どもの教育で困っていた。日本の小学校では言葉もわからないし、友だちも作れない。地域の人たちにお世話になった。だから今度は恩返ししたい。

渡日して困難な状況が続く中、Aさんは、キャリアを生かした貿易関連ではなく、小さいけれど正社員として働く道を模索することにした。妻の病気のこと、日本で骨を埋める決意を後押ししたものと推察される。そして、正社員として少し安定した生活を続けるに至り、やっと「なんとかやってくるのができた」と思えるようになった。「現在」の状況を肯定的に捉え、振り返ることができたこの語りは、「過去」のつらかった経験を客観的に振り返る語りへと繋がっていったと考えられる。言葉も分からず、仕事内容も理解できず、すぐに怒られることに対して、渡日当初、問題のベクトルを他者に向けていたAさんだが、「経営者の立場から見たら悪い社員だった」と自分の問題として振り返ることができるようになった。この語りの最後で、「うん、うん」と感慨深げに頷くAさんからも心情を読みとることができた。この語りは、再び、現在の仕事についてのAさんの語りに繋がっていく。Aさんは、上司に怒られることを笑いながら話しているが、言葉の理解だけでなく、日本人の会話のスタイルや文化に溶け込むことができるようになったから笑い飛ばせるようになったのだろう。ここまでの苦勞が忍ばれる語りである。

Aさんは、一通り今までのことを語った上で、人生は「一番いいことはない」とし、「自分に合うものを探していく」ことがいいと言う。この語りは、これまでの人生に自分なりの「意味づけ」をしていく作業に他ならない。日本で根をおろして生きていくことを決め、生活も安定してきたAさんだが、今まで苦樂を共にしてきた妻の死による喪失感は大であったであろう。ここでAさんは「お世話」になったと二回繰り返している。渡日当初から現在の振り返りをじっくりと味わうように自分の人生を整理していっているように筆者には感じ

取れた。これらの苦難を乗り越え、「恩返し」のボランティア活動やガイド資格取得に向けての勉強の再開は、Aさんの大きな達成感、そして、未来へ繋がるライフストーリーと考えられる。

#### ④ 夜間中学・識字学級の意味

##### 語り 12：心安まる場所(3回目のインタビュー)

I：夜間中学の意味は？

A：夜間中学は日本語を勉強しようと思って行っただけでなく、友だちも作れるところとして行っていた。だから勉強するということではなく、**心が安まる**というか、安心できる場所だった。

A：それに、夜間中学は、職場と違って、国際意識もまわりより高い。言葉遣いも職場とは違う。それに、中国のニュースがあれば...悪口のような...まるで矛先を私に向けてくることがある。でも、夜間中学やここ(識字学級)は、**争い**の話はしない。

##### 語り 13：ニーズに合った場所(3回目のインタビュー)

I：識字学級の意味は？

A：識字は個人個人の**ニーズに合った**というか、私が今興味あることに対応してくれるというところです。最初は、新聞に書いてあることを理解したいと思った。それで今では、八割位は理解できます。

A：次は日本の文学ということに興味を持った。最初は、小学生レベルの本から学んでいって...今読んでいる本は夜間の先生に紹介してもらった。風景の描写とか、**人の心模様**ということを理解したかった。そういうことに対応してくれるというのが識字学級です。

Aさんは、現実生活では言葉が分からないことで仕事や人間関係に支障を来していた。夜間中学・識字学級では、言葉を勉強するだけでなく、守られた空間(国際意識の高さや言葉遣い)の中で友だちづくりもできる「心安まる」「ニーズに合った」場所であり、安心して自己表現をし、「人の心模様を理解していく」居場所としての役割があったと考えられる。

⑤ Aさんと筆者との間で共同生成されたライフストーリー

語り 14：初めて日本人に話した(2回目のインタビュー)

A：こんな話は...同じ中国人なら多かれ少なかれ苦労はしている。その中では話したりする。でも日本人に話すことはない。こんなに話したのは先生が初めてだ。

I：よく話してくれましたね。日本人に話さないのは？話しても理解してもらえない？

A：そうではなくて、なんでこんな考えするんやとか思われたりしないかと  
...。

語り 15：同じ教育レベルの人と話がしたい(3回目のインタビュー)

A：同じ日本人でも色々な考え方の人もいるし...教育のレベルも違う。職場ではほとんどが中卒で...今は慣れたけれど、時にはボランティアをしたり、識字学級で自分のしたいことを勉強したいと思う。

I：中国ではAさんは、大学を出てましたものね。

A：うん、中国ではエリート仲間とかそれで仕事していて...、日本では話が合わないこともある。いつもパチンコがどうか、私の興味のない話ばかりで...もちろん社会勉強のために行くのはいい。でもいつもいつもだと疲れる。たまにはこの識字学級で本の勉強をしたくなる。

I：普段、同じ教育レベルの人たちと仕事をする人が多いですから...。でもAさんは、日本では教育レベルの違う人たちと職場で話したりすることが日常なんですね。

A：そうそうそれがしんどい。仕事はちゃんとするのはいいんだけど考えが違うのが...

語り 16：自分のために聞いてもらった(3回目のインタビュー)

I：インタビューを受けてどうでしたか？

A：こんな自分の経歴やくわしい話やなやみは、外の人にはしない。でも先生と勉強したり話したりしてる中で信頼というか...聞いてもらえると...先生の研究のためというよりは、自分のために聞いてもらったように感じる。聞いてもらって自分の心の中がスッキリした。

I: ああ、実は、私も A さんの話を聞きながら、自分の人生や生き方について考えることが多くて、私こそ何か自分のためでもあったと思うんです。有り難うございました。

インタビューを通して筆者は、どんな内容の話が提示されても A さんを尊重しながら話を聞くことを心がけていた。A さんの「同じ日本人でも色々な考え方の人もいるし...教育のレベルも違う」という語りは、一般論としてだけでなく、筆者自身のことを指している可能性が高く、A さんの語りに大きく影響したと考えられる。また、中国で高等教育を受けた A さんにとって、まわりにいる人たちの教育レベルがあまりにも違いすぎることは、コミュニケーションを図る上での困難だけでなく、自分の養ってきた知識や価値観を奪われたにも等しく、悲しみや怒りは大きかったと考えられる。したがって、高等教育機関で学んだ筆者は、A さんにとって、安心して語れる対象となり、A さんの「喪失と再生のライフストーリー」に大いに影響したものと考えられる。さらに、「外の人」「日本人」である筆者に詳しく話す A さんのライフストーリーは、「自分のために聞いてもらったように感じる」と A さんが言うように、これからも日本という国で生きていくライフストーリーに繋がっていくと考えられる。

### (3) Aさんの人生の考察

Aさんは語り14で「同じ中国人なら多かれ少なかれ苦勞はしている。」と語っている。確かに渡日した外国人が言葉や文化の違いに戸惑い苦しみながら生きていることは理解可能である。しかし、Aさん自身の苦しみ・怒り・悲しみはAさん特有のものであり、現時点では一般化できるものでない。また、インタビューという共同作業を通して、自分たちの「外」の人間と認識していた「日本人」である筆者に語るというライフストーリーが生成されたのである。その語りは、自分自身でマイノリティとして日本で生きていくことを引き受けようとするAさんの決意であると考えられる。

次に、夜間中学・識字学級が果たした役割は大きい。河合(1992)は、“マイナスを通してプラスが生まれる過程は、本来的「教育」そのものと言っていいのではないだろうか”とし、学校教育を「臨床」という視座から見ることを提唱している。本研究におけるAさんと筆者との間で共同生成された「喪失と再生」のプロセスや「未来へ繋がるライフストーリー」は、この考えを体現していたと考えられる。また、夜間中学・識字学級は、Aさんにとってただ知識を得るためではなく、現実社会で受ける多大な苦しみ・怒り・悲しみを癒す安全基地としての意味があった。具体的には、「心安まる」「国際意識が高い」「争いが無い」場所であり、だからこそ「ニーズに合う」学びが可能となり「人の心模様を理解したい」と思えるようになったのである。このことから、本研究において識字学級は、“抱える(contain)器としての学校”(Youell,B,2006)として機能していたと考えられる。

ところで、Aさんの人生は、祖国との決別、妻との死別、キャリアを捨てての就職、同学歴の人との関係の断絶という危機を乗り越えるという、繰り返される「喪失と再生」が大きなテーマとなっている。やまだ(2007a)は、“生きることは獲得すると同時に喪失することなのだという両行する見方”をすることの重要性を述べているが、このような見方は、Aさんと筆者とのインタビューで共同生成されていったと言えよう。また、やまだ(2007a)は、誰かと共に生きているという関係性について、“「誰かと共にいるという感じ」は精神の健康と幸福な部分の中核をなす”と述べている。Aさんの「喪失と再生」のライフストーリーを可能にしたのは、危機に遭遇しても、「どうしてもと言うなら(中国に)

帰ってもいい(語り 6)」と言ってくれる妻，そして，交流センター，夜間中学・識字学級での人との関わりの中で，「自分に合ったものを探すのがいい」と生きてきたことが大きく影響していると考えられる。

最後に，池田・仁平(2009)は，“ネガティブな体験の肯定的な語り直しがポジティブな感情を生み出す”ことに言及している。また，江(2013)は，“中国人就学生は自分の精神状態の悪さを自覚せず，心理支援にネガティブな固有観念も持っているため，心理の専門職によるサポートを避ける傾向がある。その反面，身近にいる日本語学校の先生や先輩・友人のサポートを受けることが多い”として，“心理支援を行う場合，支援者は『日常的なサポート源』として心理支援を行うことが適切である”としている。このことから，Aさんと筆者との間で共同生成された「喪失と再生のライフストーリー」のプロセスは，「...聞いてもらって自分の心の中がスッキリした(語り 16)」というように，Aさんのメンタルヘルス向上に繋がったと言え，今後の識字学級に通う渡日者へのメンタルヘルス向上の可能性を示すことができた。

### 3.1.2 ケース 2. Bさん(30代女性)の人生と解釈 (研究 2)

#### (1) Bさんの人生の概要

Bさんは、結婚・来日するまで中国で暮らしていた。大学では日本語を専攻し、社会人になってからは、夫(当時は婚約者)とともに旅行関係の仕事をしてきた。そんな矢先に発生した大地震。地震により旅行関係の仕事が大打撃を受け、中国での安定した生活を断念。その後、夫が日本企業に就職、日本での勤務となったため、同行して来日した。ご主人の仕事は忙しく、朝会社に送り出した後は、一人で過ごすのが日常となった。日本に知り合いもなく、近所付き合いもなく、夫が帰宅するまでの時間を一人で過ごさざるを得なかった。買い物に行く時は、スーパーで買い物をする時はレジに出すだけで済むため問題なくできたが、店員に尋ねて購入する店では言葉が通じず、買い物をすることもなかなかできずにいた。家では家事をする他、DVDを見たり、インターネットの動画を見たりして日本語の勉強を独学でしていた。大学で日本語を専攻していたので、その時のことを思い出しながらできた。そんな生活が続き、寂しくしんどくなってきた。来日してすぐに、歯が痛くなり歯医者に行かなければならなくなった時は困った。夫は仕事のため、病院探しも治療にも一人で行かなければならなかった。歯の症状をなかなか伝えることができず苦労した。このままではだめだと、インターネットで調べて、識字学級に来ることとなった。

## (2) Bさんの人生およびその解釈

Bさんと筆者の間で紡ぎ出されたライフストーリーのシーケンスは、「渡日の理想と現実との葛藤」「どこにいても居場所感のなさを感じて生きるつらさ」「自分の生きづらさを理解してもらえない孤独感」という三つのまとまりが見出された。その語りのシーケンスを図式化したものは以下の通りである(図6.)。

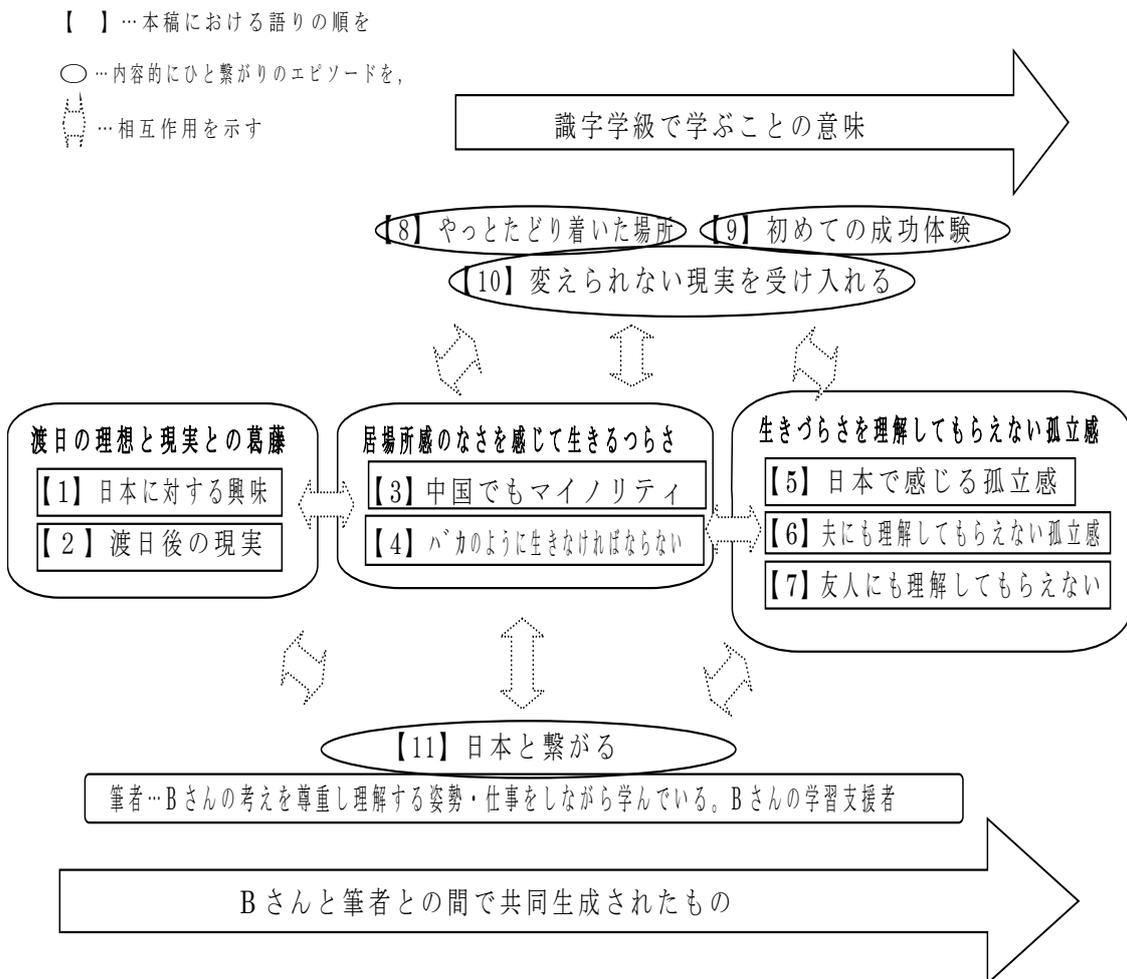


図6. Bさんのライフストーリーのシーケンス

図6.のシーケンスに沿ってナラティブを提示しながら、Bさんのライフストーリーを再構成し、経験の意味づけを考察は以下の通りである(語りについて

は、鍵になる言葉を囲みによって、特に重要な語りを下線によって表記した。  
なお I はインタビュアーを示す)。

### ① 渡日の理想と現実との葛藤

#### 語り 1：日本に対する興味(1 回目のインタビュー)

B：自分は朝鮮族です。東北地方には朝鮮族が多いのです。東北地方では、中学から英語と日本語のどちらかを選べるんです。私は日本語を選びました。...(略)それに、小さい頃から、アニメは日本のものをやっていたし...よく見ました。その時は私の友だちの中でも一番人気がありましたね

I：それもあって日本のことは少し興味があったんですか。

B：はい、それはありました。大学を卒業したら、日本に来て留学でもしようかと思うこともあったんですが。...(略)ちょっと日本で生活するもいいかと思って...留学も考えましたが...4年の後日本にいますね(笑)

#### 語り 2：渡日後の現実(1 回目のインタビュー)

B：主人が留学が終わって日本の会社で働くことになって...日本に来ることになった時、最初はうれしかった。自分も大学卒業して、来たいと思ってたこともあったので...でも来た後は、寂しいのがありました。主人はいますが友だちはいないし、両親も遠く離れていて...日本語も上手にできないし...それがちょっとなんといいですか(www)、自分がしたいところがありますが、言葉が出来ないので、外には出られないので、何をするにも不便になったので...なんかバカのように生活してるような...気持ちがあります。そんな時があります。その時は帰りたいです(あはは)...はい。

Bさんの故郷では中学から日本語を選択して学ぶことができた。そして、日本語を学び始めた Bさんは、次第に日本で生活することもいいなと感じていた。その願いが結婚を機に現実化したとき、Bさんは喜びでいっぱいだったということは想像できるが、インタビューでは、日本での生活については“最初はうれしかった”としか語っていない。それは、家族も友人もまわりにはおらず、日本語も分からずに生活しないといけない、それもほとんど外出をせずに暮らさなければならない過酷な現在の現実に圧倒されているためではないかと考えら

れる。

## ② どこにいても居場所感のなさを感じて生きるつらさ

### 語り 3：中国でもマイノリティ(1回目のインタビュー)

B：自分は朝鮮族です。東北地方には朝鮮族が多いのです。東北地方では、中学から英語と日本語のどちらかを選ぶんです。私は日本語を選びました。

B：私のところは朝鮮族が多いから、日本語も習いましたが、他のところはちがいます。大学から専門に勉強することはありますが...中国では漢族が大多数ですから、他の民族は少ないですから...漢族の学校ではみんな(中学から)英語を勉強します。私の学校だけ...

B：東北地方には朝鮮族が多いんです。それは、昔朝鮮から移ってきた人がいたから。貧しかったりして、中国や日本とかに行ってきた人たちがいました。

### 語り 4：バカのように生きなければならない(1回目のインタビュー)

B：日本に来ることになった時、最初はうれしかった。...(略)でも、すぐにそうじゃなくなった。こっちに来て、主人以外知り合いもない。それに、ガス代や税金や何かで、日本人と話さないといけないけど...それが怖かった。自分が言いたいことは、調べて、こう言おうと勉強できるけれど、向こうが何を言うかわからない。同じ意味でも、日本では多くの言い方がある。知らない言い方をされたらと思うと怖くて、話せなかったし、銀行にも行けなかった。

B：何か...バカに暮らしてるようだった。

I：バカに暮らすって？

B：主人がいない時、ガス代や税金のこと、言われてもわからない。自分で電話かけとしたいですが、何を言ってもいいかわかりませんし、電話するのが怖いです。簡単なことですが、自分ができないというのがあってちょっとバカみたいに思って...とても簡単なことですが、自分でできないのが...

朝鮮族である Bさんは、中国で暮らしている時もマイノリティであった。Bさんが中国では大多数である漢族の人たちが英語を学ぶのに対して、日本語を選択して学んだことはマイノリティとしての意地であったのかもしれない。さらに、言葉も分からず外国人として渡日することは、今まで以上にマイノリテ

イとして生きていく現実と向き合わなければならなかったと考えられる。中国では、簡単にできていた各機関での手続きや買い物も思うように出来ない状況を“バカに暮らしている”と表現しているが、この言葉には、中国においても日本においても居場所感が得られないことに対する、心からの怒りや焦燥感を表した言葉であるのかもしれない。

### ③ 自分の生きづらさを理解してもらえない孤独感

#### 語り 5：日本で感じる孤独感(1 回目のインタビュー)

I: 最初は日本に来るのを楽しみにしていたけど、すぐに気持ちが変わっちゃった？

B: はい。知らない人ばかりですから、主人はいますが...休みの時はショッピングがしたいけど、女の子は好きでも、主人は男の子だから、男の子はずっとショッピングはいやだから、自分で行くのはちょっと...その時は帰りたいです。

I: 毎日は仕事だけど、休みの時は一緒にいてほしいですね。

B: 主人と話さないときもありますけど...その時友だちと話したいけど...友だちがいないから...(略)友だちもいないし、寂しくて帰りがたかった。

#### 語り 6：夫にも言えない孤独感(2 回目のインタビュー)

I: 帰りたい気持ちはご主人にはどんな風に話されたんですか？

B: いえ、主人には言いませんでした(はははは)。それは自分の考え...

I; それはまたどうしてですか？だって日本では知ってる人はご主人しかいないのでしょ...結婚したんだからご主人なら何でも言えるんじゃないですか？

B: はい、でも、主人の仕事はこっちにありますから、帰っても離れて生活しないといけませんから...そんなこと主人には言えることではありません。

I: 例えば言ったらどんな答えが返ってきたと思いますか？

B: これは主人の問題ではありませんから、私が解決しないといけないものですから...会社はここだから私のためにやめることできません。

#### 語り 7：友だちにも理解されないうらさ(2 回目のインタビュー)

I: 悩みを誰にも話せないってつらくなかったですか。

B: 友だちに話しました。こっちに来たばかりで主人に話したら、主人に負担がかかるかもしれないから、話しませんでした。

I: じゃあ、それで、友だちに？

B: はい（中国や韓国の友だちに相談）。友だちは私のことを...うらやましいと言っていました。でも、私はそうは思いませんでした。友だちは、せっかく日本に来たんだから、日本語勉強したらどうと言いました。私の専攻が日本語だから、もっと勉強したらと...言いました。卒業してから日本語を使う機会がなかったんだから、この機会にもっと勉強したらいいって言ってました。

I: そう言われてどう思いました？

B: 最初、日本に来る前は私もそう思ってました。学校に行かなくても自然に上手になると思っていました。でも、来たら、私の思い通りにできません。はい。だから最初はとてもつらいでした。

1 回目のインタビューで、Bさんは、夫に対する不満や近くに友人がいないことの寂しさを語った。この語りは、2 回目のインタビューに影響していると考えられる。中国に帰りたい気持ちを本当は夫に聞いてもらいたいが、夫には“負担”になるから、そんなこと(帰りたい)とは言えず、“自分の問題”として抑圧しなければならなかった。そんなつらさを友だちなら理解してくれるとのBさんの願いは“思い通り”にはならなかった。日本で孤独感を感じながら生活するBさんに対する、友人の“うらやましい”“もっと勉強したら”という言葉はBさんをさらに孤独へと追いやった。この状況を一人で抱えなければならなかったBさんのつらさは過酷なものだったと考えられる。

#### ④ 識字学級の意味

語り 8: やっとたどり着いた場所(1 回目のインタビュー)

B: 最初はこんなもの(識字学級)あるのも知らなかったです。それも主人があるかもしれませんからってインターネットで探しました。でも自分ではできませんでした。まだ、銀行に行ってカードを作ったときも、自分で行くの

が怖い

です。自分で話し合うのが怖いです。相手から話すのが全然わかりません。

#### 語り 9：初めての成功体験(2 回目のインタビュー)

I：前に、税金のことで困ったと言っていたんですが...どうしたんですか？

B：電話番号が書いてあったけど、そこに電話するのが怖かったです。だから(識字学級の)先生のところに持って行って教えてもらいました。教えてもらってよかったです。

I：よく質問しましたね。もし質問しなかったら、またご主人にしてもらわないといけないでしょ。

B：その時は主人が(長期出張で)いなかったんで...(略)電話すると相手の言うことはわからない...それより、識字学級で先生に聞く方がいいと思いました。だから真っ先に先生に書類を見てもらいました。

#### 語り 10：変えられない現実を受け入れる(2 回目のインタビュー)

I：識字学級にはどうして？

B：自分で...道を探すしかできないので、誰に頼ることもできないし...外に出て、自分で言葉を覚えて友だちも作らないとと思いました。

I：帰りたいという気持ちが途中で変わったの？

B：いえ、帰りたいのは今でも帰りたいけど、それは仕方がないですね。こちらに 2・3 年はいないといけないので...日本に住んでいる限り勉強しないといけません。はい、それが変えられない現実ですね。

“中国に帰りたい”と夫に話せないでいる B さんだが、日本語が理解できず怖くて外出もできない B さんの思いは夫には伝わっていたのであろう。自分ではできなかったが、夫が探してくれた識字学級に通うことになる B さんであった。夫の支えを感じて“変えられない現実”に立ち向かおうと決心したのであろうか。識字学級に通うことは、日本に来てはじめて自分で前に進む体験であり、B さん自身が“道を探す”プロセスそのものとなった。識字学級に通いはじめて、現実生活の困難を識字学級のスタッフに相談でき、うまく対処できたことも意味深い。

⑤ Bさんと筆者との間で共同生成されたライフストーリー

語り 11：日本と繋がる(3回目のインタビュー)

I：識字学級に来てから変わったことは？

B：日本語を勉強するというだけでなく...ここ来ると先生や友だちとも話すことができます。...日本の文化というか...この前も、料理教室ですか...巻きずしとうどんを作りました...(略)そういうことが分かるようになりました。

I：日本と繋がっているという感じですか？

B：ああ、はいそうですね。

I：気持ちの上では？

B：ここに来て、仕事でしんどくても、休まずに来ようと思うようになりました。

Bさんにとっては、はじめて“日本と繋がった”と思える体験であったのではないだろうか。そして識字学級は、先生や友だちと話すことを通して人との関係を築いていったり、日本文化を学ぶ場所として機能していくことになった。さらに、“しんどくても休まずに来よう”という生きる力を与えてくれる場所となっていくと考えられる。

### (3) Bさんの人生の考察

Bさんは、小さい頃から日本のアニメを見る機会があり、日本に興味を持ち、大学を卒業後は日本に留学してもよいと思っていた(語り 1)。また、Bさんは中国人ではあるが、朝鮮族出身であり、中国の中でもマイノリティに属してきた(語り 1, 語り 3)。したがって、Bさんの日本に対する興味関心は、ただ単に日本に興味を持っているということだけでなく、中学の時に外国語選択時、大多数が選択する英語ではなく、日本語を選択したことからも、民族アイデンティティが影響しているものと考えられる。

その後、夫の仕事の関係で渡日することになったBさんは、「最初はうれしかった」と語っている(語り 2)が、「すぐにそうじゃなくなった」(語り 4)というように、家族や友人もおらず、その上言葉も理解できず暮らさなければならない厳しい現実に直面することとなった(語り 2)。そんな中、唯一頼りになる存在は夫であったが、仕事で忙しくする夫と話す機会も十分に取れない状況の中で、日本で暮らさざるを得なくなった。そんなBさんの気持ちは「バカ」のように暮らすようになり、そのうち電話に出るのも「怖い」と感じるようになった語り(語り 2, 語り 3)に表れている。

そんな中Bさんは、孤立感を感じるようになった(語り 5, 語り 6, 語り 7)さらに、寂しさから「中国に帰りたい」という気持ちになるが、夫にその気持ちを話すことができなかった(語り 6)。そこで、中国や韓国の友人に悩みを相談するが、「うらやましい」「せっかく日本に来たんだから日本語を勉強したらどう?」と返答され(語り 7)、益々孤立感を深めるBさんであった。そして、たどり着いたのが識字学級であった(語り 8)。

識字学級では、日本に来て初めての成功体験を経験した(語り 9)ことは、Bさんにとって少しの変化ではあるが、大きな転機となったものと考えられる。そして、識字学級で学ぶこと、筆者との対話を通して、「変えられない現実」を意識しつつ、「道を探し」始めることができるようになった(語り 10)。さらに、「日本とのつながり」を感じる(語り 11)経験となったと考えられる。

### 3.1.3 ケース 3. C さん(20 代男性)の人生と解釈 (研究 3)

#### (1) C さんの人生の概要

C さんは、中国で生まれ、大学卒業まで中国で暮らしていた。小さい頃から「自分の考えを持つことを大切にする」家庭に育った。地元の小学校を卒業後、よりよい教育を受けるために、親元を離れて中学に進学し寮生活を送ることとなった。その地で、絵を描く才のある C さんは特技を生かし、希望の高校に進学することができた。しかし、高校に入った途端、勉強に身が入らず、遊んでばかりいたという。その結果、寮の門限を破り停学処分になることもあった。その影響もあり、大学に進学するには学力が伴わず、浪人を決意するが、家族の理解が得られずにいた。ところが自然災害が C さんの運命を変えることになる。災害の影響で受験生は当該地域の大学を敬遠し、C さんにとっては現役で大学進学できる絶好の機会となった。大学で、美術関係に興味を持ち始めた C さんは、卒業後、日本での大学院進学を目指し渡日することとなった。渡日後は日本語学校に通いながら学んでいた。しかし、思うように日本語が上達せず、来日して半年経った頃、渡日者の友人の紹介で識字学級に通うこととなった。筆者はそれ以来、個別学習支援を行った。そして、1 回目の学習支援の時、自己紹介を兼ね、研究および研究協力者を探していることを伝えていた。2 ヶ月たった 7 回目の個別学習を経てインタビューに至った。7 回の個別学習で C さんは、「日本に来て、気力が充実している。目標(大学院進学)に向かって頑張っている。」と前向きな発言をしていた。実際 C さんは、日本語学校、生活費を稼ぐためのアルバイト、識字学級と精力的に活動していた。

## (2) Cさんの人生およびその解釈

Cさんと筆者の間で紡ぎ出された語りのシーケンスは、「親元を離れて生きる」「困難を乗り越える原動力」という二つのまとまりが見出された。その語りのシーケンスを図式化したものは以下の通りである(図7.)。

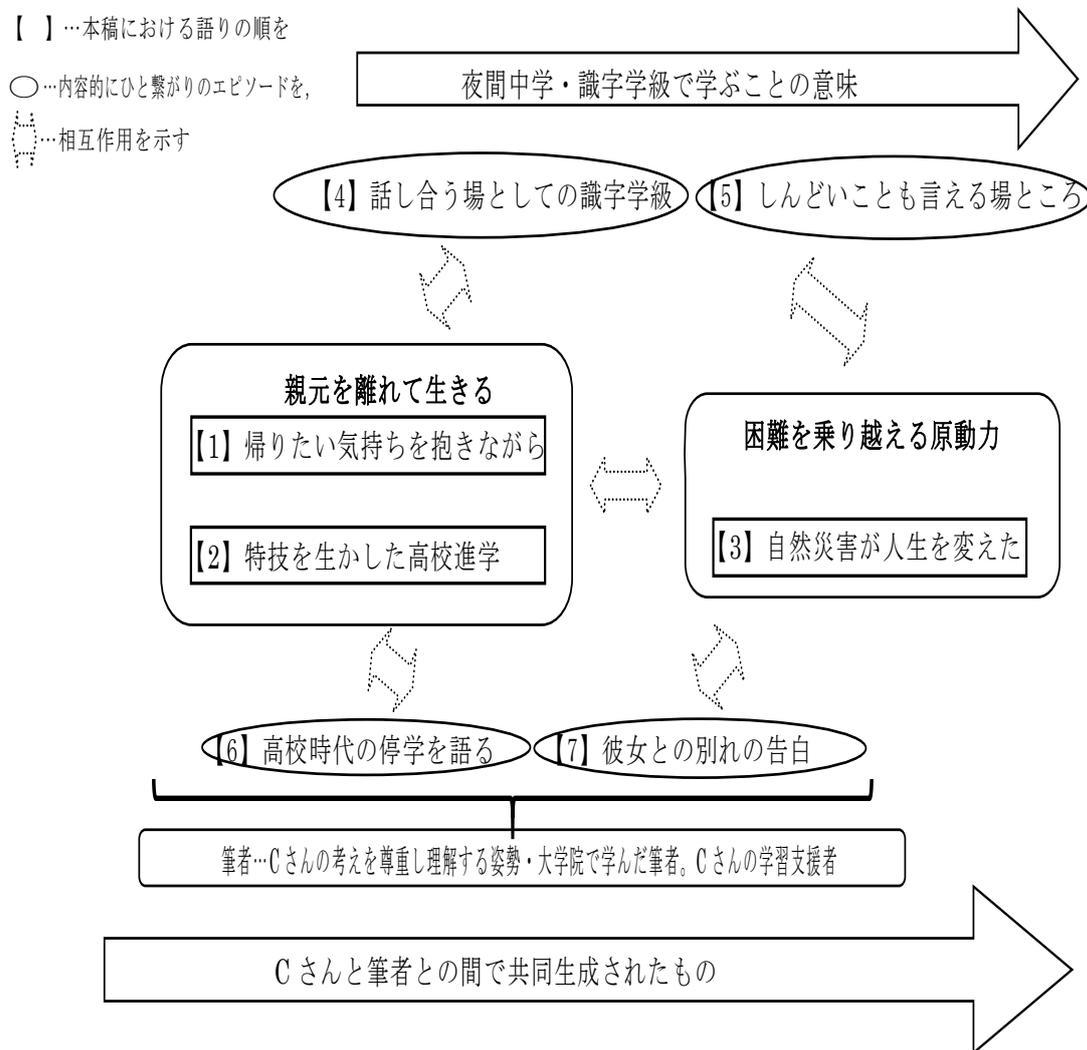


図7. Cさんのライフストーリーのシーケンス

Cさんのライフストーリーを再構成し、経験の意味づけの考察は以下のとおりである(語りについては、鍵になる言葉を囲みによって、特に印象的な語りを下線によって表記した。なおIはインタビューアを示す)。

## ① 親元を離れて生きる

語り 1：帰りたい気持ちを抱きながら(1回目のインタビュー)

I:小学校・中学校は自分の生まれたところで過ごしたんですか。

C:実は、小学校を卒業して、家を離れて生活してました。中学は自分で生活してました。しゅんせつもあったけど、泊まらせてもらった、1週間ほど...

I:へえ、中学から親元を離れて...中国では一般的なんですか?」

C:いえ...実は自分の周辺のところはいい学校がなくて...うちではそう考えた...

I:じゃあ、それはお父さんお母さんが考えた?

C:...自分で考えた...いやよく分からない。

I:小学校卒業した位だから自分でって言ってもよくわからないこともありま  
すよね。さびしかったですか。

C:もちろん、夜はさびしかった。

I:帰ろうと思いましたか?

C:はい、他の人たちは自分の家...近くからですから。

I:そうですね。他の人たちは近くから来てますからね。だいたい家から離れて  
たんですか。

C:バスで2・3時間はかかった。実はあの頃は私も小さかったし、とても遠  
かった。

I:さびしくて、自分の家の近くの中学校に行こうとは思わなかったですか。

C:それは思わなかった。自分の進路のために!それに交通もあの頃は不便だ  
ったし...

I:ああ...帰りたくても帰れなかったというのもあるんだ...。どれ位で慣れま  
した?

C:あー

I:新しい友だちもできて...寂しさがなくなってきたのは、どれ位たってから  
ですか。

C:もう、その時は自分の身の回りの人との関係がよかったので、早くのう  
ちに慣れた。

## 語り 2：特技を生かした高校進学(1 回目のインタビュー)

I:で...高校は？

C:高校は...いい学校に合格した...ははは...あの時は自分の才能のおかげで  
いい学校に合格した。絵を描く才能で...

I:はい、じゃあ、もう高校に入るころから、今やりたいと思うようなこと、デザイン...を目指していたんですか。

C:いや、あの時はデザインは何も(やっていなかった)...ただ進学のために、得意な絵で...

I:芸術の学校に行った訳？

C:いや、中国の学校は、自分の...絵とか音楽とか体育とかで受けれるから...  
自分の得意な絵を選んだ

I:日本では、国語とか英語とか...全教科受けないといけないのにシステムも違うんですね。

C:いい訳ではないですね。進学のため...興味もないのに...目的のため(絵で受験する人)...よくないです。

I: Cさんは、元々絵を描くのが好きだったんですね。

C:はい...だから今は少し悲しいですね。

インタビュー前の7回の個別学習で、Cさんは「自分の考えを持つことを大切に」家庭に育ったと語っていた。「いい学校」への中学進学に際して、親の考えだけではなく、自己選択した部分も大きいと推察される。しかし、親元を遠く離れた寄宿舎生活は寂しいものがあつたが、進学初期段階でまわりとの人間関係を良好に築けたことが中学生活に大きく影響を与えたと言えよう。高校進学に際しては、自分の絵の才能が生かされたことはCさんにとって大きな成功体験であると共に、大切にしているものを受験の道具としてだけ使う他の受験生や受験制度に対する違和感は、Cさんのプライドに起因するものでもあろう。

## ② 困難を乗り越える原動力

### 語り 3：自然災害が人生を変えた(1 回目のインタビュー)

C:高校ではあまりよくなかった。勉強はしなかった。同じ入った人は同じ教室で、みんな遊んで...あの時は何もしないし...パソコンゲームばかりやっていた。今は後悔しています。.....

C:高3の後半は、自分の進路のことを考えて、勉強しました。でも、長い間勉強してなかったから...だめでした。卒業試験の時には全くできなかった。その時は自然災害が起こって...その地方の大学は(学力の)要求が低かった。

I:学生が集まらないからですね。

C:他の人は、怖いと思いますけど、私は...要求が低いから入れるから...

I:ああ、他の人は怖いと思って受けないけれど、Cさんはそれをチャンスにしたんですね。

C:うん、そうです。

I:それでも災害がまた来たら怖いとは思わなかった？

C:(怖いと)思わなかった。どうせ、大学は受からなかったから、要求は低い...もう一年勉強したいとお母さんに言ったけど、それはダメと言われた。だから勝手にそこの大学の(願書を)書いて出した。

I:お母さんは、その年大学に入らなかったら、もう行かなくてもいいと...

C:だから、神様がもう一回機会をくれたと思います。だから、今度は勉強しました。

親元を離れ中学時代を過ごし、自分の特技を生かして進学した C さんであったが、高校時代は仲間と遊んでばかりいて勉学が疎かになっていたという。その結果として大学進学が困難な状況となり危機に陥った。ところが、自然災害のため、倍率の下がった大学を受験する決意をした C さん。自分の考えを信じての決断であったと推察される。そして、見事大学に合格するに至った。このことについて、「神様がもう一回機会をくれた」「だから、今度は勉強しました」と語るように、C さんにとっては、人生の大きなターニングポイントとなったことは言うまでもない。

### ③ 識字学級の意味

#### 語り 4：話し合う場としての識字学級(2回目のインタビュー)

I:識字学級に来るのはCさんにとってどう？

C:実は、毎週1回では、日本語が上達するというのは無理です。でも、**話し合う**ことで、相手から知識をもらえることができる。

I:ああ、そういうことかー。コミュニケーションということですね。お互いが話し合うということがCさんにとって意味があるんですね。

C:そう、いろんなことが分かります。

I:僕と話していて、そういうことある？

C:いろんなこと...日本の生活とか文化とかわかる。歴史とか、自分の知識とか生活の経験とかが理解できるのがいい。

#### 語り 5：しんどいことも言える場(2回目のインタビュー)

C:友だちにここを紹介してもらって、最初は日本語を勉強したいと思った。でも、だんだん来てるうちに、自分の考えは変わってきた。話すだけでなく、**探していく**というか、人と人との関係とか、知識の交流とかを通して**明るく**なりました。

I:明るいつてどういう意味？

C:・・・。

I:わかる、元気になる・安心...というように使うけれど...

C:ああ、**安心**したというのが一番ぴったりです。

I:ここは安心できる場所という意味があるんですね。

C:1時間半では、日本語を覚えるというのはできない。話し合うことで、得られるものが大きくなってきた。**人との繋がり**方とか...

I:有り難うございました。異国の地で一生懸命生きているCさんのこと、応援しています。それに、弱音が吐きたくなったら、また話してくださいね。

C:ありがとうございます。ここで...河合さんと一緒にこうやって話せたから、しんどいことも言えた。また、**お互いに**よろしくお願いします。」

Cさんにとって識字学級は、日本語を学ぶというより、日本語を学ぶことを通して、何かを「探していく」場であり、人との繋がり、日本という国との繋がりを学ぶ、つまり相互交流の場として機能していると言えよう。また、識字

学級はCさんにとって「しんどいこと」も語ることができ「安心」でき、識字学級に来ると「明るく」なれる場なのであろう。

この語り5はインタビューの一番最後であるが、初めて筆者の名前を呼んで「お互いに」よろしくと締めくくっている。インタビューのプロセスがCさんと私との共同作業そのものであったことをCさん自身が意識している語りと考えられる。

#### ④ Cさんと筆者との間で共同生成されたライフストーリー

##### 語り6：高校時代の停学を語る(1回目のインタビュー)

C:高校ではあまりよくなかった。勉強はしなかった。同期の人は同じ教室で、みんな遊んで...あの時は何もしないし...パソコンゲームばかりやっていた。今は後悔しています。

I:僕も、学生時代あまり勉強しなかったから後悔はあります。

C:同じクラスの女の子もいっしょに遊んでいましたから、学年が上がったときクラスが別れました。

I:遊んでいる者同士一緒のクラスにしていたらだめだと...

C:成績は全クラスでも悪いでした...

I:僕は高校の時はそうでもなかったですが、大学の時は勉強しなかった。それを今後後悔しています。

C:あの時は...って...でもね...高3生の時は...学校で少しの間停学になりました。

I:勉強しないから？

C:いえ、学校の規律を無視して夜は勝手に外に遊びに行って、見つかって処分になりました。

##### 語り7：彼女との別れの告白(1回目のインタビュー)

C:実は、恥ずかしいこともありました。大学では彼女もいました。私と彼女の関係はとてもよかったです。でも、家族はずっと反対してました。だから、家族は日本に来ることになったら、彼女と別れることになるから...

I:彼女と別れるんなら...と

C:うん、すぐに賛成してくれました。

I:日本に来るのはいい。でも C さんにとっては、彼女と別れるというのは...  
ちょっとつらいことだったでしょ

C:うん。

I:それは大丈夫だったですか。

C:うん、今はちょっと後悔している。もう一度チャンスがあれば...日本に来てはいない。一つ言えることは、一つ手に入れるともう一つは手に入らない。

I:もし機会があれば日本に来ていないというのは...一つは...彼女と別れたくない。もう一つは社会に出たい。...大学は出たけれど、社会は経験していない。今、日本で言葉も分からない。それに大学院への道もまだまだ遠い...それで落ち込んでいるのもある？

C:後悔して、自分が選んだことに何もしないというのはいけない。自分で選んだことは自分でやり通す。

I:ああ、C さん、えらいなあ。

C さんは語り 6 では高校時代寮の友だちと遊んでばかりで勉強をしなかったことを語っている。それに対して筆者も学生時代に勉強しなかったことを後悔している旨自己開示をしている。このやりとりで筆者に自己のマイナスな部分を語っても大丈夫だと認識したのかもしれない。それが、C さんの、仲間と門限を破ったことによる「停学」という語りに繋がっていったと考えられる。さらに、「恥ずかしいこともありました」と自ら、彼女との交際を親に反対されたこと、別れについての語り語り 7 へと続くことになったと考えられる。しかし、「後悔」はあるものの、日本で大学院を目指すという「自分で選んだこと」をやり通すという意地とも言える強い気持ちが見られる。

### (3) Cさんの人生の考察

Cさんは、中学、高校、大学と「いい学校(語り 1, 語り 2)」を目指して頑張ってきた。さらに、渡日し大学院に進学しようと決意する強い意志を持っている。これは小さい頃から「自分の考えを持つことを大切にする」家庭に育った影響や大学進学に際しての「神様がもう一回くれた機会(語り 3)」という体験によるところが大きいと考えられる。そして、念願の渡日を果たし、最初は気力も充実して目標の大学院進学を目指して勉学に励んできた C さんであるが、言葉や文化の違う日本での苦労は、今までとは違うものであることは想像に難くない。それは、「今はちょっと後悔している。もう一度チャンスがあれば...日本に来てはいい(語り 7)。」からも読み取れる。しかし、渡日し識字学級に来た当初、「気力が充実している」と語っていた C さんが、「高校時代に勉強をしなかったことについての後悔(語り 6)」や自ら「恥ずかしいこと」と言った、恋人との別れにまつわるエピソード(語り 7)等の弱音を筆者に話せたことで、後悔を抱えつつ「自分で選んだことは自分でやり通す(語り 7)」という気持ちになれたのだと考えられる。以上は第一回目のインタビューであるが、筆者にネガティブな感情を少しなりとも話せた C さんの第二回目のインタビューでは、「自分の考えは変わってきた」「明るく」「安心」というポジティブな言葉(語り 5)が多く語られた。さらに、第二回目のインタビューで、C さんは識字学級の意味について語るが、彼にとって識字学級は日本語を学ぶというよりは、「人と繋がり」「話し合う」場であり(語り 4)、「安心」できる場(語り 4)なのである。これは、C さんにとって識字学級が“抱える(contain)器としての学校”(Youell,B,2006)として機能していたと考えられる。

### 3.1.4 ケース 4. D さん(40 代女性)の人生と解釈 (研究 4)

#### (1) D さんの人生の概要

D さんは、母親を始め弟も教員をしている教育一家の長女として生まれた。教育系の大学卒業後 10 年間、教職に就いていた。勤務成績もよく国費で内地留学も経験し、現職復帰後は教育行政の仕事を約 10 年するようになった。その間、国費で MBA 取得を薦められるがその方向には進まなかった。次に D さんは弁護士を目指すべく、法律を専門に学ぶため教職に就きながら大学院でも学ぶ生活を送ることとなった。しかし、父が病に倒れ介護が必要になったことで、大学院を途中退学することになった。その後介護していた父も亡くなり、再び自分のやりたいことを模索するようになった。元来好奇心旺盛で勤勉な D さんはアメリカで仕事がしたいと思うようになるが、ビザが思うように降りなかったため、渡航先を日本に変更し、渡日することになった。日本では、中国からの渡日者への教育支援の仕事に就くことになった。渡日後知り合った日本人男性と結婚し、15 年位生活した。その間子どもをもうけた。しかし、夫との間で、子どものへの教育方法についての考え方の相違や震災の不安もあり、家族と別居・転居し、日本語を正しく学ぶために日本語学校および識字学級で学び始めることとなった。

来日して 15 年の間に結婚・出産・子育て・震災と経験する中で、正しい日本語を身につけるために識字学級に通い始めた D さん。筆者が他の中国からの渡日者と日本語学習をしている時に、D さんから、日本語についての質問をして来られたことがきっかけとなり、自己紹介をすることになった。偶然にも、筆者と同様、教職関係者という共通点もあり、インタビューの依頼に対して「自分の日本語が拙いことが気になります。それ以外は問題ないです。」と筆者からの申し出を受諾。インタビューに至った。

## (2) Dさんの人生およびその解釈

Dさんと筆者の間で紡ぎ出されたライフストーリーのシーケンスは、「中国で教師を続けていくことの葛藤」、「自分の人生を生きるための渡日」、「渡日の理想と現実」という三つのまとまりが見出された。その語りのシーケンスを図式化したものは以下の通りである(図8.)。

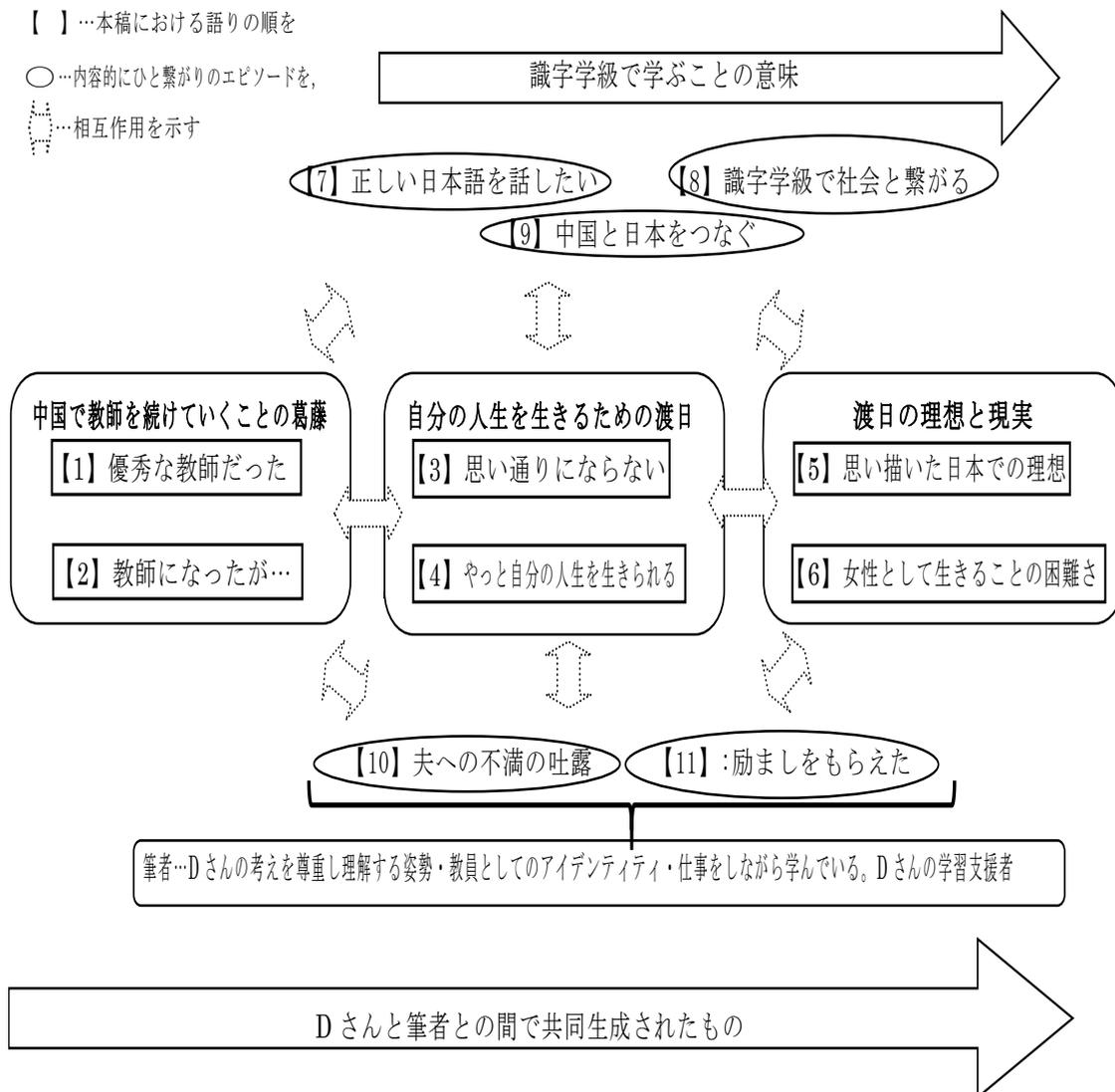


図8. Dさんのライフストーリーのシーケンス

図8.のシーケンスに沿ってナラティブを提示しながら、Dさんのライフストーリーを再構成し、経験の意味づけを考察は以下の通りである(語りについては、鍵になる言葉を囲みによって、特に重要な語りを下線によって表記した)。

なお I はインタビュアーを示す)。

### ① 中国で教師を続けていくことの葛藤

#### 語り 1: 優秀な教師だった(1 回目のインタビュー)

D: 私の自己紹介をまず...家族もみんな先生で、私も中国の教育の大学で学びました。そして卒業して 10 年は先生をしていました。大学に入るまでは、理科が苦手でしたが、最初の授業で元素記号を 100 書いてごらんと言われて、書いたら自分以外はうまく描けず、先生が”すごいね”と言ってくれました。それから化学の勉強をして、理科の先生の資格を取りました。それで、小学校から短大まである学校に勤めて理科を教えていました。教務の仕事もして、割と優秀な教師でしたから、今度は国語も教えてほしいということで、国のお金でもう一度大学で国語の資格をとらせてもらい、戻ってきて、国語も教えるようになりました。

#### 語り 2: 教師になったが...(1 回目のインタビュー)

D: 中国での後の 10 年は行政の仕事もやるようになりました。教育関連の仕事です。日本でいうと教育委員会のような仕事です。でも、私は行政の仕事より、直接教育、子どもを教えることの方がしたいと思っていました。でも自分のやりたいということをさせてもらえないことはないのですが、それで仕事をしながら、仕事が終わったら塾で理科・国語・英語も自分で勉強して...教えていました。

中国の教育一家に生まれ育った D さんであるが、D さん自身も教職に就くことになった。仕事ぶりは優秀であった D さんだが、仕事ぶりか認められるにつれ、直接生徒に指導する仕事から行政の仕事が増えていった。このことで、自分の能力を評価される満足感とやり甲斐のある仕事ができない不全感との間で葛藤を生じることとなり、中国で教師を続けていくことの困難さに繋がることとなったと推察される。

## ② 自分の人生を生きるための渡日

### 語り 3:思い通りにならない(1 回目のインタビュー)

D: そのうち、教える仕事が中国で思うようにできないなら...と外国に行つて暮らしたいと思うようになりました。国のお金で MBA の取得のために留学を薦められたのですが、考えた末やめました。そして、自分で法律を勉強して弁護士になろうと思いました。中国でも弁護士はお金がたくさん入ってきます。それが第一の目的でした。

I:なぜ方向転換をしたのですか？

D:ところが、父が倒れ、介護しなければならなくなった。政治と法律の勉強が中心でした。政治の方は、仕事と関係あることなので、休んでも分かったが、法律の勉強は今までやったことがなかったので、休むと分からなくなった。母は”あなたは勉強をそのまま続けなさい”と言ったが、母一人に負担をかけたくなかった。父母の人生は一つなので、大学院は2年でやめました。授業料は4年分払っていたけれど、それでもいいと思った。そして仕事しながら介護に専念しました。やめて、2か月後に父は亡くなった。だから後悔しなくて済みました。

### 語り 4:やっと自分の人生を生きられる(1 回目のインタビュー)

D: 次に、それなら、外国に、それもアメリカに留学したいと思った。弟は国語の教師から今は警察の仕事をしていますが、弟も留学したいと思っていた。でも弟は奥さんと子どももいたし、私の方が留学しやすかった。でも母は”ダメ”と反対しました。一つのことをやりとおすことが大切だと...その時私も仕事をしていましたから、それをやり切ることが重要と母は考えていました。そして、ビザも下りなかった。それで、日本に変えました。

やりたい教育の仕事がなかなかできない状況になり、Dさんは留学を考えることになる。国費での留学のチャンスにも恵まれながら、考えた末に断念したDさん。断念した理由は述べられてはいないが、その後自分のお金で授業料を支出して弁護士になろうとするDさんから、国費の留学では自分のやりたいことができない、自分の力で成し遂げることに意義があると考えたのかもしれない。しかし、この計画は、父の病・介護で断念せざるを得なくなる。「父母の人生は一つしかない」「後悔はない」とこの間のことを語るDさんだが、本当は

自分の人生の可能性や、それを断念した後悔が滲み出ている語りとも言える。さらに、アメリカへの留学を考えた時「一つのことをやり通すことが大切」と語る母の言葉に対して、国を変えてでも自分自身の考えを貫こうとするのは、Dさん自身が自分の人生を歩み出そうとしている決意の表れなのだと考えられる。

### ③ 渡日の理想と現実

#### 語り 5: 思い描いた日本での理想(2 回目のインタビュー)

D: 日本は、漢字を使って言葉も簡単かなって、顔もよく似ている... 黄色人種だし、こんなに難しいと分かっていたら、来なかったかもしれません。安定したら、日本に家族全員連れてくるかなとも思っていました。

#### 語り 6: 女性として生きることの困難さ(3 回目のインタビュー)

D: 中国では共同... 日本だけ違います。どうしてですか？

I: 少しずつ、女性の地位も上がってきているんですが... まだまだでしょうか。

D: 働く女性も、男性が有利ですね。家でも... 風呂も先でしょ。男が... 女性の方がきれいにしないといけないのに、絶対男が先です。だから来た当初はシャワーだけしかしませんでした。今はそんなことないけど... 中国では、女性の方が学歴高い。女性の方が勉強も頑張る。仕事場でも地位が高い。だから、中国では、女性の方が帰るのが遅いことがある。だんなさんが先に帰って、ごはんを作ってることもあります。でも、(日本では) 台所は私の場所みたいですね。

念願叶い、留学を果たし、15年日本で暮らすDさんであるが、この間、理想通りにはいかない現実があったことは想像に難くない。その中でも、語り6は、女性であることで受ける不利益に対しての語りである。インタビュー中、終始笑顔を決やさないDさんであったが、「中国では共同... 日本だけ違います。どうしてですか」と強い語気で語ることがあり、日本に対して、また男性である筆者に対しても怒りが向けられていたと考えられ、日本での15年のDさんの苦労が忍ばれる語りである。

#### ④ 識字学級の意味

##### 語り 7:正しい日本語を話したい(1回目のインタビュー)

D: 日本人のように話したい。中国の家族はみんな優秀で、一つのことをずっと進めていくということを大切にしています。だから私もそう思うんだと...

子どもとは家では中国語で話してきた。中国から来た子どもにも教えていた。だから、日本語を上手に話そうと思わなくてもよかったところがあります。

でも、日本に長いこといるのに日本語を正しく話せないのは恥ずかしいなと思います。”だから日本語を上手に話すぞ”と思います。

弟が、中国語の文書を日本語に訳す仕事を依頼してきました。”何年もいるのにできるでしょ”と...でも、できないという、”できないの!”と言われた。

##### 語り 8:識字学級で社会と繋がる(1回目のインタビュー)

D:識字学級では、仕事場のことも聞くことができます。私は、ニュースにも関心があるので新聞もよく読みますが、どう読めばいいのかわからない時、ここでは聞ける人がいます。

I:ああ、ここでは日本語を学んでいるというだけでなく、ここで学ぶことで、社会と繋がっているという感覚があるのでしょうか。

D:そうなんです!

##### 語り 9:中国と日本をつなぐ(1回目のインタビュー)

I:識字学級で学んでどんな風に感じていますか。

D:〇〇のいろいろ...町の人と接することができる。そして同じ中国から来た人で日本語の上手な人と知り合いになって話したい。そして日本語の先生になりたい。

弟は、今教育関係の役所の仕事をしていて、日本の習慣や文化を日本語で話せると、講演の仕事ができます。日中の関係についても教える仕事もできます。

I:それはきっと、Dさんが中国で育ち、教育に携わり、その後日本で生活したすべてのこと、一生懸命生きてきたことすべてが繋がる仕事になるんで

すね。

D:ああ!そんな風に言ってくださるとうれいす。

渡日後、子どもがある程度大きくなり、結婚や子育てでキャリアを積むことが思うように出来ていないことに気づいたDさんは、日本に長く滞在しているにも関わらず、正しい日本語が話せないことを恥ずかしく思っている。これは、中国にいる優秀な家族の中で育ったゆえのコンプレックスの表れとも言える。しかし、勉強熱心で仕事もできると自負するDさんは、何とか正しい日本語を習得しようと試みている。この語りに対して、筆者は「中国で育ち、教育に携わり、その後日本で生活したすべてのこと、一生懸命生きてきたことすべてが繋がる仕事になるんですね。」と返しているが、これは、Dさんと筆者で、識字学級で日本語を勉強することの新たな意味づけをする作業となった。

#### ⑤ Dさんと筆者との間で共同生成されたライフストーリー

##### 語り 10:夫への不満の吐露(3回目のインタビュー)

D:だんなは頭硬いから、変化は難いから...

日本の奥さんは、一言でいうと、私の感覚ですけど“つらい”の一言です。二つ目は育てることです。決定権が女性にないです。子どもの進級にしても、全く私の意見を聞かない。家庭で買うものは、だんなと相談しないといけないし、お金の使い方も、決定権がない。

どっちも能力あるなら、総合的に決めればいい。でも日本は、学識や能力ではなく、男性を中心に考える。だから共同ではない。」

一つ目の差は、“視野”です。だんなは視野狭い。日本だけしか知らない。二つ目は会社です。だんなは、一つの会社で一つの仕事しかしていない。私は、中国でも、教育はもちろん、いろんな計画もしたし、赤ちゃんから大学生のことまで関わった。会社にも行った。こっちに来てからは、経験のために、レジもやった。コンビニでも働いた。パチンコもどんなものか興味があつて、夜行って働いたこともあります。三つ目は、ずっと学び続けたい。新聞も読みます。一つでは足りない。3つ4つ読んだりしたい。でもだんなは、TVだけ。考えも古い。頭が硬い。四つ目は教育方法が合わな

い。

**語り 11:励ましをもらえた(3回目のインタビュー)**

D:最初は、不安がありました。それは、日本語が足りないから、理解してもらえないか不安でした。思い考えがちゃんと伝わるかです。でも、最初から先生との距離感が近いでした。通じるものがあるというのか...教育者同士というのもあったかもしれません。だから、話しやすかったし、何でも話せた。

D:3つ目は、尊敬というか、先生は一生懸命ですし、学ぼうとしている。だから、自分に励ましをもらえているようでした。

I:それは、私もなんですよ。自分も励まされているようでした。貴重な時間を有り難うございました。

語り 6 で、女性として日本で被る不利益について語気を荒げた語りを、筆者から否定されず受容されたと D さんが感じたのか、その直後から、不利益に関連して、自身の配偶者との関係が語られるようになった(語り 10)。それにより、遠い異国の地で生きること、日本の結婚生活における男女不平等を語りながら、これからの人生を前向きに歩んでいこうとする D さんと筆者との共同生成された物語(語り 11)に繋がったのではないかと考えられる。

### (3) Dさんの人生の考察

中国の教育一家に育ったDさん(語り 1)は、家族の影響もあり、自身も教師の道を選んだ。しかし、徐々に自分の「やりたい仕事ではない」と思うようになり(語り 2)、自国での可能性を模索していた。そのうち、国費での留学のチャンスが訪れるが断念(語り 3)せざるを得なかった。家族の影響で教職に就いたDさんが、紆余曲折しながら、自分の見つけた留学という道を歩み出そうとするが、それも断念し大学院進学という道を選択することとなった。しかし、今度は父が病気で倒れ、父の介護と母の「あなたは勉強をそのまま続けなさい」と母の言葉との間で葛藤し、最終的に「父母の人生は一つ」(語り 3)と、今回も方向転換せざるを得なかった。自分の人生を歩もうとするDさんにとって、父母のことを大切に思う一方、そのことが理由で大学院も中途退学するに至った経緯は、複雑な心境であったとことが推察される。

ここでDさんの夢は一度潰えたかに思われたが、アメリカへの留学のチャンスが巡ってくることになった。しかし、ここでは、母が仕事に関して「一つのことをやり通すことが大切だ」(語り 4)との反対に遭った。ここでは、再び断念するしかない状況に対して、留学先を日本に変更してでも成し遂げようとするDさんの姿に「自分の人生を生きたい」という心の叫びが読み取れる。

やっとの思いで渡日するに至ったDさんは日本での生活について希望を持つ(語り 5)が、言葉の違いや文化の違いに戸惑うことになる。そして、女性であるが故の生きづらさもDさんの日本での生活に影を落とすことになった。

このように思い描いた生活ではなかったが、日本人との結婚を経て、識字学級にたどり着いたDであった。識字学級での当初の目的は日本語を学ぶことだった。そのことを「日本に長いこといるのに正しい日本語を話せない」ことが「恥ずかしく」思い「日本語を上手に話すぞ」という決意を語っている(語り 7)。しかし、識字学級で学ぶことは、社会と繋がっていることであると自覚するに至った。そのことは、筆者が「ここでは日本語を学んでいるというだけでなく、ここで学ぶことで、社会と繋がっているという感覚があるのでしょうか」と質問したことに対して「そうです!」と力強く返答したことから推測できた。そして、Dさんと筆者で話すことを通して、識字学級での学びが「一生懸命生きて来たことすべてが繋がること」と意味づけることが可能となったと考えられる

(語り 9)。

ところで筆者は、D さんを尊重し、人生の意味を教示していただくという姿勢を保ちながらインタビューを行ったのだが、第一回目のインタビューでの筆者の支持的なやり取り(語り 8, 語り 9)が、スムーズにライフストーリーを共同生成させることになったと考えられた。さらに語り 6 で、筆者に対して「中国では(男女)共同…日本だけ違います。どうしてですか?」と語気を強めて怒りを表出するが、これは日本人であり男性である筆者に向けられたものであるが、日本での苦勞が忍ばれる語りであったため、筆者はその思いを受け止めながら聞いていた。ここでのやり取りがさらに、D さんとのライフストーリーの共同生成を促進させ、語り 10 の夫への不満の吐露に繋がり、最終的に「自分に励ましをもらえているようでした」(語り 11)と、未来のライフストーリーに繋がる語りとなったと考えられる。

## 第4章 (研究5)

# 中国人渡日者の心理的援助の検討 ～転機の語りを通して～

## 第4章 中国人渡日者の心理的援助の検討

### ～転機の語りを通して～(総合考察) (研究5)

#### 4.1 研究の目的

研究1～研究4では、研究協力者の一人ひとりのライフストーリーを丁寧に読み解いてきた。本章では、研究協力者4人の語りを比較しながら、彼らの人生の意味、識字学級の意味を考察していくこととした。

#### 4.2 研究協力者

研究1～研究4でインタビューに調査に協力した識字学級に通う中国人渡日者4名である。当該識字学級で筆者は、日本語の能力に応じて、学習者のグループ学習支援や個別学習支援を行っていた。各研究協力者との初回学習時、お互いに自己紹介をし、筆者の立場と研究の目的を説明していた。グループ学習および個別学習を行う中で、インタビュー調査を6名に依頼し、承諾が得られたのが個別学習支援を行った中国人渡日者4名であった。4名の研究協力者には、渡日期間が半年～20年とばらつきはあるものの、すべて母国中国の高等教育機関で学んでいること、文化的背景が共通することを鑑み、研究対象とした。インタビュー調査を開始する前に、研究への同意書を提示し、同意を得た上でインタビューを開始した。特に、論文作成時には、プライバシー保護の観点から、個人名はもちろん、個人特定に結びつく可能性がある特定の地域・事象等に関しても匿名性が保たれるよう細心の注意を払った。研究協力者4名のプロフィールを、表6.に示す。

表 6. 研究協力者のプロフィール

	年齢・性別	国	学 歴	渡日期間	渡日経緯	職 業
A さん	50 代半ば・男	中国	中国の大学 (英語専攻)	20 年	配偶者(日系 3 世) の帰国	役人→貿易会社→ 町工場
B さん	30 代半ば・女	中国	中国の大学 (日本語専攻)	半年	配偶者の日本で の就職	旅行業→専業主婦→最近工 場でアルバイトを始めた
C さん	20 代前半・男	中国	中国の大学 (工業がメイン)	半年	日本の大学院へ の進学希望	日本語学校に通いな がらアルバイト
D さん	40 代後半・女	中国	中国の大学 (教育専攻)	15 年	キャリアアップ・渡 日後日本人と結婚	教育職→専業主婦→ アルバイト

### 4.3 分析の枠組み

本研究では、分析枠組みとして、語り手の「転機」になる出来事に焦点を当ててきたこととした。野村(2005)は“語りには時間的な断絶や矛盾をはらみ得る転機を橋渡しし、生活史に整合一貫性を付与する機能(coherence)が想定されることが読み取れる”とし、転機の語りの重要性を述べている。また杉浦(2004)は“自分や他者に対する見方を大きく転換させ、時には世界を全く異なった視点から見えるようになること”を転機(turning point)と定義し、“転機は人生という大きなストーリーを大きく転換させる一つのストーリーである”とし、“人の人生のあり方や自己変容、生涯発達に大きな役割を果たしている”と示唆している。本研究でもこの考えを基に分析を進めていくこととし、研究協力者の「転機」となる出来事と心理的特徴を表 7.に示す。

表 7. 転機となる出来事と心理的特徴

転機となる出来事	当事者の心理的特徴	A	B	C	D
渡日を決心したこと	渡日への期待	○	○	○	○
日本での生活	渡日後の落胆	○	○	○	○
	生活に対する不安(言葉)	○	○	○	○
	家族の心理的支え	○	×	×	△
識字学級に参加	満足感・安心感	○	○	○	○
	未来への希望	○	△	○	○

○=該当する △=やや該当する ×=該当しない

#### 4.4 結果と考察

研究協力者と筆者の間で紡ぎ出された語り(ナラティブ)を提示しながら、研究協力者のライフストーリーを再構成し、経験の意味づけを考察する(語りについて、鍵になる言葉を囲みにより、特に印象的な語りを下線によって表記した。なおIはインタビュアーを示す)。

##### (1) 渡日を決心したこと

###### <Aさんの渡日への期待>

###### エリートとしてのプライドと転職・実生活の不满(1回目の語り)

I: エリートだったんですね。

A: はい。ですが、家が長屋みたいで…その頃、だんだん外国の資本が入ってきて、外資系の港関連の会社に入って5年ほど勤めた。収入は中国の人の3・4倍位はありましたが、家が…外資系でも、勝手にどんな家でもOKではなく、国が許可したところでないと住めなかった。マンションには入れたが、一つの家に2家族がいるような状態で、ケンカが絶えなかった。トイレやキッチンは共用だから、使う順番はどうこうと、そのうち、息子が大きくなってきて、部屋に机なんかを入れたら、テレビとかを入れることもできない…それでこのまま中国にいても…と思っていた。

エリートとしての自負もあり、英語の能力も認められ外資系の企業に転職することができ、高額な収入も得ることができたAさんだが、収入や社会的地位に見合った住まいが得られず、同居する他家庭との間で感じるストレスに、Aさんは中国で生活することに、未来への希望を持てなくなってしまった。

###### 渡日の決心(1回目の語り)

A: そのころ、妻もホテルのマネジャーみたいなことをしていた。

I: 奥さんもエリートだったんですね。

A: はいそうなりますね。

I: 奥さんはおばあさんが日本人だということで日本に来たいとは思っても、

Aさんはどうだったですか。

A: 家のことがやはり先行き困っていたし、それに日本に行きたいと言った

ら、勤めている会社に日本支社があって、日本に来て、仕事を探さなくてもよかったんです。だから決心した。

妻の事情は考慮しても、自分の祖国を離れる葛藤は大きいものがある。しかし、中国での生活に希望を見いだせない A さんは、日本に戻りたいという妻の事情や、自分の仕事も保証されているということを追いつきに、希望も抱いて渡日を「決心」したのだと推察される。

### <B さんの渡日への期待>

#### 日本に対する興味(1 回目のインタビュー)

B: 自分は朝鮮族です。東北地方には朝鮮族が多いです。東北地方では、中学から英語と日本語のどちらかを選べるんです。私は日本語を選びました。…(略)それに、小さい頃から、アニメは日本のをやっていたし…よく見ました。私の友だちの中でも一番人気がありましたね。

I: それもあって日本のことは少し興味があったんですか。

B: はい、それはありました。大学を卒業したら、日本に来て留学でもしようかと思うこともあったんですが。…(略)ちょっと日本で生活するもいいかと思って…留学も考えましたが…4年の後日本にいますね(笑)

#### 渡日後の現実(1 回目のインタビュー)

B: 主人が留学が終わって日本の会社で働くことになり…日本に来ることになった時、最初はうれしかった。自分も大学卒業して、来たいと思っただこともあったので…

B さんは中学から日本語を選択して学ぶことができた。日本語を学び始めた B さんは、次第に日本で生活することもいいなと感じていた。その願いが結婚を機に現実化した時、B さんは喜びで満たされていたと想像できる。

### <C さんの渡日への期待>

#### 日本で学びたい(1 回目のインタビュー)

C: 実は、中国の工業デザインのレベルは低い。それならもう少し勉強したい。中国の教育方法もあまりよくない。…その国の発展によって学問の発

展状況がわかる。だから日本の工業デザインは発展している。中国の工業デザインは…専門の分野もあまりよくない。

面接前の個別学習の時、Cさんは筆者に自動車のデザイン画を見せながら嬉しそうに「男のロマンです!」と語ってくれたことがある。上記の語りと重ね合わせると、Cさんの、工業デザインを日本で学びたい、夢に向かって一歩踏み出したい、という意欲と期待が感じられる語りと言える。

#### <Dさんの渡日への期待>

##### やっと自分の人生を生きられる(1回目のインタビュー)

D:次に、それなら外国に、それもアメリカに留学したいと思った。弟は国語の教師から今は警察の仕事をしていますが、弟も留学したいと思っていた。でも弟は奥さんと子どももいたし、私の方が留学しやすかった。でも母は”ダメ”と反対しました。一つのことをやり通すことが大切だと…その時私も仕事をしていましたから、それをやり切ることが重要と母は考えていました。そしてビザも下りなかった。それで、日本に変えました。

希望する仕事ができない状況になり、Dさんは留学を考えることになる。アメリカへの留学を考えた時「一つのことをやり切ることが大切」と語る母の言葉に対して、国を変えてでも自分自身の考えを貫こうとするのは、Dさん自身が自分の人生を歩み出そうとしている決意の表れなのだと考えられる。

## (2) 日本での生活

### <自然災害や言葉がわからないことによる苦難を語る A さん>

#### 渡日の希望を砕く自然災害(1 回目のインタビュー)

A: 来日後、大規模な自然災害が起り、日本支社が閉鎖。事業復旧の目途も立たず、その頃は、まだ勤めて間もない頃だったので正社員じゃなかったこともあって、リストラになった。妻の収入だけでは暮らせないし、子どもを日本の学校にやるのは不安だった。言葉も分からないし、友だちもできないかもしれない。だから、中華学校に入れることにした。そうしたら、授業料もかかるし、仕事は何でもいいからしないと思った。妻の兄はそのころ日本に来て長年経っていたから、一緒に仕事を探してくれて、やっと鉄工所に決まった。その頃はまだハローワークがあるのも知らなかった。

#### 生きるための仕事(2 回目のインタビュー)

I: 英語を生かせる仕事を探さなかったのですか?

A: やはり、英語がしゃべれても、日本語がしゃべれないから…貿易会社でも英語は必要だけど日本語がしゃべれないと仕事にならない。

A: 日本で生活するには第1が日本語で、家族を養うためにはどんな仕事でもいい。0からでもいい。

I: 今までのキャリアは使えない。0からでもと思ったんですね。

A: 3年・4年近くそこに働いた。ここの社長はよかったんだけど…社長のお父さんがよく来て…仕事ができないので“おまえ帰れ”と言われた。今ならわかるけど、その時は言葉の通り思った。“帰れ”と言われたので帰った。社長は“何言うてるんや。”と言ったが、私も一度言ったのでこっちはメンツがあるから…。年寄りにけんかしてどうする。仕事もまだよくわからなかった。それで働きにくいこともあった。…(略)…だから最初の5年間はしんどいし、つらかった。

一大決心しての渡日後、大規模な自然災害に見舞われ、仕事を失うことになる A さん。中国でのエリートとしての生活を捨ててまでの渡日を決心させたのは、渡日後もそのまま勤務できることを考慮すると、A さんの心の中には激震が走ったに違いない。当時、息子の学校生活に対して大きな不安を抱えているが、「言葉が分からない」「友だちもできないかもしれない」という思いは、A さん自身の思いでもあったであろう。また、「ハローワークの存在」も知らなかったという語りには、A さんの無念さが読みとれる。

リストラに遭った A さんは、英語が堪能だったこともあり再就職をする際、キャリアを生かせる仕事を探した。しかし、英語はできても日本語ができないために、そのキャリアを生かす仕事に就くことは不可能であった。自分の今まで培ってきたものを全く生かすことができない傷つきを抱えながら、家族を養うために「どんな仕事でもよい」と決心するに至った A さんの葛藤は大きかったであろう。この語りにおいても「0から」「メンツ」という言葉には、自分をエリートだとの「メンツ」を捨て、そして、「0から」仕事を探すという「喪失と再生の物語」が読みとれる。

#### <渡日後の現実の厳しさを語る B さん>

##### 渡日後の現実(1回目のインタビュー)

B: 主人は留学が終わって日本の会社で働くことになり…日本に来ることになった時、最初はうれしかった。 自分も大学卒業して、来たいと思ってたこともあったので…でも来た後は、寂しいものがありました。主人はいますが友だちはいないし、両親も遠く離れていて…日本語も上手にできない…それがちょっと何と申しますか(www)、自分がしたいところはありますが、言葉が出来ないので、外には出られないので、何をするにも不便で…なんかバカのように生活してるような…気持ちがあります。そんな時があります。その時は帰りたいです(アハハ)…はい。

結婚を機にあこがれていた日本での生活が現実化した時、B さんは喜びでいっぱいだったということは想像できるが、インタビューでは、日本での生活については“最初はうれしかった”としか語っていない。それは、家族も友人もまわりにはおらず、日本語も分からずに生活しないといけない、それもほとんど外出をせずに「バカのように」暮らさなければならない過酷な現在の現実に圧倒されているためではないかと考えられる。

#### <進学が思うように進まないもどかしさから、弱音を吐く C さん>

##### 彼女との別れの告白(1回目のインタビュー)

C: : 実は、恥ずかしい こともありました。大学では彼女もいました。私と彼女の関係はとてもよかったです。でも、家族はずっと反対してました。 だから、家族は日本に来るこ

とになったら、彼女と別れることになるから…

I：日本に来るのはいい。でも C さんにとっては、彼女と別れるというのは…ちょっとつらいことだったでしょ。

C：うん、今はちょっと後悔している。もう一度チャンスがあれば…日本に来てはいない。一つ言えることは、一つ手に入れるともう一つは手に入らない。

I：もし機会があれば日本に来ていないというのは…一つは…彼女と別れたくない。もう一つは社会に出たい。…大学は出たけれど、社会は経験していない。今、日本で言葉も分からない。それに大学院への道もまだまだ遠い…それで落ち込んでいるのもある？

C：後悔して、自分が選んだことに何もしないというのはいけない。自分で選んだことは自分でやり通す。

日本の大学院進学が思うように進まない C さんは、渡日に対する後悔の念を語り始めた。しかし、筆者に弱音を吐くことができたことで、「自分で選んだ」渡日や大学院進学に向かって前に進もうとする気持ちに戻れたのだと推察できる。

#### <渡日の理想と現実を語る D さん>

##### 思い描いた日本での理想(2 回目のインタビュー)

D：日本は、漢字を使って言葉も簡単になって、顔もよく似ている…黄色人種だし、こんなに難しいと分かっていたら、来なかったかもしれません。安定したら、日本に家族全員連れてくるかなとも思っていました。

##### 女性として生きることの困難な現実(3 回目のインタビュー)

D：中国では共同…日本だけ違います。どうしてですか？

I：少しずつ、女性の地位も上がってきているんですが…まだまだでしょうか。

D：職場でも男性が有利です。家でも…風呂も先でしょ。男が…女性の方がきれいにしていけないのに、絶対男が先です。だから来た当初はシャワーだけしかしませんでした。今はそんなことないけど…中国では、女性の方が学歴高い。女性の方が勉強も頑張る。仕事場でも地位が高い。中国では、女性の方が帰るのが遅いことがある。だんなさんが先に帰って、ごはんを作ってることもあります。でも、(日本では)台所は私の場所みたいですね。

念願叶い留学を果たし、15 年日本で暮らす D さんであるが、この間、理想通

りにはいかない現実があったことは想像に難くない。インタビュー中、終始笑顔を絶やさない D さんであったが、「中国では共同…日本だけ違います。どうしてですか」と強い語気で語ることがあり、日本に対して、また男性である筆者に対しても怒りが向けられていたと考えられ、日本での 15 年の D さんの苦勞が忍ばれる語りである。

### (3) 識字学級の意味(筆者との間で共同生成された物語)

#### <Aさんの識字学級の意味づけ>

##### ニーズに合った場所(3回目のインタビュー)

I: 識字学級の意味は?

A: 識字は個人個人のニーズに合ったというか、私が今興味あることに対応してくれるところですよ。最初は、新聞に書いてあることを理解したいと思った。それで今では、8割位は理解できます。

A: 次は日本の文学ということに興味を持った。最初は、小学生レベルの本から学んでいて…今読んでいる本は夜間の先生に紹介してもらった。風景の描写とか、人の心模様ということを理解したかった。そういうことに対応してくれるというのが識字学級です。

##### 初めて日本人に話した(2回目のインタビュー)

A: こんな話は…同じ中国人なら多かれ少なかれ苦労はしている。その中では話したりする。でも日本人に話すことはない。こんなに話したのは先生が初めてだ。

I: よく話してくれましたね。日本人に話さないのは?話しても理解してもらえない?

A: そうではなくて、なんでこんな考えするんやとか思われたりしないかと…

##### 自分のために聞いてもらった(3回目のインタビュー)

I: インタビューを受けてどうでしたか?

A: こんな自分の経歴やくわしい話やなやみは、外の人にはしない。でも先生と勉強したり話したりしてる中で信頼というか…聞いてもらえると…先生の研究のためというよりは、自分のために聞いてもらったように感じる。聞いてもらって自分の心の中がスッキリした。

I: ああ、実は、私もAさんの話を聞きながら、自分の人生や生き方について考えることが多くて、私こそ何か自分のためでもあったと思うんです。有り難うございました。

Aさんは、現実生活では言葉が分からないことで仕事や人間関係に支障を来していた。識字学級では、言葉を勉強するだけでなく、守られた空間(国際意識の高さや言葉遣い)の中で友だちづくりもできる「心安まる」「ニーズに合った」所であり、安心して自己表現をし、「人の心模様を理解していく」居場所としての役割があったと考えられる。さらに、「外の人」「日本人」である筆者に詳しく話すAさんの物語は、「自分のために聞いてもらったように感じる」とAさんが言うように、「これからも日本という国で生きていく物語」が筆者との間に

共同生成されていったと考えられる。

### <Bさんの識字学級の意味づけ>

#### 識字学級を通して日本と繋がる(3回目のインタビュー)

I: 識字学級に来てから変わったことは?

B: 日本語を勉強するだけでなく…ここに来ると日本人の先生や友だちとも話すことができます。日本の文化というか…この前も料理教室ですか…巻きずしとうどんを作りました…(略)そういうことが分かるようになりました。

I: 日本と繋がっているという感じですか?

B: はいそうですね。ここに来て、仕事でしんどくても、休まずに来ようと思うようになりました。

識字学級に通い、筆者とのインタビューに答えることで、Bさんははじめて“日本と繋がった”と思えるようになったのではないだろうか。そして識字学級は、先生や友だちと話すことを通して人との関係を築いていったり、日本文化を学ぶ場所として機能していくことになった。さらに、筆者に対してネガティブな感情表出を安心して行うことが可能となり、識字学級が“しんどくても休まずに来よう”という生きる力を与えてくれる場所となっていくと考えられる。

### <Cさんの識字学級の意味づけ>

#### 話し合う場としての識字学級(2回目のインタビュー)

I: 識字学級に来るのはCさんにとってどう?

C: 実は、毎週1回では、日本語が上達するというのは無理です。でも、話し合うことで、相手から知識をもらえる。

I: ああ、そういうことか。コミュニケーションということですね。お互いの話し合うということがCさんにとって意味があるんですね。

C: そう、いろんなことが分かります。 いろんなこと…日本の生活とか文化とかわかる。  
歴史とか、自分の知識とか生活の経験とかが理解できるのがいい。

#### 語り7: しんどいことも言える場(2回目のインタビュー)

C: 友だちにここを紹介してもらって、最初は日本語を勉強したいと思った。でも、だんだん来てるうちに、自分の考えは変わってきた。話すだけでなく、**探していく**というか、人と人との関係とか、知識の交流とかを通して**明るく**なりました。**安心**したというのが一番ぴったりです。

I: ここは安心できる場所という意味があるんですね。

C: 1時間半では、日本語を覚えるというのにはできない。話し合うことで、得られるものが大きくなってきた。**人との繋がり**方とか…

I: 有り難うございました。異国の地で一生懸命生きている C さんのこと、応援しています。それに、弱音が吐きたくなったら、また話してくださいね。

C: ありがとうございます。ここで河合さんと一緒にこうやって話せたから、しんどいことも言えた。また、**お互いに**よろしくお願ひします。

C さんにとって識字学級は、日本語を学ぶというより、日本語を学ぶことを通して、何かを「探していく」場であり、人との繋がり、日本という国との繋がりを学ぶ、つまり相互交流の場として機能していると言えよう。また、識字学級は C さんにとって「しんどいこと」も語ることができ「安心」でき、識字学級に来ると「明るく」なれる場なのであろう。インタビューの最後であるが、初めて筆者の名前を呼んで「お互いに」よろしくと締めくくっている。インタビューのプロセスが C さんと筆者との共同作業そのものであったことを C さん自身が意識している語りかもしれない。

#### <D さんの識字学級の意味づけ>

##### 識字学級で社会と繋がる(1回目のインタビュー)

D: 識字学級では、仕事場のことも聞くことができます。私は、ニュースにも関心があるので新聞もよく読みますが、どう読めばいいのかわからない時、ここでは聞ける人がいます。

I: ここでは日本語を学んでいるというだけでなく、**社会と繋がっている**という感覚があるのでしょいか。

D: そうなんです!

##### 励ましをもらえた(3回目のインタビュー)

D:最初は、不安がありました。それは、日本語が足りないから、理解してもらえないか不安でした。思いや考えがちゃんと伝わるかです。でも、最初から先生との距離感が近いでした。通じるものがあるというのか、教育者同士というのもあったかもしれません。だから、話しやすかったし、何でも話せた。

D:3つ目は、尊敬というか、先生は一生懸命ですし、学ぼうとしている。だから、自分に励ましをもらえているようでした。

I:それは、私もなんですよ。自分も励まされているようでした。貴重な時間を有り難うございました。

インタビュー開始当初 Dさんは、インタビューに対する不安感が高く、4名の研究協力者で唯一インタビュー内容の録音に躊躇していた。筆者はDさんの不安感をに寄り添いながら丁寧に話を聞くことを心がけた。筆者のインタビューの姿勢はDさんに「通じるものがある」「励ましをもらえている」に繋がり、物語が共同生成されていったものと考えられる。これらのプロセスを通して、Dさんにとって識字学級は、日本語を学ぶ場であるとともに「社会と繋がる場」となっていったと考えられる。

#### 4.5 総合考察

本研究では、転機の語りを通して、渡日者が日本で葛藤を抱えながら生きていく意味を考察してきた。国際化社会とは言え、自国で人生を歩むことが大半である中であって、渡日することは彼らの人生にとって大きな転機となる。研究協力者は、「進学」「経済的安定」「自己実現」といった渡日への期待を語っている。しかし、渡日後の現実は厳しく、「もう一度チャンスがあれば…日本に来てはいない」「こんなに難しいと分かっていたら、来なかったかもしれません」という語りにその気持ちが表れている。特に、Aさんは「同じ中国人なら多かれ少なかれ苦労はしている」と語っている。この語りから、渡日した外国人が言葉や文化の違いに戸惑い苦しみながら生きていることが理解可能であり、渡日者の苦労の普遍性に繋がるものと考えられる。

さて、本研究において、研究協力者全員が、「日本語が分からないことの苦労」を語っており、渡日者の最大の困難は言葉の問題であることを示唆している。しかし、言葉の問題は、ただ単に「言葉が分からず生活に支障が生じる」というものではなく、「人との繋がり」「社会との繋がり」が断ち切られる苦難・困難であり、ライフストーリー研究法を採用したことにより見出された結果と言えよう。

次に、識字学級が果たした役割は大きい。河合(1992)は、“マイナスを通してプラスが生まれる過程は、本来的「教育」そのものと言っていいのではないだろうか”とし、学校教育を「臨床」という視座から見ることが提唱している。本研究における研究協力者は、期待して渡日したにも関わらず、渡日後、「日本語が分からない」「仕事を失う」等の喪失体験を経験している。そんな中で、識字学級と出会い、人や社会との繋がりを感じながら日本での生活に希望を見出そうとするプロセスは、研究協力者と筆者との間で共同生成された物語と考えられる。

また、識字学級は、ただ知識を得るためではなく、現実社会で受ける多大な苦しみ・怒り・悲しみを癒す安全基地としての意味があった。具体的には、「安心できる」「しんどいことも言える」「通じ合える」「励ましてもらえる」場所であり、だからこそ「バカのように生活をしている気持ちになる」Bさんが「仕事でしんどくても、休まずに来よう」と思えるようになったのである。つまり、

本研究において識字学級は、“抱える(contain)器としての学校” (Youell,B, 2006)として機能していたと考えられる。さらに、Aさんが言うように、自分たちの「外」の人間と認識していた「日本人」である筆者との間で、物語が共同生成されたことは意義深い。さらに、野口(2018)は、物語と共同性について“物語の変化が目的で共同性はそのための手段なのではなく、物語を手段として新たな共同性を生み出すという逆のモデルも重要である”と述べている。識字学級に通い始めた当初の筆者は、研究者としての立場を意識し誠実に識字学級で学ぶ方々に研究協力を求めていた。しかし、思うようにインタビューに応じてもらえずにいた。そこで、研究者ではあるが、一方で学習支援者として相手に向き合い、学習者の人生を尊重し、文化の違いや母国について“教えていただく”という姿勢で、ともに学習することを心がけた。そのことが、本研究の筆者と研究協力者との物語の共同生成、そして、お互いに理解し合える筆者と研究協力者との関係性が、新たな共同性を生み出していくことに大いに影響したと考えられる。渡日者は日本社会におけるマイノリティであり、多文化共生を考える場合、その社会を構成するマジョリティである「日本人」は非当事者となる。渡日者の支援を考えていく上で、非当事者が渡日者の苦悩を知り理解することが心理的援助の第一歩になると考えられる。

最後に、池田・仁平(2009)は“ネガティブな体験の肯定的な語り直しがポジティブな感情を生み出す”ことに言及している。また、江(2013)は、“中国人就学生は自分の精神状態の悪さを自覚せず、心理支援にネガティブな固有観念も持っているため、心理の専門職によるサポートを避ける傾向がある。その反面、身近にいる日本語学校の先生や先輩・友人のサポートを受けることが多い”として、“心理支援を行う場合、支援者は『日常的なサポート源』として心理支援を行うことが適切である”としている。

筆者と研究協力者の関係は、研究者と研究協力者という関係であるが、先に述べた通り、研究協力者の人生に敬意を払い、理解したいと願いながらインタビューを行うことを心がけた。また、筆者は、同世代として、大学院をめざす(または大学院生)者として、また、教育に携わる者として、研究協力者との関係性を大切にしながらインタビューに臨んだことが信頼関係を構築することに繋がり、共同生成される語りに影響したと考えられる。このように、信頼関係

に基づく筆者と研究協力者との間で共同生成された語りのプロセスは、「…聞いてもらって自分の心の中がスッキリした(Aさん)」「仕事でしんどくても、休まずに来よう(Bさん)」「一緒にこうやって話せたから、しんどいことも言えた。(Cさん)」「励ましをもらえているよう(Dさん)」というように、彼らの心理的援助に繋がったと言える。このことから、渡日者に対して、学習内容を教示するだけではなく渡日前後の苦労や過酷な人生を生きていることに対して敬意を払いながら話を聞き、尊重していくことが、心理的援助に繋がり多文化共生の一助となることが示唆された。

# 第 5 章 結 論

## 第5章 結論

### ①渡日者にとって識字学級が「安全基地」として機能している

本研究における研究協力者は、期待して渡日したにも関わらず、渡日後、「日本語が分からない」「仕事を失う」等の喪失体験を経験している。そんな中で、識字学級と出会い、人や社会との繋がりを感じながら日本での生活に希望を見出そうとしていた。また、ただ知識を得るためではなく、現実社会で受ける多大な苦しみ・怒り・悲しみを癒す安全基地としての意味があった。このように本研究では、渡日者にとって識字学級が「安全基地」として機能していることを明らかにすることができた。

### ②彼らの語りは、1.「渡日の決心」、2.「日本での生活」、3.「識字学級への参加」の3つの転機に分けられ、未来に繋がっていく

本研究において、渡日者は、それぞれの事情で渡日を決心することになる。そして、日本での生活に期待と不安を抱き、時には碎かれながら生きていくことになる。そんな中、彼らは識字学級にたどり着いたのである。本研究では、彼らの人生において、「渡日の決心」「日本での生活」「識字学級への参加」は人生の転機であり、彼らの人生にとって「喪失」と「再生」の物語が生成され、未来に繋がっていくことを本研究で明らかにすることができた。

### ③渡日者の公的なサポート体制の構築が真の国際社会に繋がる

本研究を通して、今まで不可視であった、ニューカマーと呼ばれる渡日者の日本で生きていく上で、言葉が通じないことにより、仕事上だけでなく日常生活にも困る、渡日者が学ぶ公的機関が未整備なために生じてくる彼らの孤立感や無力感、といった困難さを統計上ではなく、具体的かつリアリティを持ってはじめて明らかにすることができた。これまで単一民族国家として高度成長を成し遂げてきた日本であるが、今後は益々ニューカマーが増加すると予想され、「識字学級」も含めた渡日者への心理的援助および学習サポート体制の充実が急務となってくると考えられる。本研究は、その構築に大いに示唆を与える貴重な研究となったと考えられる。

## 第 6 章

# 本研究の限界と課題

## 第6章 本研究の限界と課題

### 5.1 本研究の限界

本研究では、筆者と研究協力者の関係の中で紡ぎ出される物語を検討することができた。そして、日本人が渡日者の苦労を理解し尊重する姿勢で、ライフストーリーを共同生成するプロセスが彼らの生きる意味づけに貢献できる可能性も示すことができた。しかし、この結果は少数の対象者から得られたものである。本研究における研究協力者は渡日前、自国で高等教育を受けていた方たちであり、「自己を振り返る」ことが容易だったのかもしれない。また、誰かに「語る」には、「語る」言葉や内省する力を有していることが前提であり、本研究における研究協力者にはその力があつたと考えられる。したがって、限定された中での本研究結果を持って、直ちに一般化できるとは言い難い。実際、4名の研究協力者とのインタビュー調査を行うまでに、「当事者でない人に気持ちを分かってもらえない」「ただ必死に生きてきただけ、それだけ。」とインタビューに応じてもらえないケースもあつた。

### 5.2 今後の課題

識字学級で学ぶ人たちの中には、本研究で対象となつた「ニューカマー」と呼ばれる渡日中国人だけでなく、他の国からの渡日者も多数存在する。日本語の理解力や、民族的な差異による問題も考慮した研究も必要となってくると考えられる。さらに、識字学級には「ニューカマー」だけでなく、日本で生まれ育つた在日の方たちや「オールドカマー」と呼ばれる渡日して長い年月が経過している方たちも存在する。これらの方たちは、日本で生きていく上で長年にわたつての苦労が蓄積している可能性があり、アプローチの仕方も工夫が必要であると考えられる。

また、渡日者のメンタルヘルスを考えるとき、筆者は教育および心理臨床家としての専門性と経験を有していたが、渡日者をサポートする者すべてが筆者と同様とは考えられないため、援助者を対象とした研究も重要となってくると考えられる。

これらのことを鑑み、今後は、①他の事例についても同様の分析を進めていくこと、また、②量的研究も行うこと、を通して研究の一般化に繋げていく必

要もあると考えられる。さらに、心理的援助を潜在的に求めている識字学級に通う渡日者に対する、援助システムの構築に向けた研究も今後の課題であると考えられる。

# 第7章 提言

## 第7章 提言

第5章で『「識字学級」で学ぶ渡日者への心理的援助および学習サポート体制が急務となっている』と述べたが、本章ではこの点について3つの提言をしたい。

### ①公的資金の投入

現在、識字学級は、ボランティアスタッフの活動に支えられている。2020年の東京オリンピック開催、また2025年大阪万博開催誘致といった、国際イベントに積極的に公的資金を投入している現状があるが、その一環として、公的資金の投入を推進し日本社会を下支えする渡日者が安心して学べるよう彼らをサポートしていく必要があると考えられる。

### ②学生のボランティアスタッフの充実

どの識字学級においても、ボランティアスタッフの確保に窮している現状がある。一方、学校現場では、教員志望の学生を中心にインターンシップの導入がなされ始めている。文部科学省や各大学が連携して、単位として認定する等の対策を講じて、識字学級に学生ボランティアスタッフを派遣しやすくすることことも必要だと考える。さらに、人数の確保だけでなく、臨床心理学や教育の専門家による、ボランティアスタッフへの研修機会も増やし、サポートの質も向上させていく必要もあると考えられる。

### ③渡日者の心理的援助の充実

臨床心理士がスクールカウンセラーとして学校に導入されるようになって20年が経過している。また、2019年には、国家資格としての公認心理師第一号が誕生する。国を挙げて、心の問題に取り組もうとしているこの時期に、これら心理職の諸団体が連携して、社会貢献の一環として、渡日者の心理的援助に携わることができればよいと考えられる。

以上3点が実現可能となれば、渡日者の生活および学びの質の向上だけでなく、日本の学生との相互理解、真の多文化共生の実現、ひいては日本の学校教育の再生にも繋がると期待される。

## おわりに

筆者は、大学で心理学を専攻した後、小学校の教員となった。今振り返ると、当時の筆者は「大学で心理学を専攻したのだから、児童や保護者の心を少しは理解できるはずだ」と思い込もうとしていた。それは、初めて教職に立つ不安の裏返しであったのかもしれない。

一方で、自他ともに認める「熱血教師」として児童を指導し、それなりの成果も残してくることができたと自負している。しかし、子どもたちに関わりながら、徐々に、筆者の指導に馴染めない子どもたちの存在が気にかかるようになってきた。そのような子どもたちに対して、20代・30代の頃は「どうして先生の言うことが理解できないのか」と子どもたちに問い返し、問題の所在を他者に置いていた自分がある。そして、自分自身の指導法にもがき苦しみ自問自答する中で30代後半になり「児童理解をもっと深めたい」という思いが湧き上がってきた。言葉でいう程簡単ではなかったが、問題の所在を他者から自分自身に向けた瞬間であった。

その後、筆者は、現職(小学校教員)のまま修士課程で学校臨床心理学を学ぶことになった。2年間の大学院修士課程で、学校臨床心理学の専門性を身に着けるプロセスは、同時に自分自身のこれまでを振り返るプロセスにもなった。修士課程での学びは、現場復帰後の筆者の授業に取り組む姿勢に大きく影響を与えた。それまで、「教師が教材研究を深め子どもたちが理解しやすい授業」を提供することに重点を置いていたが、その後は、「授業は、ライブであり、教師と子どもたちの相互作用である」、つまり関係性の中から生成されるものを大切にするようになった。

これらの問題意識の変化が、それ以降の、筆者自身が教育実践や研究を行う上での原点となっており、現在、高等教育機関で心理学担当教員として教員養成を行うことに繋がっているという個人の歴史が存在する。

このように、変遷はあるにしても、常に教育に携わってきた筆者が教育という視点を意識した研究を行うことは、必然だと考えるようにもなった。そして、筆者は、本研究を論文にまとめるにプロセスで、常に考え続けていた「問い」がある。「マイノリティを研究対象とする意義は何だろうか?」ということである。確かに、マイノリティの人々に対しての理解を深めることは、逆境に置か

れた人々の幸せ実現に繋がると言えるが、本当にそれだけだろうか。

筆者自身は本研究において、日本人というメジャーに属している立場であるが、筆者自身が外国で暮らすことになれば、立場はマイノリティに逆転する。また、他者から見れば取るに足らない問題かもしれないが、筆者自身にも未だに解決できていない悩みが存在する。つまり、どんな立場の人であっても、マイノリティな部分を抱えていると言えよう。人は、悩みを抱えている時、その直接的な問題解決に向けた苦悩だけではなく、自分自身が抱えた悩みを誰にも理解されない、「一人ぼっちだ」と感じることでさらに苦悩するのではないだろうか。このように考えると、マイノリティの問題は、メジャーと呼ばれる人々の問題であり、すべての人々の共生に繋がるのだと考えられる。

最後に、自分と違う存在に対して本当に受容できているか、簡単に理解したと思いついでいないか、と自分自身に「問い」続けながらこれからも生きていきたいと願っている。

## <謝辞>

本論文は、たくさんの方々の支えにより完成させることができました。

まず、インタビュー調査に協力してくださった、研究協力者4名の方々、および、識字学級のスタッフの皆様に感謝申し上げます。

そして、主指導教官である岩井圭司先生に心よりお礼申し上げます。前主指導教官の転勤に伴い、指導を引き継いでいただいたこと、それにも関わらず、丁寧に、時には厳しく、時には温かくご指導いただいたこと、感謝の念に堪えません。また、副指導教官としてご指導いただいた葛西真記子先生(鳴門教育大学)、秋光恵子先生(兵庫教育大学)に深謝致します。

さらに、博士課程入学時よりご指導いただいた、前主指導教官の辻河昌登先生(ウィリアム・アラソン・ホワイト精神分析研究所)には、研究計画を立てる段階から長きにわたり、厳しくも温かくご指導いただき、深くお礼申し上げます。また、当時の副指導教官としてご指導いただいた富永良喜先生(兵庫県立大学)、上地雄一郎先生(岡山大学)に心より感謝申し上げます。

最後に、博士課程に入学し、教育職から研究職へと舵を切る人生の岐路に立った時も、研究が思うように進まず困難な状況の時も、ずっと傍で、「大丈夫!」と、常に微笑みながら応援し続けてくれた妻、清子に心から感謝します。

この論文は、指導・協力・支援くださった皆様と私との、まさに「共同生成」の賜物といえるものです。改めてすべての方々に感謝申し上げます。

<引用文献>

- 赤坂憲雄(1981). 新編 排除の現象学 筑摩書房
- 千葉 明(2010). 日本人は誰も気付いていない在留中国人の実態 彩図社
- Crossley,M.L. (2000). *INNIRODUCING NARRAIIVE PSYCHOLOGY,First Edition*:Open University Press UK Limited.(角山 富雄/田中勝博(監訳)(2009).ナラティブ心理学セミナー 自己・トラウマ・意味の構築 金剛出版 pp.16-50)
- 枝川京子・辻河昌登(2011). LGBTI 当事者の理解にナラティブ生成が果たす役割 心理臨床学研究 ,29(1), 85-96.
- 福島知子(2004). 大阪府の識字・日本語教室の現状と課題—大阪府教育委員会「識字学級等調査」から— 部落解放研究(159), pp.58-66.
- 藤原勝紀(2004).事例研究法 丹野義彦編 臨床心理学全書第 8 巻 臨床心理学研究 誠信書房 pp.20-64.
- 古川正志(2013). 識字学級と行政 「2011 年度・全国識字学級実態調査(聞き取り調査)」報告書—全国調査から浮かぶ現状とさまざまな「しきじ」の課題— 全国識字学級実態調査実施委員会, pp.65-69.
- 発達心理学会(2000). 心理学・倫理ガイドブッカーリサーチと臨床 発達心理学会(監修) 古澤頼雄・斉藤こずゑ・都筑学(編) 有斐閣
- 原田明子(2003). 夜間中学における日本語教育に関する一考察—課題とその提言— 早稲田大学日本語教育研究 3 号, 早稲田大学, pp.99-109.
- 法務省(2017). 平成 29 年 6 月末現在における在留外国人数について (確定値) [http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00068.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00068.html) (2018 年 2 月 26 日)
- 石川良子・西倉実季(2015). ライフストーリー研究に何ができるか 桜井厚・石川良子編 ライフストーリー研究に何ができるか 対話的構築主義の批判的継承 新曜社 pp.1-20.
- 一條玲香(2015). 在住中国人女性の異文化適応における困難とサポート要因 心理臨床学研究,33(1),pp.59-69.
- 池田和浩・仁平義明(2009). ネガティブな体験の肯定的な語り直しによる自伝的記憶の変容 心理学研究 ,79(6), 481-489.

- 風間 孝(2009). 同性愛への「寛容」をめぐる一新たな抑圧のかたち 好井裕明編 排除と差別の社会学 有斐閣選書,pp.103-119.
- 河合隼雄(1992). 子どもと学校 岩波書店 pp.8-19.
- 川野健治(2007). 質的研究を見通す—データ収集と分析 能智正博 川野健治編 事例から学ぶはじめての質的研究法 臨床・社会編 東京書籍 ,pp.58-66.
- 鯨岡 峻(2005). エピソード記述入門 実践と質的研究のために 東京大学出版会
- 鯨岡 峻(2016). 関係の中で人は生きる—「接面」の人間学に向けて— ミネルヴァ書房
- 栗田克美 (2001). 公立夜間中学の諸問題—歴史, 現状, 課題— 北海道大学大学院教育学研究科紀要 83 号,pp.211–235. 北海道大学
- 江 志遠(2013). 日本語学校に在籍する中国人就学生のメンタルヘルスに関する臨床心理学的研究(博士論文),九州大学,< <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/1398302/hues0300.pdf> > (2016年4月5日)
- (公財)人権教育開発センター(2017).外国人住民調査報告書—改訂版—  
<http://www.moj.go.jp/content/001226182.pdf#search=%27%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E4%BD%8F%E6%B0%91%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8%E2%80%95%E6%94%B9%E8%A8%82%E7%89%88%E2%80%95%27>(2018年3月1日)
- 松戸市に夜間中学校をつくる市民の会(2015). 新たな出発の今—松戸自主夜間中学校の30年— 桐書房
- 森 康行(2005). 映画『こんばんは』から見た教育基本法と夜間中学 子どものしあわせ vol.647, pp.16-20. 草土文化
- 森岡正芳(2008).物語の構成力 森岡 正芳編 ナラティブと心理療法 金剛出版 pp.223-236
- 文部科学省(2017). 平成 29 年度夜間中学校等に関する実態調査  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afielldfile/2017/11/07/1357982\\_03.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afielldfile/2017/11/07/1357982_03.pdf) (2018年2月26日)
- 文部省調査局(1962). 日本の成長と教育
- 村上靖彦(2017). 母親の孤独から回復する 虐待のグループワーク実践に学ぶ

講談社

- 中島 恵(2012). 中国人エリートは日本人をこう見る 日本経済新聞出版社
- 中島 恵(2016). 中国人エリートは日本をめざす 中央公論新社
- 野口裕二(2018). ナラティブと共同性 自助グループ・当事者研究・オープンダイアローグ 青土社
- 能智正博(2005). 質的研究がめざすもの 伊藤哲司・能智正博・田中共子 編 動きながら識る, 関わりながら考える 心理学における質的研究の実践 ナカニシヤ出版 pp.21-36.
- 能智正博(2007). 質的研究と臨床・社会心理学 能智正博・川野健治編 事例から学ぶ はじめての質的研究法 臨床・社会編 東京書籍 pp.3-38.
- 能智正博(2011). 臨床心理学を学ぶ 6 質的研究法 東京大学出版会
- 野村晴夫(2005). 構造的・一貫性に着目したナラティブ分析:高齢者の人生転機の話りに基づく方法論的検討 発達心理学研究 16(2),pp.109-121.
- 野山 広(2004). ニューカマーの人々への日本語教育 部落解放 534,102-115.
- 大久保孝治(2008). ライフストーリー分析—質的調査入門 学文社 pp.20-27.
- 大橋敏子(2011). 外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入—ナラティブ・アプローチの視点から 留学生教育,16,pp.99-106.
- 大橋敏子(2016). 外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入 大学時報 No.366, pp.68-75.
- 大西晶子(2014). 在住外国人に対する心理援助—実践の課題と心理援助専門家の役割に注目して— コミュニティ心理学研究,18(1),pp.93-108.
- 大多和雅絵(2017). 戦後 夜間中学校の歴史—学齢超過者の教育を受ける権利をめぐる— 六花出版
- 埼玉に夜間中学を作る会(2016). 月明かりの学者から 川口自主夜間中学と設立運動三十年の歩み 東京シュレー出版
- 李 健實(2012). 外国人労働者のメンタルヘルスと心理的援助の現状と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要,52,pp.403-410.
- 佐久川肇(2013). 学問原理とは—ゼロから始めよう 佐久川肇(編著), 植田嘉好子・山本玲菜(著) 質的研究のための現象学入門 対人支援の「意味」をわかりたい人へ 第2版 医学書院, pp.9-16.

- 桜井 厚(2002).リアリティの共同構築 インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方 せりか書房,pp139-171.
- 桜井 厚(2005). インタビュー・テキストを解釈する 桜井 厚・小林多寿子編 ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門 せりか書房 pp.129-183.
- サトウタツヤ(2007). 研究デザインと倫理 やまだようこ(編) 質的心理学の方法—語りをきく— 新曜社 pp.16-37.
- 杉浦 健(2004). 転機の心理学 ナカニシヤ出版
- 成(Sung)玖美(2003). 地域多文化教育の展開 佐藤一子編 生涯学習がつくる公共空間 柏書房 pp.216-232.
- 下山晴彦(2001). 臨床心理学研究の多様性と可能性, 下山晴彦・丹野義彦編, 講座臨床心理学 2 臨床心理学研究, 東京大学出版会 pp.3-24.
- 新矢麻紀子(2011). 識字・日本語教室における理念の継承と再構築のあり方 大阪府の先駆的な二つの事例から 部落解放研究,192, pp.16-26.
- 新矢麻紀子(2013). 定住外国人にとっての識字学級 「2011 年度・全国識字学級実態調査(聞き取り調査)」 報告書—全国調査から浮かぶ現状とさまざまな「しきじ」の課題— 全国識字学級実態調査実施委員会 pp.30-41.
- 高野雅夫(1993). 夜間中学生 タカノマサオ—武器になる文字とコトバを 解放出版社
- 竹家一美(2008). ある不妊女性のライフストーリーとその解釈—「不妊」という十字架を背負って— 京都大学大学院教育学研究科紀要 ,54, 152-164.
- 竹山典子(2008). 在日外国人生徒への心理的援助のあり方—高校への適応を果たした事例からの考察— 異文化間教育,27,pp.62-74.
- 田中 聡(2008). 地域社会の生涯学習の基礎としての『識字』のあり方を考える—大阪市の識字学級をめぐる動向の推移から— 大阪市立大学『人権問題研究』 vol8,2008,pp.5-40.
- 田中隆博(2016). 大阪府における識字・日本語学習活動の現状と課題—「大阪府内における識字・日本語学習活動促進のための課題整理」より— 部落解放研究, 205,pp.78-89.
- 棚田洋平(2011). 日本の識字学級の現状と課題「2010 年度・全国識字学級実態調査」の結果から 部落解放研究,192 ,pp.2-15.

- 棚田洋平(2017). 被差別部落における識字学級のいま 月刊社会教育,56-59.
- 丹野義彦(2004). 臨床心理学研究の理念と今後の課題 丹野義彦編 臨床心理学全書第8巻 臨床心理学研究 誠信書房 pp.2-18.
- 徳田治子(2007). 半構造化インタビュー やまだようこ編 質的心理学の方法—語りをきく— 新曜社 pp.100-113.
- 内山一雄(2004). 部落解放をめざす識字運動とは—運動の原点とその独自性と共通性, 部落解放 (534), pp.35-50.
- 鷺田清一(1998). 悲鳴をあげる身体 PHP 研究所
- 山田 泉(2008). 在住外国人の社会参加を目指して-川崎市の「識字学級」を考える- 生涯学習とキャリアデザイン,5,pp.41-48.
- やまだようこ(2000a). 展望 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か? 教育心理学年報(39), pp.146-161.
- やまだようこ(2000b). 人生を物語ることの意味 やまだようこ編著 人生を物語る—生成のライフストーリー— ミネルヴァ書房 pp.1-38.
- やまだようこ(2007a). 喪失の語り—生成のライフストーリー— 新曜社
- やまだようこ(2007b). 質的研究における対話的モデル構成法—多重の現実, ナラティブ・テキスト, 対話的省察性 質的心理学研究 第6号 pp.174-194.
- 山田陽子(2010). 中国人就学生と中国帰国子女 中国から渡日した子どもたちの生活実態と言語 風媒社
- 山田富秋(2013). インタビューにおける理解の達成 山田富秋・桜井裕明編 語りが拓く地平 ライフストーリーの新展開 せりか書房 pp.121-143.
- 山根実紀(2009). 在日朝鮮人女性にとっての夜間中学—ライフストーリーからのアプローチ 龍谷大学経済学論集, Vol.49 No1,pp.197-218.
- 好井裕明(2009) 排除と差別の社会学を考える 好井裕明編 排除と差別の社会学 有斐閣選書,pp.3-22.
- Youell,B(2006). *THE LEARNING RELATIONSHIP:Thinking in Education*.Karnac Books Ltd. (平井正三(監訳) 鈴木誠(訳) (2009). 学校現場に生かす精神分析 [実践編] —学ぶことの関係性— 岩崎学術出版社 pp.24-39)
- 全国夜間中学校研究会第51回大会実行委員会 編 (2004). 夜間中学生—133人からのメッセージ—東方出版

張 嵐(Zhan Lan)(2015). ライフストーリーにおける異文化と異言語 桜井厚・石川良子編 ライフストーリー研究に何ができるか 対話的構築主義の批判的継承 新曜社 pp.117-141.

# 資 料

<資料 1.> 「インタビュー調査ご協力のお願い」

20〇〇.〇.〇

〇〇識字学級しきじがつきゅうのみなさま

インタビュー調査ちようさ きようりよくご協力ねがのお願い

みなさまみなさまは、日常生活にちじようせいかつを送られている中なか、識字学級しきじがつきゅうに通われ、学習がくしゅうされてこられたと存ぞんじます。

さて、私は兵庫教育大学大学院ひょうごきょういくだいがくだいがくいんに在籍ざいせきする河合篤史かわいあつしと申します。

私は博士論文はくしろんぶんの研究けんきゅうとして、戦争せんそうや仕事しごと、その他の理由ほか りゆうで学校がっこうに行けなかつた方々かたがたの心理的サポートしんりてきに関する研究かん けんきゅうを行っています。具体的には夜間おこな中学ぐたいてきや識字学級やかんに通う生徒ちゅうがくさんの経験しきじがつきゅうや考えかよを聞かせていただき、夜間せいと中学けいけんや識字学級かんがの意義きや、生徒ちゅうがくさんにどのように心理的サポートしんりてきをしていくことがよいのかを検討けんとうしております。

そこで、誠に勝手まこと かってなお願いねがではありますが、インタビュー調査ちようさにご協力きようりよくいただきたくお願いねが申し上げます。調査内容ちようさないようにつきましては、下記かきの通りとおですので、お読みいただき、お考えかんがいただければ幸いです。さいわ

記

<インタビュー調査ちようさについて>

- ・質問内容しつもんないよう…①識字学級しきじがつきゅうに入学にゅうがくされる前まえに感じてこられたこと
- ②識字学級しきじがつきゅうに入学にゅうがくしよう思われた動機どうき
- ③識字学級しきじがつきゅうに入学にゅうがくされてから感じられたことかん 等などです。

- ・面接回数めんせつかいすう…3～5回程度かいていどをご協力きようりよくください。時間じかんは1回50分位かい ぶんくらいです。

＜プライバシー・個人情報取り扱いについて＞

面接でお聞きしたことは、研究のために活用させていただきますが、個人名などが明らかにされることは決してありません。また研究論文にまとめましても、個人がわかるようなことは一切掲載することはせず、「〇〇識字教室」の名前も一切出すことはありません。

＜その他＞

- 面接についてわからない点やご質問がございましたら、河合篤史までご連絡ください。
- なお、ご協力いただきました方には、心ばかりではございますが、お礼の品を用意させていただきます。

インタビューに協力してもよいという場合は、以下にご記入いただき、河合までお渡しください。

河合篤史 連絡先：携帯電話番号 ○○○○○○  
携帯メールアドレス △△△@□□. jp  
..... きりとり.....  
お名前 ( )  
ご連絡先 ( )  
電話番号・メールアドレスをご記入いただけるとうれしいです。  
インタビューできる曜日や日にち(今, 分かることで結構です)  
[ ]

<資料 2. > 「インタビュー同意書」

どう い しょ  
同 意 書

この度は、<sup>たび</sup>私<sup>わたくし</sup>、<sup>ひょうごきょういくだいがく</sup>兵庫教育大学大学院<sup>かわいあつし</sup> 河合篤史<sup>か</sup> のインタビューにご  
<sup>きょうりょく</sup>協力<sup>りょく</sup>くださり、ありがとうございます。

1. インタビューについてのおねがい

- ①インタビューでお聴<sup>き</sup>きた内容は、論文<sup>ろんぶん</sup>としてまとめ、発表<sup>はつひょう</sup>いたしたく存<sup>ぞん</sup>  
じます。その際<sup>さい</sup>には、お名前<sup>なまえ</sup>や個人<sup>こじん</sup>が特定<sup>とくてい</sup>されないように配慮<sup>はいりょいた</sup>致します。
- ②お話<sup>はな</sup>しくくださったことを正確<sup>せいかく</sup>に記録<sup>きろく</sup>するために、インタビューを録音<sup>ろくおん</sup>させ  
ていただきます。録音<sup>ろくおん</sup>したものは、論文<sup>ろんぶん</sup>完成<sup>かんせい</sup>後<sup>ご</sup>、責任<sup>せきにん</sup>をもって消去<sup>しょうきょ</sup>させて  
いただきます。
- ③可能<sup>かのう</sup>であれば、ご都合<sup>つごう</sup>に合わせて3回<sup>かい</sup>ほどお会い<sup>あ</sup>し、インタビューを実施<sup>じっし</sup>  
させ<sup>いた</sup>て頂<sup>ただ</sup>きます。お話<sup>はなし</sup>の内容<sup>ないよう</sup>により回数<sup>かいすう</sup>がかわることがあります。

2. インタビューを<sup>おこな</sup>行う<sup>や</sup>上で、お約束<sup>やくそく</sup>させていただくこと

- ①インタビュー中<sup>ちゅう</sup>にお話<sup>はな</sup>しくくださった内容は研究<sup>けんきゅう</sup>の目的<sup>もくてき</sup>だけに使用<sup>しよう</sup>しま  
す。
- ②お話<sup>はな</sup>しになりたくないことを、無理<sup>むり</sup>に聞くことは絶対<sup>ぜったい</sup>にいたしません。
- ③インタビューをやめたいと感じ<sup>かん</sup>じられた場合<sup>ばあい</sup>、いつでも中止<sup>ちゅうし</sup>させていただきます。  
ます。その場合<sup>ばあい</sup>は遠慮<sup>えんりょ</sup>なくおっしゃ<sup>しゃ</sup>ってください。

以上<sup>いじょう</sup>のことに同意<sup>どうい</sup>いただける場合<sup>ばあい</sup>は、下記<sup>かき</sup>にお名前<sup>なまえ</sup>をお書き<sup>か</sup>ください。

年 月 日

なまえ  
お名前

### <資料 3. > 「研究協力者のナラティブ」

#### Aさんのナラティブ

1 回目
I「今はどんな生活をされていねんですか」
A「今はここに一人暮らしています。」
I「奥さんやお孫さんは？」
A「妻は昨年の10月に亡くなりました。十・十一…もう5ヶ月になります」
I「つらい話をお聞きしてごめんなさいね」
A「いやいや、もう今は大丈夫」
「妻は〇〇で…手術は日本でして…でも日本の治療は抗ガン剤ばかりで…それはちょっとしんどかった。だから、中国から漢方を持ってきてもらって…お姉さんが中国からトランク一杯に持ってきてくれて…。ある時期、癌の数値も驚くほど低くなって、先生も驚いていた。でも、だんだん大変になってきた。このマンションでも、まわりに臭いがして…それでここ数年は日本で治療…もう少し漢方続けていたら助かったかもしれない…」
I「それで一人暮らしなんですね」
A「はい。だから掃除とか時間がかかって、今日もここで申し訳ないです」
I「いえいえ、そんなことはないですよ」
「奥さんが生きていらっしゃる時は、家事は全部奥さんがしてくれてたんですか」
A「いや、妻が夜の授業があるので、私が仕事が終わって帰ってくる時に妻が出ていく時間になる時は、私が料理を作るとか、お茶だけ一緒に飲んどとか…」
I「奥さんは先生をしておられたんですか」
A「はい、中国語を教える先生をしてました。仕事を終わった人には夜の授業、日曜日のクラスもあつたり…でも、非常勤だったので、行ける日に教えに行っていました」
I「じゃあ、一緒に過ごせるのは休みの日ですね」
A「はい、休みの日は、映画に行ったり、買い物に行ったり、外で食事に行ったり…」
I「お子さんとは？」
A「もう、高校生になったら、自分で何かやりたがるので、一緒にいることはないです。それからは妻

と二人です。」

A「先生はお子さんは？」

I「僕のところは子どもがいないので、二人です。だから休みの日時間が合えば一緒にどこかに行きますよ。同じですね。」

I「で…どうして日本に来ることになったんですか。」

A「妻の祖母が日本人でした」

A「政変がありで中国の資産家が日本にやってきた。妻のおばあさんは、そこで家政婦をしていた。それが落ち着いて、資産家が中国に帰るとき、おばあさんも連れていった。そして、おばあさんは現地の人と結婚した。祖父はなかなかの資産家だったようで、妻もお嬢さん育ちだった。

国交正常化後、里帰りができるようになり、妻の兄と祖母が日本を訪ねて、親戚が〇〇にいたので、住むことになった。法律改正で、孫の代まで帰国できるようになった。

A「自分も中国では、それなりの仕事にもついていました。…政変が終わったら、大学はもう一度開かれ、でも実質的には試験はなく、コネで入れた。自分は一年目はだめで2年目、英語の専門の大学に入れた。中国では大学に入れば卒業してからの仕事は決まっている。私は北京出身だったから、北京で仕事が決まっていた。農業の役所で勤めていた。」

I「お役人だったんですね。」

A「はいそうです。」

I「エリートだったんですね。」

A「ですが、家が長屋みたいで…その頃、だんだん外国の資本が入ってきて、外資系の港関連の会社に入って5年ほど勤めた。収入は中国の人の3・4倍位はありましたが、家が…外資系でも、勝手にどんな家でもOKではなく、国が許可したところでないと住めなかった。マンションには入れたが、一つの家に2家族がいるような状態で、ケンカが絶えなかった。トイレやキッチンが共用だから、使う順番はどうこうと…、そのうち、息子が大きくなってきて、部屋に机なんかを入れたら、テレビとかを入れることもできない…それでこのまま中国にいても…と思っていた。」

A「そのころ、妻もホテルのマネジャーみたいなことをしていた。」

I「奥さんもエリートだったんですね」

A「はいそうなりますね」

I「奥さんはおばあさんが日本人だということで日本に来たいとは思っても、Aさんはどうだったです

か」

A「家のことがやはり先行き困っていたし、それに日本に行きたいと言ったら、勤めている会社に神戸支社があって、日本に来て、仕事を探さなくてもよかったんです。だから決心した。」

A「来日した翌年、災害が起こり、〇〇にあった会社が壊滅。事業復旧の目途も立たず、そのころは、まだ勤めて一年位だったので正社員じゃなかったこともあって、リストラになった。

そのころ、妻の収入だけでは暮らせないし、子どもを日本の学校にはやるのは不安だった。言葉も分からないし、友だちもできないかもしれない。だから、〇〇にある中華学校に入れることにした。そうしたら、授業料もかかるし、仕事は何でもいいからしないと思った。妻の兄はそのころ日本に来て10年位だったから、一緒に仕事を探してくれて、やっと鉄工所に決まった。その頃はまだハローワークがあるのも知らなかった。」

## 2回目

I「3年で卒業することもできたけど、なんでしなかったんですか。」

A「私は〇〇〇〇年から△△△△年で前の会社がちょっと…やめさせられて…ちょっと社長のお父さんとちょっとあって…」

A「□□年の3月からほとんど2学期は行ってなかった。」

A「行き始めて1年半で仕事を替わった。その間は実際は行くのは半分位だった。その仕事を探す間は、行けてなかった。…新しい会社は電車通勤だった。自転車通勤はお金が出るかわからなかった。電車通勤では(夜間中学校に寄れないので)無理。1年間は半分位で▽▽年からは自転車通勤で…それで3年くらいたった。その時は半分くらいしか行ってなかった。だから、校長先生のインタビューを受けて、私は仕事で実際の勉強が足りない。だから…認めてもらった。」

A「土曜日はなかった。〇〇年からゆとり教育で完全土曜日でなくなった。それまでは土曜日もあった。」

I「Aさんは、土曜日もあった方がよかった。」

A「はい、土曜日は仕事が半日だった。だからまだ行きやすかった。」

A「学校の教科も中学校なのに、かけ算引き算ばかりだった。在日のおばあちゃんばかりで、あんまり難しいと、“頭がぐちゃぐちゃで難しすぎる！”ってね。」

I「Aさんにとってはそれは簡単なんですね。」

A「ええ。で一次関数とか教えたら韓国のおばあちゃんは“そんなもんわからんは”てやめた。」

A「だから数学の時間は、言葉の聞き取りの時間に替えた。」

I「なるほど、目的を変えたんですね。」

A「その時は日本語はほとんどわからない。だから…おばあちゃんが言ってることがわからない。だから聞くことの勉強と思った。」

I「いろいろな人が来られてますもんね」

A「私が行っていたところは〇〇という所だから、在日の韓国の人が多かった。」

A「日本で育って、戦争の後はびんぼうでとかいじめられて学校に行けなくてという人が多かった。」

I「災害以降は仕事はどうしたんですか？」

A「妻のお兄さんの会社で、というても2人しかいないところで働かせてもらった。鴨肉の輸入の会社…1年半位してた。その間に仕事を探していた。〇〇年に鉄工所に行くことになった。そこでは英語は使わないし…日本語が必要になった。で春になったので、夜間中学に行った。」

I「今までだったら外資系だったので…」

A「そう、英語で話せばよかった。その後も兄さんの会社で…港では英語で話せた。税関の手続きとか…お兄さんの会社だから、私が働いて、お兄さんの収入からもらっていて、本当はお兄さんは一人のできる仕事だった。私が仕事がないからさせてくれた。だから売り上げが2人になったからってそう上がる訳ではないの。兄にしたら妹の家族だからなんとかしてやろうと思った。だけど私にしてみれば、自分で働いて収入を得るようにしないとと思った。で、お兄さんにも仕事探しを手伝ってもらって…最初は面接も何も分からない。日本語も何も分からない。お兄さんにやってもらって全部…それで見つかった。」

I「今話していると日本語ちゃんと話せるから…と思ってたけど、来た時は…」

A「そう来た時は英語以外全然しゃべれなかった。簡単な1・2・3位だけだった。」

I「英語を生かせる仕事は探さなかったの」

A「やはり、英語がしゃべれても、日本語がしゃべれないから…大阪は貿易会社でも英語は必要だけど日本語がしゃべれないと仕事にならない」

I「Aさんは英語がしゃべれるけど、それは日本語がしゃべれての英語でないといけなかったんですね。」

A「Aさんは英語と中国語はしゃべれるけど、日本語がしゃべれないから…」

A「日本で生活するには第1が日本語で、だから家族を養うためにはどんな仕事でもいい。0からでもいい」

I「今までのキャリアは使えない。0からでもと思ったんですね。」

A「経験は0。社長は韓国の人。社員は日本に初めて来た人もいたので、そういう人の気持ちはわかったの、言葉はわからなくても仕事はできると…お兄さんにも行ってくれた。社長は50前位の人

で、それでそこで働くことになった。」

A「でも…後でわかったけど、韓国語もわからないので、何かけんかしてても、自分は何言うてるか分からない。間にはいる日本語もまだほとんど分からないのに…」

A「3年…4年近くそこに働いた。」

A「ここの社長はよかったんだけど…社長のお父さんがよく来て…仕事ができないので“おまえ帰れ”と言われた。今ならわかるけど、その時は言葉の通り思った。帰れと言われたので帰った。社長は“何言うてるんや。”と言ったが、私も一度言ったのでこっちもメンツがあるから…。年寄りにけんかしてどうする。仕事もまだよくわからなかった。それで働きにくいこともあった。社長はいい人だった。でも、社長のお父さんと他の社員、韓国人だから言葉がわからない。それに仕事もできないから…。夜間中学に入る前は教えてくれる人もいなかった。だから最初の5年間はしんどい、つらかった」

I「つらいと思います。こっち来ても、仕事がなくなった。キャリアを生かす仕事にもつけない。言葉がわからない…つらかったと思います。」

I「最初は、英語を生かせる仕事がないかと探したでしょ。」

A「うん、探した。…最初英語ができるというと喜んだ。でも話を聞くと日本語がわからない…“だめだな。無理だな”と言われた。」

I「」

A「鉄工所の中はうるさい。だから余計わかりにくい。それに忙しいから一回切りしか言ってくれない。何が何かさっぱりわからなかった。学校の先生みたいにゆっくりと言ってくれない。製品作るのは時間勝負の仕事で…もたもたしてるとすぐ怒られる。」

A「今思い返したら、経営者の立場から見たら、悪い社員だった。」

I「仕事も遅いし、他の社員ともうまくはなせない」

A「うん、うん」

I「日本に来たからこうなったということでしょ。日本に来なければよかったとは思わなかった？」

A「うん、今は日本に来てよかったと思う…けど、つらいときは中国に帰りたいとも思った。でも、実際に中国に帰ったら、帰る場所はない。元の会社に戻る訳ではない。給料が高いから、私がやめた後、何百人という大げさだけど何十人はすぐに応募する。同じ会社であっても、年もいってるから、同じ条件では入れない。」

I「一度は考えた？」

A「考えた。元の会社の人にも相談して…妻も、“どうしてもなら、帰ってもいい”と言った。でも、

帰ってもまた1ルームになるのもいやだったし…でも、子どもが今度は高校受験になった。日本式の受験を勉強していたから、中国に帰ったら、子どもが大変だった。」

I「Aさんのことだけではなく、子どもさんのこともあったんですね。」

A「まだ妻は、仕事はまだある状況だった。でも自分は、元にはもどれる状況じゃなかった。」

I「仕事しながらの勉強は大変だったですね。」

A「はい。大変だった。」

A「次は正社員になることだった。妻のガンの治療もあった。その時は貿易関連とかは断念した。それより、正社員になれるよう、それなら鉄工所なら少しやったことあるので、鉄工所を探して、小さいけれど正社員になれるところにした。十何年になるけど、まだうまく作れないみともあるけどなんとかやってくることができた。」

A「今は、前もって言うと長期間はだめだけど、休みもとれる。工程は工場長が決めるから、工場長に言うと工程を決めてくれる。…工場長にはよく怒られる。“おまえくらいはどこでもいてるわ”と言われる。代わりは探せばすぐ来るわって…言われる(笑)。」

I「今は、前とはちがって言葉通りではとらなくていいんでしょ。そう。だから、実際にミスしたときはちゃんと聞く。前は聞けなかった。聞いても分からなかった。自分の判断でやった。でも今は聞くのはすぐできる。それの方がうまくいく。前は言葉もわからないから聞いて答えてもらっても分からない。“おまえは何回言うてもわからんのやなあ”とまた怒られる。それがいやだった。」

I「よくそこまで変わりましたね。」

A「それは、日本の文化とかも分かるようになってきたから。今は聞いてできる方がいい。工場長になんでも聞く。あとは時間がかかることだけ。」

I「Aさんの話聞いてると、中国と日本の関係や歴史、勉強になります。」

A「こんな話は、同じ中国人なら多かれ少なかれ苦勞はしている。その中では話したりする。でも日本人に話すことはない。こんなに話したのは先生が初めてだ」

I「よく話してくれましたね。日本人には話さないのは？話しても理解してもらえない？」

A「そうではなくて、なんでこんな考えするんやとか思われたりしないかと…」

I「そんなことないと思うけどなあ…」

3回目

A「今は、交流センターでボランティアをしている。」

A「〇〇年頃から生活も安定してきた。だから、仕事以外のことにも余裕が出てきた」

I「自分自身日本語を勉強しながら、ボランティアもしているなんてすごいですね」

A「その頃夜間中学も卒業して、余裕も出てきたので、それで通訳のガイドの資格もとった。中国語は取れた。後英語のガイドは難しい。日本語をを英語にというのは何とかできる。でも逆(英語を日本語にするのは)は難しい。今年は試験受けられなかった。この間、妻の病気もあったし、また、来年に向けてやっていきたい。」

I「ああ、奥さんの病気・死というつらいことがあったのけど、目標を持って頑張ろうとしているんですね。」

A「仕事の後、TVばかり見てもおもしろくない。何かしないと…」

I「それはえらいです。」

A「私自身、日本に来た時、交流センターにお世話になった。区の人が教えてくれた。その時子どもの教育で困っていた。日本の小学校では言葉もわからないし、友だちも作れない。交流センターの人たちにお世話になった。だから今度は恩返ししたい。」

I「夜間中学の意味は？」

A「夜間中学は日本語を勉強しようと思って行っただけでなく、友だちも作れるところとして行っていた。だから勉強するということだけでなく、心が安まるというか、安心できる場所だった。」

A「それに、夜間中学は、職場と違って、国際意識もまわりより高い。言葉遣いも職場とは違う。それに、中国のニュースがあれば…悪口のような…まるで矛先を私に向けてくることがある。でも、夜間中学やここは、争いの話はしない」

I「識字学級の意味は？」

A「識字は個人個人のニーズに合ったというか、私が今興味あることに対応してくれるというところですよ」

A「最初は、新聞に書いてあることを理解したいと思った。それで今は8割位は理解できます。」

A「それができたら、次は日本の文学ということに興味を持った。最初は、小学生レベルの本から学んでいって…今読んでいる銀河鉄道の夜は夜間の先生に紹介してもらった。風景の描写とか、人の心模様ということを理解したかった。そういうことに対応してくれるというのが識字学級です」

A「同じ日本人でも色々な考え方の人もいるし…教育のレベルも違う。職場ではほとんどが中卒で…今は慣れたけれど、時にはボランティアをしたり、識字学級で自分したいことを勉強したいと思う」

I「中国ではAさんは、大学を出てましたものね」

A「うん、中国ではエリートの仲間とかそれで仕事していて…、話が合わないこともある。いつもパチンコがどうか、私の興味のない話ばかりで…もちろん社会勉強のために行くのはいい。でもいつもそんな…今はこれ位の話は当たり前…でもいつもいつもだと疲れる。たまにはこの交流教室で本の勉強をしたくなる」

I「中国でも日本でもだいたい、同じ教育レベルの人たちと仕事をする人が多いですから…。でもAさんは、日本では教育レベルの違う人たちと職場で話したりすることが日常なんですね」

A「そうそう、それがしんどい。仕事はちゃんとするのはいいんだけど…考えが違うのが…」

I「今まで中国での生活日本に来てからの生活を伺ったのですが、これからはどうしていきたいですか」

A「仕事が安定していくかどうか不安がある。今は正社員だけど、小さな工場だから景気が悪くなるとどうなるかわからない。まだ、ローンも残っているし…」

I「ガイドの資格を取ったけれど、それも不安定だと話してましたね。」

A「これから税金も上がるし、年金は25年勤めないといない。まだ〇〇年しかしていないし…」

A「将来的にもずっと日本にいると思います。帰ってもどうなるか分からない。」

I「日本に来てどうだったですか。」

A「日本に来てよかったと今は思う。経済的にも日本の方が有利だと思う。環境も中国に比べたらとても空気もきれいです。中国にいたら今よりいい生活をしていたという保証はない。特に住宅事情。日本では年収の10倍位で家がなんとか買える。でも中国ではいくら稼いでも、20年30年の年収が必要。私は10年して家を買うことができた。」

A「私は…一番いいことはないと思う。自分に合うものをさがしていくことがいい。これからもそうしていきたい。」

I「深いですね。勉強になります。」

I「インタビューを受けてどうでしたか？」

A「こんな自分の経歴やくわしい話やなやみは、外の人にはしない。でも先生と勉強したり話したりしてる中で信頼というか…聞いてもらえると…先生の論文のためというよりは、自分のために聞いてもらったように感じる。聞いてもらって自分の心の中がスッキリした。」

I「ああ、実は、私もAさんの話を聞きながら、自分の人生や生き方について考えることが多くて、私こそ何か自分のためでもあったと思うんです。有り難うございました。」

## Bさんのナラティブ

### 1回目

B「朝鮮語と日本語は似てるところがあるので勉強しやすかったです。そのときは成績も良かったし」

B「自分は朝鮮族です。〇〇地方には朝鮮族が多いのです。〇〇地方では、中学から英語と日本語のどちらかを選べるんです。私は日本語を選びました。」

B「中学から…恥ずかしい」

I「最初は簡単でした？」

B「最初は、安かったです。でも、だんだん難しくなってきました。いろんな言い方…敬語とかが難しかったです。…それに外来語、英語を勉強していません。だから、外来語がぜんぜんわかりませんでした。」

B「私のところは朝鮮族が多いから、日本語も習いましたが、他のところはちがいます。大学から専門に勉強することはありますが…中国では漢族が大多数ですから、他の民族は少ないですから…漢族の学校ではみんな(中学から)英語を勉強します。私の学校だけ…」

B「〇〇地方には朝鮮族が多いんです。それは、昔朝鮮から移ってきた人がいたから。貧しかったりして、中国や日本とかに行った人たちがいました」

B「それに、小さい頃から、アニメは日本のものをやっていたし…よく見ました。」

B「その時は私の友だちの中でも一番人気がありましたね」

I「それもあって日本のことは少し興味があったんですか」

B「はい、それはありました」

B「大学を卒業したら、日本に来て留学でもしようかと思うこともあったんですが、いろいろな原因でそれはなかった(あはは)」

B「大学で日本語を専攻しましたが、日本人とは話したりすることはなかったですので、機会もないし、ただテキストだけでしたから、ちょっと日本で生活するもいいのかと思って…留学も考えましたけど…4年の後日本にいますね(笑)」

I「事情って？」

B「今の主人が大学卒業して、〇〇省の旅行ガイドとして働くようになって…私一人で来るのも…で私

もアルバイトでガイドをすることにしました…」

I「じゃあ、そのころからご主人と結婚しようと思ってたんですね」

B「はい(あはは)」

I「それってすごいですね。ご主人が日本に来ることがなかったら今も中国に住んでるでしょ」

B「はい」

I「小さい時から日本語やアニメに親しんで…日本語を専攻し、日本に来ることになったなんて…」

B「はい」

B「でも、〇〇年に震災があって、それでお客さんが減って…ガイドの仕事もだんだん減ってきて…主人もガイドをやめました。資格もありました。でも大地震があって…主人のいとこ、お姉さんとお兄さんが日本にいたので、それで、主人は日本に留学してこれから先なんとかしようと思ったんです。」

I「震災はご主人と Bさんの運命を変えたことになりましたね」

B「もし、自身がなかったら、今も中国で二人ともガイドをやっているかもしれません」

B「私は、中国で1年位その後、韓国で暮らすことになりました」

I「どうして？」

B「私の祖父母が韓国生まれだと聞いています。そして、昔住んでたところを見つけて、今また韓国で住んでいます。私の母も一緒に韓国で住んでいます。それで私も韓国に行った」

B「主人が留学が終わって日本の会社で働くことになって…日本に来ることになった時、最初はうれしかった。自分も大学卒業して、来たいと思ってたこともあったので…でも来た後は、寂しいがありました。主人はいますが友だちはいないし、両親も遠く離れていて…日本語も上手にできないし…それがちょっとなんといえますか(www)、自分がしたいことはありますが、言葉が出来ないのも、外には出られないのも、何をするにも不便になったので…なんかバカのように生活してるような…気持ちがあります。そんな時があります。その時は帰りたいです(あはは)…はい。」

B「でも、すぐにそうじゃなくなった」

B「こっちに来て、主人以外知り合いもない。それに、ガス代や税金や何かで、日本の人と話さないといけないけど…それが怖かった。自分が言いたいことは、調べて、こう言おうと勉強できるけれど、向こうが何を言うかわからない。同じ意味でも、日本では多くの言い方がある。知らない言い方をされたらと思うと怖くて、話せなかったし、銀行にも行けなかった」

B「何か…バカに暮らしてるようだった」

I「バカに暮らすって？」

B「主人がいない時、ガス代や税金のこと、言われてもわからない。自分で電話かけとしたいですが、何を言ってもいわかりませんし、電話するのが怖いです。簡単なことですが、自分ができないというのがあるってちょっとバカみていに思って…とても簡単なことですが、自分でできないのが…」

I「払う気持ちはあるし、払える。なのに、言うことがわからないからできない。それでバカ？」

B「はいそうです」

B「全部頼むといえますか…主人に頼んだ方ができます」

B「最初はこんなのも(識字学級)あるのも知らなかったです。それも主人があるかもしれませんからってインターネットで探しました。でも自分ではできませんでした。まだ、銀行に行ってカードを作ったときも、自分で行くのが怖いです。自分で話し合うのが怖いです。相手から話すのが全然わかりません」

B「簡単なのは自分でどの位のことが、自分で勉強していきます。でも自分が予想している言葉が相手から出ないときもあります。同じ言葉でも、ある人は一つの単語を選びます。でも別の人にはちがう単語を選びます。同じ意味なのに…すいませんもあるし、ごめんもあるし…そんな時は困りました。今も…」

I「最初は日本に来るのを楽しみにしていたけど、すぐに気持ちが変わっちゃった？」

B「はい。知らない人ばかりですから、主人はいますが…休みの時はショッピングがしたいけど、女の子は好きでも、主人は男の子だから、男の子はずっとショッピングはいやだから、自分で行くのはちょっと…その時は帰りたいです」

I「毎日は仕事だけど、休みの時は一緒にいてほしいですね。」

B「主人と話さないときもありますけど…その時友だちと話したいけど…友だちがいないから…」

I「ご主人とは話せるけど、友だちと話したいこともあるし…？」

B「まだこっちの友だちはそんな深いのではないから、自分の心の話をするのもおかしいですね。」

B「友だちもいないし、寂しくて帰りたかった。」

B「今も寂しい。」

B「日本に来る前は、ギリギリまで韓国で仕事をしていて。忙しくて、休みは1日しかなかった。休みの時は友だちと一緒にいたりしていた」

B「最初こっちに来たときは、休みがいいと思った。楽だと思った。でも、主人が仕事に行き出してか

らは、仕事してた方がよかったと思った。何もしてないのは、何だか無駄に過ごしてるようだ。その時から仕事したいと思うようになりました」

B「仕事してるときは休みたいと思いますが、本当に仕事がないときはおもしろくないですね」

B「休みののはいいですけど、やめるのはちょっと…」

B「だんだん忘れて…自分ではテキストだけではできないし、ここに来たら、友だちもできるし、先生も日本人だし、日本人とも話せるし…ショッピングだとちょっと会話するだけですから…他のことはしないですから、日本語勉強したいですから、教室を探しました。最初は学校に入りたかったけど、授業料が高くて…」

## 2 回目

I「帰りたい気持ちはご主人にはどんな風に話されたんですか」

B「いえ?主人には言いませんでした(はははは)。それは自分の考え…」

I「それはまたどうしてですか?だって日本では知ってる人はご主人しかいないのでしょ…結婚したのだからご主人なら何でも言えるんじゃないですか?」

B「はい、でも、主人の仕事はこっちにありますから、帰っても離れて生活しないといけませんから…そんなこと主人には言えなることはありません」

I「例えば言ったらどんな答えが返ってきたと思いますか?」

B「これは主人の問題ではありませんから、私が解決しないとイケないものですから…」

B「会社はここだから私のためにやめることできません。」

I「帰りたいけど、ご主人のこと考えたら、帰ることもできない」

B「はい…」

I「一人だったら帰ることもできる」

B「はい」

I「でもご主人と一緒にだから帰ることもできない…」

B「はい」

I「それはしんどかったですね」

B「はい」

I「じゃあ今はご主人には?」

B「今は、主人と早く帰りたいねって言ってます。」

B「主人の会社は中国にもありますから、契約した時は、5年間位日本にいたらその後は帰って中国で勤めることになっています。だから早く帰りたいねって言い合っています」

I「てっきりご主人に言ったと思ってたんですが…」

B「それは私の問題だから、話しても無駄だと思って言いませんでした。」

I「悩みを誰にも話せないってつらくなかったですか」

B「友だちに話しました。」

B「こっちに来たばかりで主人に話したら、主人に負担がかかるかもしれないから、話しませんでした」

I「じゃあ、それで、友だちに？」（中国や韓国の友だちに相談）

B「はい」

I「友だちは何と？」

B「友だちは私の方を…うらやましいと言っていました。でも、私はそうは思いませんでした。」

B「友だちは、せっかく日本に来たんだから、日本語勉強したらどうと言いました。私の専攻が日本語だから、もっと勉強したらと…言いました。卒業してから日本語を使う機会がなかったんだから、この機会にもっと勉強したらいいって言っていました」

I「そう言われてどう思いました。」

B「最初、日本に来る前は私もそう思っていました。学校に行かなくても自然に上手になると思っていました。でも、来たら、私の思い通りにできません。はい。だから最初はとでもつらいでした。」

I「識字学級にはどうして？」

B「自分で…道を探すしかできないので、誰に頼ることもできないし…外に出て、自分で言葉を覚えて友だちも作らないとと思いました」

I「帰りたいという気持ちが途中で変わったの？」

B「いえ、帰りたいのは今でも帰りたいけど、それは仕方がないですね。こちらに2・3年はいないといけないので…日本に住んでいる限り勉強しないといけません。」

I「言葉はわからないけど、生活しなきゃいけない」

B「はい、それが変えられない現実ですね」

I「よくここに来ることを決心しましたね」

B「ずっと家に一人でいるのがいやだから…」

B「勉強するのと、もう一つは家を出たいというのが…です」

I「友だちがいないから…自分一人で行けるところがスーパーだけでした。日本のスーパーは小さいので、30分位しかいけません。中国のスーパーは大きくて、2・3時間はいれます。それが楽しみです」

I「前に、税金のことで困ったと言っていたんですが…どうしたんですか」

B「電話番号が書いてあったけど、そこに電話するのが怖かったです」

「だから水曜日の先生のところに持って行って教えてもらいました」

B「教えてもらってよかったです」

I「前、やろうという気があるのにできないというのは、バカみたいで…って言ってたでしょ。質問して…うれしかったですか？それとも恥ずかしかったですか」

B「うれしかったです。はい。どうするかがわかったからです」

I「よく質問しましたね。もし質問しなかったら、またご主人にしてもらわないといけなでしょ」

B「その時は主人がいなかったので…」

B「それで、自分で電話をかけて、こちらのことは言えるけど、向こうのことはわかりません。その時は恥ずかしかった。…で、向こうはゆっくりと話してくれてやっとわかった」

B「電話すると相手の言うことはわからない…それより、識字学級で先生に聞く方がいいと思いました。だから真っ先に先生に書類を見てもらいました」

B「最初日本に来て、3月…登録証を手続きしたときは、少し自信がありました。主人が話をしている時間聞いていたら、だいたいは分かりました。だから自分で言っても大丈夫だと思って行きました。でも行って、ちょっと違うことが分かりました。思い通りにできないことが…話したいことはたくさんありますが、何から話したらいいか分かりません。相手が何を話してるかも分かりません。ただその中の単語だけで判断しました。それに登録の手続きは、前やっていた仕事と同じ事なので、だいたいのことは分かりました。だから自分で行きました。」

I「分かるだろうと思って分からなかったのは、余計自信なくしてしまった？余計怖くなったかもしれないね」

B「(笑いながら)はい」

I「だったら、自分で電話する前に識字学級の先生に話す方が楽だとわかります。」

「自分で進める人と進めない人がいる。申さんは、自分で進んだ。それはすごいことですよ。」

B「あははは」

I「分からないのに分かったふりをすることが恥ずかしいことだと思います。」

I「といっても、自分も分からないことを聞くのって、やっぱりはずかしかったりします。」

B「私も今はそう思います。」

「わからないと言って、何が返ってくるか分からないから余計恥ずかしい」

I「聞くのは恥ずかしいことではないんですね。勇気がいることなんです。」

B「今は、変わりました。ここでは分からないことがあれば聞こうと思います。」

「考え方が変わりました。電話だと相手分からないから、その時間違って分からなくても誰だか分からないから…そう思うようにします。顔が目の前にあると、どう思われるか心配なところがあります。」

小さい時のエピソード

B「小さい時、父の会社の社長から電話がかかってきたとき、韓国語でしゃべられると何を言っているのかわからないので、そのまま電話を切りました。もう一回電話が鳴るととらない。今の人かなと思って…」

「ちょっと知っていると、相手はこの人言葉が分かると思われてしまう。それはそれで困るんです。」

3回目

I「識字学級に来てから変わったことは？」

B「日本語を勉強するというだけでなく…ここに来ると日本人の先生や友だちとも話すことができます。…日本の文化というか…この前も、料理教室ですか…巻きずしとうどんを作りました。スーパーで売っているのはありますが、自分で作るのにはできませんでした。作り方もわからないし、レシピもないし…食べたことはあっても、今までだったら、わかるのは食べた味だけで、それを真似て作ることはできなかった。そういうことが分かるようになりました。」

I「日本と繋がっているという感じですか？」

「ああ、はいそうですね」

I「気持ちの上では？」

B「ここに来て、仕事でしんどくても、休まずに来ようと思うようになりました」

I「これからはどうして行こうと？」

B「できれば早く中国へ帰りたいです。何よりも安定したいです。日本で安定できるなら、長くいてもいいですが…正採で仕事がしたいです。でも、今30でしょ。これから5年経ったら35才、今より仕

事が見つけられにくい。経験がないですから…」

I「日本語ができるということは経験にならないんですか」

B「会社に入ってからだ、それは経験として生かされますが、その前に会社に入る時には、今はなにもない。中国では旅行関係の仕事をしていたり、オフィスで、ビザの申請の仕事をしていたりしましたが、それもすぐにやり方が変わります。日本にきている間にもやり方が変わるかもしれません。だから、間があいているので何も知らないと一緒にです。今からそれを勉強して…安定を考えると、早く帰りたいです。」

## Cさんのナラティブ

1回目

I「Cさんはどちら出身なんですか？」

C「〇〇省です。南の方です。」

I「小学校・中学校は自分の生まれた〇〇省で過ごしたんですか」

C「実は、小学校を卒業して、家を離れて生活してました。中学は自分で生活していました。しゅんせつもあったけど、泊まらせてもらった1週間ほど…」

I「へえ、中学から親元を離れて…中国では一般的なんですか？」

C「いえ…実は自分の周辺の所ところはいい学校がなくて…うちではそう考えた…」

I「じゃあ、それはお父さんお母さんが考えた？」

C「…自分で考えた…いやよく分からない。」

I「小学校卒業した位だから自分でって言ってもよくわからないこともありますよね。さびしかったですか」

C「もちろん、夜はさびしかった。」

I「帰ろうと思いましたか？」

C「はい、他の人たちは自分の家…近くからですから」

I「そうですね。他の人たちは近くから来てますからね。だいが家から離れてたんですか。」

C「同じ江西省…でもバスで2・3時間はかかった。実はあの頃は私も小さかったし、とても遠かった」

I「さびしくて、自分の家の近くの中学校に行こうとは思わなかったですか。」

C「それは思わなかった。自分の進路のために！それに交通もあの頃は不便だったし…」

I「ああ…帰りたくても帰れなかったというのもあるんだ…。どれ位で慣れました？」

C「あー」

I「新しい友だちもできて…寂しさがなくなってきたのは、どれ位たってからですか」

C「もう、その時は自分の身の回りの人との関係がよかったので、早くのうちに慣れた」

I「よかったですね。」

C「やはり、同じの言葉同じの生活習慣なので…」

I「同じ国の中ですもんねー」

C「やはり日本とちがうし…自分の国を離れての生活とはちがう。外国は生活習慣も違うし、言葉も違うし…それから長い時間もかからなければならない」

I「そうかー。今までCさんは日本に来て半年位たったでしょ。やはりまだまだ日本には慣れないでしょ」

C「日本はまあまあですけど、もしアメリカとか他の国だったら時間がかかりますけど、生活習慣も…でも日本では生活習慣もまだ似ています」

I「同じアジアですもんね。」

C「うん」

I「それでも中学校の頃は同じ国だしすぐに慣れたんですね」

C「うん、それにあのときはまだ小さいでしたから、何も考えずにすぐに友だちになりました。」

I「で…高校は？」

C「高校は…いい学校に合格した…ははは…あの時は自分の才能のおかげでいい学校に合格した。絵を描く才能で…」

I「はい、じゃあ、もう高校に入るところから、今やりたいと思うようなこと、デザインの…を目指していたんですか」

C「いや、あの時は、デザインは何も(やっていなかった)…ただ進学のために、得意な絵で…」

I「芸術の学校に行った訳？」

C「いや、中国の学校は、自分の…絵とか音楽とか体育とかで受けれるから…自分の得意な絵を選んだ」

I「日本では、国語とか英語とか…全教科受けないといけないのにシステムも違うんですね。」

C「今はいい訳ではないですね。進学のため…興味じゃなくてもないのに…目的のため…よくないです…」

I「Cさんは、元々絵を描くのが好きだったんですね」

C「はい…だから今は少し悲しいですね。」

C「高校ではあまりよくなかった。勉強はしなかった。同じ入った人は同じ教室で、みんな遊んで…あの時は何もしないし…パソコンゲームばかりやっていた。今は後悔しています」

I「僕も、学生時代あまり勉強しなかったから後悔はあります。」

C「同じクラスの女の子もいっしょに遊んでいましたから、学年が上がったときクラスが別れました。」

I「遊んでいる者同士一緒のクラスにしていたらだめだと…」

C「成績は全クラスでも悪いでした…」

I「僕は高校の時はそうでもなかったですが、大学の時は勉強しなかった。それを今後悔しています。」

C「あの時は…って」

C「でもね…高3生の時は…学校で少しの間停学になりました。」

I「勉強しないから？」

C「いえ、学校の規律を無視して夜は勝手に外に遊びに行き、見つかって処分になりました。」

C「高3の後半は、自分の進路のことを考えて、勉強しました。でも、長い間勉強してなかったから…だめでした。卒業試験の時には全くできなかった。〇〇年の時です。その時は〇〇で大地震が起こって…〇〇の大学は要求が低かった。」

I「学生が集まらないからですね。」

C「他の人は、地震で怖いと思いますけど、私は…要求が低いから入れるから…」

I「ああ、他の人は怖いと思って受けないけれど、Cさんはそれをチャンスにしたんですね」

C「うん、そうです。」

I「それでも地震が来たら怖いとは思わなかった？」

C「思わなかった。どうせ、大学は受からなかったから、〇〇省は要求は低い…もう一年勉強したいとお母さんに言ったけど、それはダメと言われた。だから勝手に〇〇の大学の(願書)を書いて出した。」

I「お母さんは、その年大学に入らなかつたら、もう行かなくてもいいと…」

C「だから、神様がもう一回機会をくれたと思います。だから、今度は勉強しました。」

I「すごいな、僕は識字学級でのCさんしか知らないから、いつも一生懸命やっているから、高校ではそんなことがあったんですね」

C「うん」

I「大学に行っている間に今の勉強をもうちょっとやりたいなと思ったんですか」

C「実は、1年の時はまだそんなに興味はなかった、だんだんやりたくなってきた」

I「そして、卒業してすぐに日本に来ようと思ったのですか？」

C「いや、そうではない。実は、3年生の時は、北のとても有名な会社に…」

I「内定？」

C「うん、でも私は行かなかった」

I「どうして？」

C「やはり…大切なことに…古里に遠かった。」

I「中国で働くのは故郷に近いところという」

C「はい」

I「でも有名な会社だったんでしょ」

C「はい、でも働くには家族の賛成も…それが得られなかった。中国の交通はいいわけではない。電車で30時間ほどかかる。」

I「いくらいい会社でも家族と離れてはね」

C「実はね、〇〇省の近くは発展していて、いい会社もたくさんある。でも、自分の成績が悪いせいで断られました」

C「一般的な中国の会社は英語の証書をとらなければならない。私は4回の証書をとってなかった。北の会社は、私の能力を見て、卒業までに4回の証書をとるように言われた。契約書も書いた。卒業までに4回の証書を取る約束だった。でも取れなかった」

I「それで、日本に？」

C「実は、中国の工業デザインのレベルは低い。それならもう少し勉強したい。中国の教育方法もあまりよくない。」

C「その国の発展によって学問の発展状況がわかる。だから日本の工業デザインは発展している。中国の工業デザインは…専門の分野もあまりよくない」

I「なるほど…じゃあ、Cさん自身は専門の勉強を日本でしようと思ったけど、まわりの人は反対しなかった？」

C「実は、恥ずかしいこともありました。大学では彼女もいました。私と彼女の関係はとてもよかったです。でも、家族はずっと反対してました。だから、家族は日本に来ることになったら、彼女と別れることになるから…」

I「彼女と別れるんなら…と」

C「うん、すぐに賛成してくれました。」

I「日本に来るのはいい。でもCさんにとっては、彼女と別れるというのは…ちょっとつらいことだったでしょ」

C「うん。」

I「それは大丈夫だったですか。」

C「うん、今はちょっと後悔している。もう一度チャンスがあれば…日本に来てはいない。一つ言えることは、一つ手に入れるともう一つは手に入らない。」

I「もし機会があれば日本に来ていないというのは」

I「一つは…彼女と別れたくない。もう一つは社会に出たい。…大学は出たけれど、社会は経験していない」

I「今、日本で言葉も分からない。それに大学院への道もまだまだ遠い…それで落ち込んでいるのもある？」

C「後悔して、自分が選んだことに何もしないというのはいけない。自分で選んだことは自分でやり通す」

I「ああ、Cさん、えらいなあ。」

I「ただ、もう一度チャンスがあったら…」

C「うん、やはり社会を経験したい。学校で学ぶよりは得ることが多い」

I「人間で、ああいう風にいるなければ…と後悔することって多いけど、Cさんがえらいのは、前に進んでいこうとしていること。そう思っても戻ることはない。だから進もうと…」

C「うん…」

I「その気持ちは応援したいと思うなあ」

C「うん」

I「もう一つは、日本に来て、友だちは何人かいてるけど、日本人と話したりすることがなかなかできない、そんなしんどさがあるかな。」

C「うん、ありますね。」

I「もう少し、日本の人と話せるようになったら、心も穏やかになります？」

C「最初は日本語の先生も何を話してるかわからない。で、全然自信もなくて…」

I「それなのによくがんばりましたね。この半年。どうしてがんばれたの？」

C「実は日本に来る前、中国でも3ヶ月ほど日本語は勉強しました。文法とかは勉強しが、しゃべることとは全然できない。だから日本に来て、自分よりもっとできる人がいるなって…先生と話すこともできないし…だから1ヶ月の学生休みのときは、毎日テープを聞きながら覚えました。それでかなり覚えました」

I「Cさんは、自信がない。でも自信がないから一生懸命やる。それがすごいなあ。多くの人は自信がなかったらやらないというのが多いかもしれない。」

C「実は、もう一つあります。学校の休みの前はアルバイトを断られました。あの時は、店長が何を話したか分からなかった。だからもう一回何を言っているかをわろうと…だからテープを毎日聴いて、だから上達しました。もう一回同じ店で受けた」

C「日本に来る前は、来て必ず一ヶ月で仕事を捜すという考えがありました。でも、日本に来て断られたら…困る。だから…」

C「実は…思ってるより、日本語は難しい」

I「識字学級にどうして来ようと思ったか、今日最後に聞かせてくれますか。」

C「どう勉強したらいいかと思っていた。ある日友だちにこういうところがあると紹介してもらった。一緒に行こうと言いました」

I「じゃあ、最初はここには友だちと？」

C「最初は3人でここに来ていた。一ヶ月後、私だけになった。」

I「一緒に来ていた二人がやめたら、自分もやめようと思わなかった。」

C「彼たちは高校生なので、ちょっと遊ぶ気持ちがある。」

I「Cさんは、もう高校生じゃないし(笑)」

C「(笑)うん、ちょっと落ち着いて…ね」

## 2回目

C「バイトが減って…やらないといけないこともたくさんあるし、減らしたのもある。店長からの連絡があまり来ない」

I「自分から減らすのはいいんだけど、やれるのに店からの連絡がないというのはつらいですね。」

C「授業も入れたし、減らしたけれど、予想より少なくて…。」

I「月～金はバイトを入れたくないんですね」

C「はい。でもまあ、他の子が行けなければ、連絡があって、手伝っていました。いつも応援というこ

とでしてました」

I「それが少なくなったんですね」

C「はい」

I「こちらの希望を言うのが影響したのかもしれないですね。店の都合で来て欲しいのでしょうか。だからCさんは何も悪くないですよ」

C「ええ。この2・3ヶ月は重要です。日本語の検定と大学院の研究計画書の作成と…もしバイトが入

れば、勉強できなくなる。だから、バイトが少ない方がいいと思うようにしています」

I「最初に出会った時は、元気一杯で、5

月病なんてないように話していたでしょ。この前のインタビューでは、少し弱音をはいていたでしょ。

それは？」

C「少しありますね。日本に来て、日本語なかなか上達していない。それで…焦りもあります。」

I「焦りますね。でも、Cさんは、前向きに勉強しようとしている」

C「それは当たり前です。」

I「大学に入れるチャンスをもたらったことが影響している？」

C「うん、やっぱり人間として成長して…生活も落ち着くとかしないといけません。」

I「強いなあ。」

C「すべて私の話通りに(強いと)思うのはダメですよ」

I「どうして？じゃ、弱いの？」

C「それは違う。」

I「前に進もうとしているっていうことかな」

C「はい」

I「2週間で気持ちが変わった？」

C「この前は、バイトが多くて、それで疲れていました。勉強のこと考えることもできなかったです。

でも、バイトも減ってきて、考える気持ちが出てきた。自分の時間が決めますから。困ることは、研究計画の資料を作ること…。中国語を日本語にするのが難しい」

I「識字学級に来るのはCさんにとってどう？」

C「実は、毎週1回では、日本語が上達するというのは無理です。でも、話し合うことで、相手から知識をもらえることができる」

I「ああ、そういうことかー。コミュニケーションということですね。お互いが話し合うということがCさんにとって意味があるんですね。」

C「そう、いろんなことが分かります。」

I「僕と話していて、そういうことある？」

C「いろんなこと…日本の生活とか文化とかわかる。歴史とか、自分の知識とか生活の経験とかが理解できるのがいい」

I「前、社会に出たいと言っていましたね…」

C「うん、うん。自分の困ることをアドバイスもらえて助かる。」

I「自分も中国のことは知らない。Cさんから聞いて一生懸命生きてること、国が違っても同じなんだとわかってよかったというか…そんな気持ちがあります。」

C「お互いそうなんです」

I「この教室はCさんにとってどういう意味があるのですか？」

C「友だちにここを紹介してもらって、最初は日本語を勉強したいと思った。でも、だんだん来てるうちに、自分の考えは変わってきた。話すだけでなく、探していくというか、人と人との関係とか、知識の交流とかを通して明るくなりました」

I「明るってどういう意味？」

C「…」

I「わかる、元気になる・安心…というように使うけれど…」

C「ああ、安心したというのが一番ぴったりです」

I「ここは安心できる場所という意味があるんですね。」

C「1時間半では、日本語を覚えるというのはできない。話し合うことで、得られるものが大きくなってきた。人との繋がり方とか…」

I「有り難うございました。異国の地で一生懸命生きているCさんのこと、応援しています。それに、弱音が吐きたくなったら、また話してくださいね」

C「ありがとうございます。ここで…河合さんと一緒にこうやって話せたから、しんどいことも言えた。また、お互いによろしく願います。」

## Dさんのナラティブ

1回目

I「よろしく願います」

D「私の自己紹介をまず…家族もみんな先生で、私も中国の教育の大学で学びました。そして卒業して10年は先生をしていました。大学に入るまでは、理科が苦手でしたが、最初の授業で元素記号を100書いてごらんと言われて、描いたら自分以外はうまく描けず、先生が”すごいね”と言ってくれました。それから化学の勉強をして、理科の先生の資格を取りました。それで、小学校から短大まである学校に勤めて理科を教えていました。教務の仕事もして、割と優秀な教師でしたから、今度は国語も

教えてほしいということで、国のお金でもう一度大学で国語の資格をとらせてもらい、戻ってきて、国語も教えるようになりました。」

I「なるほど…」

D「それから行政の仕事もやるようになりました。中国での後の10年は役人になったのです。教育関連の仕事です。日本でいうと教育委員会のような仕事です。でも、私は政治的な仕事より、直接教育、子どもを教えることの方がしたいと思っていました。でも自分のやりたいということを見せてもらえることはないので、それで仕事をしながら、仕事が終わったら塾で理科・国語・英語も自分で勉強して…教えていました。」

I「そうなんですね」

D「そのうち、教える仕事が中国で思うようにできないなら…と外国に行って暮らしたいと思うようになりました。国のお金でMBAの取得のために留学を薦められたのですが、考えた末やめました。そして、自分で法律を勉強して弁護士になろうと思いました。中国でも弁護士はお金がたくさん入ってきます。それが第一の目的でした。」

I「なぜ方向転換をしたのですか?」

D「ところが、父が倒れ、介護しなければならなくなった。政治と法律の勉強が中心でした。政治の方は、仕事と関係あることなので、休んでも分かったが、法律の勉強は今までやったことがなかったので、休むと分からなくなった。母は”あなたは勉強をそのまま続けなさい”と言ったが、母一人に負担をかけたくなかった。父母の人生は一つなので、大学院は2年でやめました。授業料は4年分払っていたけれど、それでもいいと思った。そして仕事しながら介護に専念しました。やめて、2か月後に父は亡くなった。だから後悔しなくて済みました。」

I「いろいろあったんですね」

D「次に、それなら、外国に、それもアメリカに留学したいと思った。弟は国語の教師から今は警察の仕事をしていますが、弟も留学したいと思っていた。でも弟は奥さんと子どももいたし、私の方が留学しやすかった。でも母は”ダメ”と反対しました。一つのことをやりとおすことが大切だと…その時私も仕事をしていましたから、それをやり切ることが重要と母は考えていました。そして、ビザも下りなかった。それで、日本に変えました。」

I「それで日本に来られたんですね」

D「日本に来て環境が変わって、特に食生活が変わった。日本のごはんは硬いし、お弁当を持っていく習慣もあって…胃が痛くなって、2か月たって医者に行った。英語でここがいたいと言った。日本の医者は英語もしゃべれる。すごいです。そうしたら、何も炎症もないとのことでした。薬は中国から

送ってもらって…朝はお粥とバナナ以外は食べないようにしていると自然とよくなっていきました」

D「日本に来て 15 年になります。最初の 1 年は専業主婦をしていました。職場の上司は仕事は中国の仕事をそのまま続けたい。日本で学んだことを中国に戻った時に講演会で話したりすればいいと言ってくれた。しかし、2 人の子どもの保育もあったし、仕事はやめた、こちらの東北地方の市役所が雇った、日本に渡日した人の子どもの言葉を教えたり、武術(太極拳)を教えたり、保護者にいろいろ生活習慣を教えたりする仕事につくことになりました。ただ、仕事は曜日で場所が違って移動しないと行けなくて、距離が遠くて、やめたいなと思っていました。長男が大学に入ったのをきっかけにその仕事もやめました」

D「〇〇で災害があり、ちょっとこわくて住めません。それで〇〇の専門学校で教えることになりました。ちゃんと日本語を勉強したくなりました。それで〇〇に来ました」

I「〇〇からなぜ〇〇に?」

D「〇〇に来て、日本語を勉強するために、自分で、インターネットで調べました。最初交流センターに問い合わせ、日本語教室を紹介してもらってここに問い合わせました」

I「なるほど、それでこの識字学級に来られるようになったんですね」

D「日本人のように話したい。中国の家族はみんな優秀で、一つのことをずっと進めていくということを大切にしています。だから私もそう思うんだと…」

D「子どもとは家では中国語で話してきた。中国から来た子どもにも教えていた。だから、日本語を上手に話そうと思わなくてもよかったところがあります」

D「でも、日本に長いこといるのに日本語を正しく話せないのは恥ずかしいなと思います。」だから日本語を上手に話さず」と思います」

D「弟が、中国語の文書を日本語に訳す仕事を依頼してきました。」何年もいるのにできるでしょ」と…でも、できないという、”できないの!”と言われた」

D「中国では、私くらいの歳になって勉強するのは遅いと言われます」

I 「そんなことはないと思いますよ。自分もこの歳でまだ学んでいます」

D 「ありがとうございます。」

D 「いつかは日本語のボランティアがしたいです。どういう風に覚えてきたか、身をもって体験している。文法を覚えるのが難しい。発音やアクセントがなかなかうまくできない。だから、自分が日本語をちゃんと勉強して日本人のように話せたら、今度は教えたい。今は目標で、それはできないかもしれない。でも目標を持つことは、必ずアップにつながります」

I 「今まで、日本の生活、子どもを育てるということに必死になって来られた。それも一段落してきた。ふと、自分自身のことを考える余裕ができたのも理由の一つなのではないでしょうか」

D 「ああ、そうなんです!」

I 「識字学級で学んでどんな風に感じていますか」

D 「〇〇のいろいろ…町の人と接することができる。そして同じ中国から来た人で日本語の上手な人と知り合いになって話したい。そして日本語の先生になりたい」

D 「弟は、今教育関係の役所の仕事をしていて、日本の習慣や文化を日本語で話せと、講演の仕事ができます。日中の関係についても教える仕事もできます」

I 「それはきっと、Dさんが中国で育ち、教育に携わり、その後日本で生活したすべてのこと、一生懸命生きてきたことすべてが繋がる仕事になるんですね」

D 「そんな風に言ってくださるとうれしいです」

D 「識字学級では、仕事場のことも聞くことができます。私は、ニュースにも関心があるので新聞もよく読みますが、どう読めばいいのかわからない時、ここでは聞ける人がいます」

I 「ああ、ここでは日本語を学んでいるというだけでなく、ここで学ぶことで、社会と繋がっているという感覚があるのでしょうか」

D 「そうなんです!」

D 「本やインターネットからではしっかり学べない。人から直接話を聞くことでよく理解できる。その後、もっと知りたいことがあれば自分で調べることもできる」

I 「それは、生きた情報ということなんですね」

D 「そうなんです!」

D「識字学級は、ここだけではなく、他も何か所か行っていますが、ここは特に雰囲気がいいです。大体が1対1です。でも受付の雰囲気とか、学期末には交流会があったりするのがいいです」

D「ちょっと不満もあります。勉強がしたいと思っているので、時間が短いことと、来てすぐに先生が付かないことです。”ちょっと待ってください”と言われることです。その時間が惜しいです」

I「もっともっと勉強がしたいんですね」

D「はい、よくわかってくださってます」

## 2回目

D「言葉の話ですが、河合さんは方言しゃべりませんか」

I「教師を長年していたので、それが影響しているかもしれません」

D「標準語と〇〇の方言について…。東京の言葉に比べて温かい感じがします。日本の子どもは、〇〇でも方言と標準語もしゃべれる。すごいです。中国では、〇〇だったら、〇〇言葉しか使いません。」

I「それは、日本が地理的に狭いこと、TV放送が基本的に標準語というものもあるのかもしれない」

D「なるほど…」

I「…で、この前、東京から大阪に来た話をされましたが、なぜ東京、そして大阪だったのですか。」

D「東京では専門学校で教えていました。その時は1・2ヶ月に一度は〇〇に帰っていました。そして、震災です…。何日か前から中国に行く予定でした。でも震災が起きて…、大変でした。電車が止まっている…〇〇に帰りたくても帰れない。校長先生には、中国に行けないかもしれないと話していました。校長先生は、そんなこといいから気にしないでいいからと言ってくれました。…母は、“中国に帰ってきなさい”と言いました。」

(この間、〇〇に帰った時の、一関までご主人が車で迎えに来てくれたこと、道路が寸断されていること、家の近くが道が陥没していること、本棚から本が飛び出して、ガラスが割れていたこと、その始末に1ヶ月位かかっていたこと等語られる。)

D「母は、そんな危ないところにいたらダメだと…。でも、こっちには子どももいる…家族で中国にと考えましたが、主人も子どもも住み慣れたところなので、中国には行きたがらない。だから、私

も考えました。…〇〇なら、まだ地震も大丈夫かと…。東京は仕事も多い。情報は入りますし、▽▽にも行ったり来たりしやすいです。〇〇は地震の心配が(東京に比べると)少ないし、人が親切です。道も分かりやすい。友だちにも相談した。〇〇と△△どっちがいいと。友だちは“△△!”と。それで、空港に降りて、すぐに家を探しました。最初は家族も来るからと、広い部屋を借りました。でも、なかなか来ないので、シングルの一人用に住み替えました。」

I「ところで、中国で優秀な教師として役所にも勤めていたのに、安定ということなら、中国にずっと留まる道もあったと思います。なぜ、アメリカに行こうと思われたのですか。」

D「中国にいたら、地位もあるし、仕事も安定しています。中国では人間関係が大切で職場の人間関係もよかった。でも、アメリカに行けば、技術も高いし、いい大学もあります。アメリカに行って、博士をとって戻ってきてお金もたくさん得られて、家族にも渡せて、よい暮らしをができます。だから、みんなアメリカに行きたがります。でも…VISAを2回申請しましたが、ダメでした。理由は分からない。その時アメリカと中国の関係はよくなかった。それに公務員というのもよくなかったかもしれない。それは自分が考えているだけです」

I「うまくいかないことも体験されているんですね。そこで、中国に留まるということもあったと思うんですけど、今度は日本に…それはなぜ？」

D「政治の影響があります。その間、アメリカや日本はどんどん進んでいきましたが、中国は止まっていました。それで、中国にいても仕方がないと思いました。」

D「日本は、漢字を使って言葉も簡単になって、顔もよく似ている…黄色人種だし、こんなに難しいと分かっていたら、来なかったかもしれません。安定したら、日本に家族全員連れてくるかなとも思っていました。」

### 3回目

D「席を譲る時、なぜ日本では、女性が立っていることが多いのでしょうか」

I「日本ではだんだんレディーファーストになってきたんですが…まだそういうところはありますね」

D「中国では共同…日本だけ違います。どうしてですか？」

I「少しずつ、女性の地位も上がってきているんですが…まだまだでしょうか。」

D「働く女性も、男性が有利ですね。家でも…風呂も先でしょ。男が…女性の方がきれいにしないとい

けないのに、絶対男が先です。だから来た当初はシャワーだけしかしませんでした。今はそんなことないけど…」

D「中国では、女性の方が学歴高い。女性の方が勉強も頑張る。仕事場でも地位が高い。だから、中国では、女性の方が帰るのが遅いことがある。だんなさんが先に帰って、ごはんを作ってることもあります。でも、(日本では)台所は私の場所みたいですね。だんなは頭硬いから、変化は難しいから…」

D「日本の奥さんは、一言でいうと、私の感覚ですけど“つらい”の一言です。二つ目は育てることです。決定権が女性にないです。子どもの進級にしても、全く私の意見を聞かない。家庭で買うものは、だんなと相談しないといけないし、お金の使い方も、決定権がない」

D「どっちも能力あるなら、総合的に決めればいい。でも日本は、学識や能力ではなく、男性を中心に考える。だから共同ではない」

D「一つ目の差は、“視野”です。だんなは視野狭い。日本だけしか知らない。二つ目は会社です。だんなは、一つの会社で一つの仕事しかしていない。私は、中国でも、教育はもちろん、いろんな計画もしたし、赤ちゃんから大学生のことまで関わった。会社にも行った。こっちに来てからは、経験のために、レジもやった。コンビニでも働いた。パチンコもどんなものか興味があつて、夜行つて働いたこともあります。三つ目は、ずっと学び続けたい。新聞も読みます。一つでは足りない。3つ4つ読んだりしたい。でもだんなは、TVだけ。考えも古い。頭が硬い。四つ目は教育方法が合わない。」

D「5～6才は中国で学ばせたかった。母が教育者なのでちゃんと育てられる。行っている間に、小学校一・二年の学習内容は教えられる。中国語も覚えられる。義妹(弟の嫁)を通じて現地の日本語教師にもお願いした」

I「ああ、Dさんて、中国と日本をつないでいるような気がします」

D「そう、そうですね」

I「識字学級は、Dさんにとってどんな意味がありますか？」

D「まずは、分からないことを是非知りたい。私は、 $1 + 1 = 2$ がわかったら、次は、 $3 \times 4 =$ が知りたい。そう勉強してきました。本当は $1 + 1 = 2$ がわかったら、次は $1 + x =$ というように深めていくのがいいかもしれませんが…でも、年をとり記憶する力が低下しました。人には寿命があるから…最近は大くよりも一つのことを深くという方に変わってきています」

D「それに、人を通して、日本の習慣に触れたり、その人の考えから学んだりしたい。識字学級は、それができるところです」

I「これからはどう生きていきたいですか。」

D「人生の目標は一つ目は、“健”です。まずは元気でなければ何もできない。二つ目は“勉”です。これは生活する、生きるということにつながります。三つ目は“工”です。ちゃんとした仕事をしていきたい。四つ目は、“孝”です。母の孝行もしていきたい。そして、五つ目は“楽”です。望みを持って生きていくということです」

I「インタビューを受けての感想を教えてください」

D「最初は、不安がありました。それは、日本語が足りないから、理解してもらえるか不安でした。思い考えがちゃんと伝わるかです。でも、最初から先生との距離感が近いでした。通じるものがあるというのか…教育者同士というのもあったかもしれません。だから、話しやすかったし、何でも話せた」

D「3つ目は、尊敬というか、先生は一生懸命ですし、学ぼうとしている。だから、自分に励ましをもらえているようでした」

I「それは、私もなんですよ。自分も励まされているようでした。貴重な時間を有り難うございました」